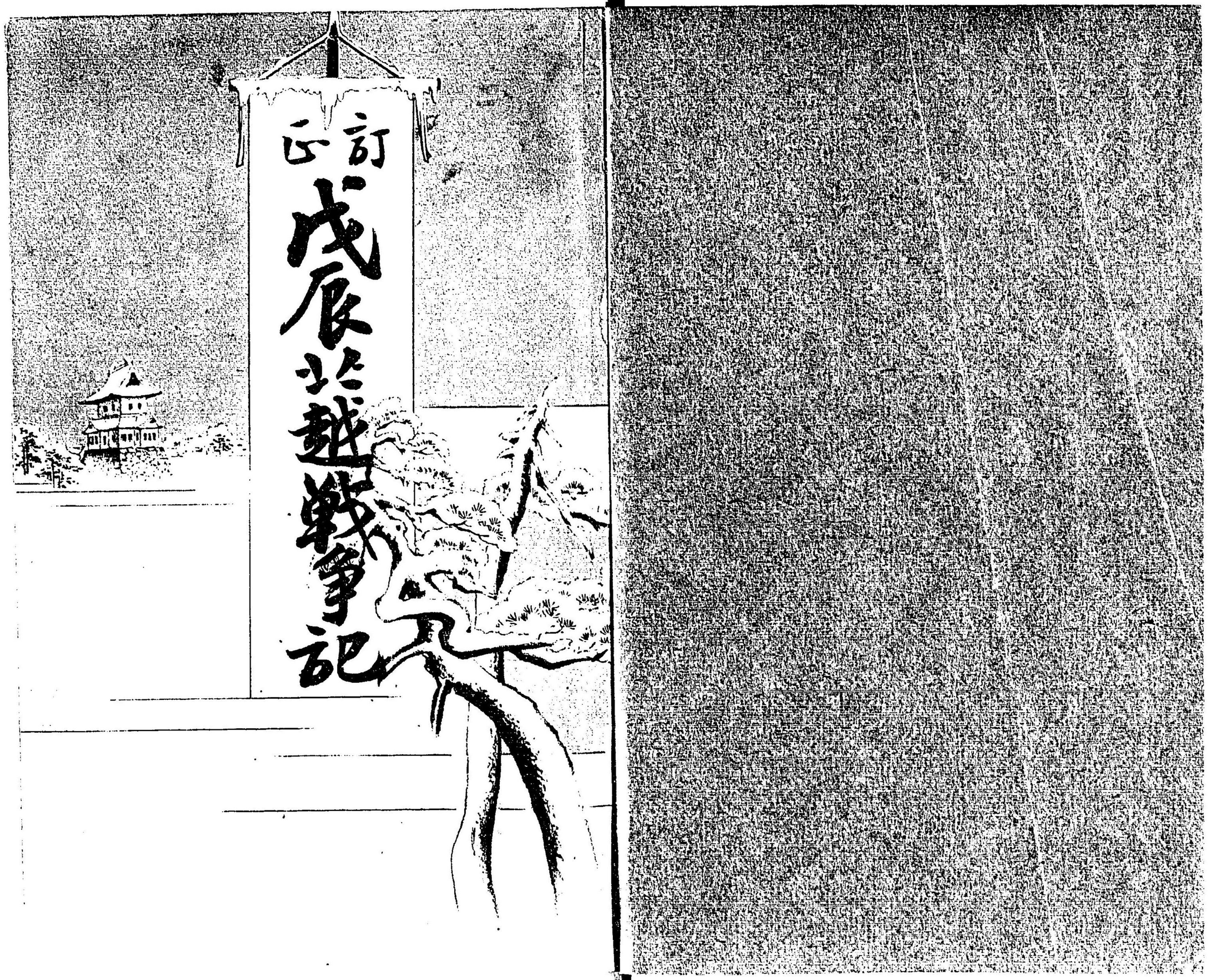
訂正
戊辰北越戰爭記

42-207

A11865/XXVI

野口圍一郎編輯

訂正 戊辰北越戰爭記

東京 目黒書房發兌

戊辰北越戰爭記序

益御安健奉賀候過日は貴翰に接し戊辰の役舊藩の事蹟御編纂右序云々に付御校合書類の内壹册御示被下拜見致返上仕候御收手被下度候編纂の事に付ては若し遷延年月を經過致候はゞ邈然端緒の尋ぬへきなきに至るへし今日實地經歷の諸先輩遺存せらるゝに及て此に從事せさる可らすとて識者の意を此に注かれ候事は小生輩も竊に耳を傾け居り候貴君の此勞に服され候は誠に不可已の御事業乍憚御勉勵被下候樣所希候但序文撰著の儀は前に申候通り諸先輩の在る有り小生等の喙を容るゝ所に非す强て之を爲すとも亦貴著の體面に於て分毫の裨益も無之事に候然し何か別に都合も有之事に候へは徒に煩を厭ひ勞を避け候譯には無之猶御考案被下度候偖嘗て三島翁の說話を承り置候此說話は戰

死供養の法會に於て翁の口演せられし所の由今節畧して其大要を擧く曰く戰爭後の始末方に付苦慮奔走東西兩京へ往來の際自然諸藩の人々に邂逅し談戰爭の事に及ふ毎に長岡は小藩なから强かりし義理堅き藩なりし抔申されたり殊に或る方の遠行を送りし時にも前同樣再三稱美せられし故懇意の方なり其時申候には長岡の如きは我々始め固陋にして事に通せす不都合なる戰爭を致したるは恐入たる次第なり但國難に從ひ死生之を以てしたるは舊藩主先代以來の教幷に執政先輩の導く所一藩の風となり武士たる者はかくあるへき者と厚く信し固く守りたるまての事にて御稱美に預るは却て恥入たる事なりさるをかく申さるゝは國の爲めからはいと歎かはしき次第と存するなり如何となれは櫻島下ノ關の役の如き國内にては飛ふ鳥を落す勢ある强藩にて

すら猶數日を支ふる能はさりしと承りしなり果して然らは我國の者は猛省して務る所あるへき儀と存するなり豈甲乙强弱を論するの時ならんやと御答致し候へし云々右は翁の說話の大要なり戊辰の役は我長岡は尤悲酸の狀を極め御互に活き長らえて今日文明の化に沐浴致し候は實に夢幻の如き次第に御座候乍去萬國交際日々に大事に赴き候有樣決して戊辰の心を忘るへからすと愚昧なからも時々感激致し候御編纂書の序文何か御都合にて急速出來立兼候儀ならは此等の說話を以て卷端に御記入有之以て序文に換へ候ては如何にや思出し候まゝ書取り備貴覽候右拜答迄如是御坐候也

明治廿四年九月廿三日

田中春回頓首

野口團一郎君文机下

戊辰北越戰爭記序

戊辰之亂、余常備日誌、嘗次于六日市也、會觀萩藩時山氏之日誌、紀事周密、細大不遺、我獲之而大資於悉彼情焉、余悵然久之、謂時山氏者長之俊也、而今已矣、安知余亦不爲時山氏乎哉、於是乎、日誌遂不作也、今茲辛卯之夏、知友野口氏、草戊辰紀事、來請余之一瞥、且求其材料、嗚呼余刑餘幸浴聖明之優恩、得全餘喘於今、先若不廢日誌、則或以足裨氏之史料者歟、余尪弱進而不能爲時山氏也、退而不能遂日誌也、進退兩失之、今方訂此稿、殆憮然恨死矣、既而稿成也、氏又責弁言也、亟乃書所感者、以塞其責云、

明治辛卯仲秋下澣　閑鷗秦勝序

東軍將士

上杉主水
中村七良右エ門
佐川官兵衛
松浦秀八
水元新吉
町田老之進
吉屋作左エ門
千坂太良左エ門
朝日奈弥太郎
市川三左エ門

長岡將士

官軍將士

讀者諸君に一言す

本篇一度江湖諸君の眼に觸るゝや意外の賞賛を博すると同時に亦種々の攻撃を蒙むり殆んど辭をなすに窮すること屢々なり卷中多少の誤記ありしは之れ編者の注意至らさる所ろにして恐惶謝するの外なきなり然れども左の二點に至ては謹んで編者の意表を辨訴し敢て深察を乞はんと欲するものあるなり

第一　事實を編輯するに日誌流を以てし甚た興味薄き事

第二　名を北越戰爭記に假り其實長岡藩の記事七八分を占むる事

若し本篇編輯の目的をして小説の意志より成らしむるものなれは勿論許多の興味を添へ佳人才子の愁歎場より忠勇義膽の活戰に至るまて種々面白き事柄を加へ得へしと雖ども如何せん其主

たる目的は事實の正確にあるを以て勞ひ脚色に點花すること能はさるなり特に當時は昔と違ひ矢丸を以て瞬間に勝負を決するもの故勇者も怯者も運次第にて其形容詞の如きつまり彈丸雨飛位に止まり、彼の加藤清正の山路將監に於ける若くば姉川大合戰の如くに記述し能はさるは讀者諸君の知る所なり尤も軍畧上に就ては記述し能はさるにあらずと雖とも若し之を細密にするときは三國誌の諸葛孔明に於ける太閤記の秀吉に於けるが如く勢ひ一二の傳に渉り却て依怙の弊に陷るの恐れなき能はす之れ編者か勉めて事實を正確にすると同時に興味薄きの譏りを受くる所以なり讀者冀くは姑く忍んで編者が其材料に乏しからさるも餘義なき事情あるとを知り給んとを、且つ夫れ名を北越戰爭記に假り云々の攻擊は實に編者の服罪する所ろなり然れとも讀者試み

に一歩を退て當時に於ける北越の大勢を一顧せよ、抑々戊辰の役に於ける中心點は即ち中越にして其日月殆んと百日に渉れり中越の東軍一旦破るゝや村松城は八月四日に、村上城は仝十一日に陷り其間長きものは十日少きは數日に過きず特に村松新發田村上諸藩兵の中越に從軍するや其數甚た少きのみならず城を擧て敵に當り行軍主簿凡て整然たるにあらずして謂はゝ一遊擊隊の運動に過きさりしを以て長岡藩の如く到底詳密に知ること能はさるは餘義なき次第なり、讀者深く密する所あらは幸甚なり然し編者は可成北越各藩の記事を詳密にせん爲め出兵の數より死傷人名に至る迄種々の事柄を照會し已に一二藩は其取調を結了せりと雖とも未だ悉く回答に接せさるを以て遺憾なから爰に併記すること能はす若し不日取調を終らば曾て編者が所持する所ろの材

料と對照し之を迫て增補の上聊か他藩士諸君の參考に供せんと欲する心算なり村松藩中の會津に、新發田藩主の米澤に、村上藩主藤翁の岩村田陳屋に於けるが如きは皆是必衆の記事なり之を今爰に掲けさるは前述の事情あるが故のみ、讀者諸君幸に諒せよ

編者謹述

訂正

戊辰北越戰爭記目次

第一章　新潟に於て十四藩會議を催す……一頁
第二章　長岡藩記事　其一……五頁
第三章　仝　其二……十五頁
第四章　仝　其三……二十一頁
第五章　戰端記事……三十頁
第六章　河井小千谷談判……三十五頁
第七章　妙見口合戰及長岡落城……四十三頁
第八章　杉澤合戰及加茂地方記事……五十五頁
第九章　今町激戰……六十一頁
第十章　十二潟持立峠以下各所の戰爭……六十六頁
第十一章　土ヶ谷以下各所の激戰……七十六頁

第十二章　長岡城恢復前記幷河井家族の記事……八十一頁
第十三章　奥羽諸藩同盟記事……九十一頁
第十四章　長岡城恢復記事其一……九十七頁
第十五章　仝　其二……百六頁
第十六章　新潟地方戰爭記事……百十六頁
第十七章　長岡再落城記事……百二十二頁
第十八章　三條加茂地方戰爭及村松落城記事……百三十一頁
第十九章　下越地方戰爭記事……百三十六頁
第二十章　會津口各所戰爭記事……百三十八頁
第廿一章　長岡落最末記事……

附章　長岡藩山本帶刀君の傳幷碑銘　百五十五頁
仝　藩河井繼之助君の傳幷碑銘……

訂正 戊辰北越戰爭記

野口團一郎編輯

第一章　新潟に於て十四藩會議を催す

回顧すれば最早二十五年の昔となりぬ、流石に威權赫々たりし德川政府も外交談判の起り以來威令次第に衰へて天下の動搖已ひときなく、畏れ多くも禁裡始御門に彈丸血雨を降らせしかば、是より世上益々物騷しく長州征伐の大擧も其効なく年々歲々憂世慷慨の事のみ頻出し辛くも紛々擾々の間に迎ひし春は慶應三年にして、即ち今を去ること廿五年前なりき、此時に當り會津若松の城主松平肥後ノ守は京都守護職の重任を帶び、公武の間に奔走を擧げて周旋すと雖も歷幕の逆潮洶湧如何ともすること能はず、却て薩、長諸藩の怨を招くのみにて、日々陷害の形狀あるを以て、在國の家臣は何れも苦心焦慮し何時如何なる事件の生ずるやも計り難ければ、先近隣諸藩と連結して以て不時を戒めんと欲し越後には新領及預地も多く之れあるを以て、土屋鐵之助、萱野安之助を北越に遣し合同親睦の方法を謀議せしむ、爰に於て兩名は村上、新發田、村松に遊說し其同意を得て更らに三藩の

士七里敬吉郎、伊藤勇藏(新發田)石井左右兵衛、水谷孫平治(村上)齋藤久七、前田又八(村松)の六名と共に長岡藩に來りしは慶應三年六月廿二日なり、長岡にては諸士を町會所に案内し九里磯太夫、村松忠次右衛門、小金井儀兵衛、小川善右衛門、の四名應接して其來意を問ふに、答て曰く春來越後筋へ浮浪の徒潛伏し自ら正義黨と唱へて容易ならざる企をなし居るやの風說あり、依て万一非常の時に際し各藩分裂區々の方向を取りては甚不都合に付來る九月十五日を期し新潟港に於て北越各藩の集會を催ふし將來取締向等の方法を協議し、以て合同親睦の實を表し度、尤も貴藩に於て同意の上は七日市、柏崎、與板、高田、糸魚川等の各藩は貴藩より直接談判あらんことを望む云々との趣意にて別に非離すべきことに非れば長岡藩も之に同意し後日を期して、各々歸藩せり、爰に於て長岡藩にては小川善右衛門、安田孫八郎を正副の使者となし新潟表集會の談判を命じければ、兩使は七月四日長岡を出立し、柏崎にては手塚甚太夫、田中忠藏高田にては、郡奉行前田助作町奉行松本太兵衛に面會して其同意を得、尚ほ糸魚川藩の談判を高田に依托して七月十一日一先長岡に復命し更らに七月廿二日長岡出立與板に赴きしに折りしも市中火起り黑焰疾風に乘じ市中を席卷し叫喚呼號容易ならざる有樣なれば不得已馬越村割元佐衛門方に一泊し

翌日は道を轉じて七日市に至り山田權左衛門方に於て郡奉行秦但馬代官鈴木德三郎に面談して同意を得、歸路與板に至り郡奉行三輪太仲、青木權之助に談判せしに何れ拙藩より回答すべしとの挨拶なるを以て兩使は後日を約して歸城せり、斯くて九月十五日に至りければ、北越各藩の士は何れも新潟に來會し獨り與板藩のみ無斷缺席せり、翌十六日集會席を古町の鳥清(割烹店)と定め午前十二時開會するに至りしが當日の出席は左の如し、

會津　松平肥後守家來　飯田兵左衛門　萱野安之助　土屋鐵之助
柏崎　松平越中守家來　手塚甚太夫　阿邊庄太夫
高田　榊原式部太輔家來　前田助作　杉本太兵衛　白井門左衛門
長岡　牧野駿河守家來　武山貞右衛門　小川善右衛門
新發田　溝口誠之進家來　七里敬吉郎　井上節助
村上　内藤豐後守家來　石井左右兵衛　水谷孫平次
五泉　水野出羽守家來　寺田信三郎　稻村哲藏
七日市　松平伊豆守家來　秦但馬　鈴木德三郎
三根山　牧野伊勢守家來　齋藤太仲　石塚五郎右衛門

糸魚川　松平日向守家來　竹島泰助
三日市　柳澤彰太郎家來　小口牧右衛門　赤松政治
椎谷　堀右京亮家來　安野和右衛門　押見彌三左衛門
黒川　柳澤伊勢守家來　太刀川熊太郎　木村錠次郎

の十四藩廿九名にして、會藩飯田兵左衛門は將來の方法に關し諸士の意見を問ひしに何れも謙讓して議論なければ、更に今一回開會し夫迄に各自意見を定むることに決して當日は何事もなく盛宴を開きて散會せり、斯て十八日に及び、再び鳥清に集會し締結したる定約案左の如し、

一銘々領内の儀嚴重取締致探索候次第柄は集會の節打合可申事
一毎年各藩順番に會主となる事
一毎年五月十四日迄に參着十五日出會の事
一毎年九月朔日糸魚川村上の兩藩より廻狀差出し各藩順に差添可送事
一他領に變事有之節は其次第柄飛脚を以て通達可致事
但不差急儀は不時回狀を以て通達可致假令風説たりとも品に寄り心得の爲め廻達可致事
一他領たりとも何儀によらず浮説等有之實事承り證度儀は出會揃の役筋へ承合可申事

（以下數條畧す）

右御約定の條々堅く可相守事
終て盛宴を張ると雖も時節柄故一婦人をも席に入るを禁じ談笑快話各々歡を盡し明年を期して前後皆歸藩せり

第二章　長岡藩記事其一

是より曩長岡に一世の傑士あり、河井繼之助と云ふ、善謀奇策之を天に得、眼光烱々威風凜凜特得の雄辯一度舌端より發するときは、龍奔の勢ひわり、四方に遊歷して經世の才を磨き其藩に歸り舉られて執政となるや因循姑息の弊風を一洗し未だ幾年ならずして其面目を改ひ、河井常に思らく紛々擾々たる世に際しては先自力を省みて後天下の衡に當るべし、小藩凡智の身を以て重任を帶ひ徒らに奇禍を求むるは得策にあらずと、偶々藩士川

島偉二郎（平定の後三島と改む）河井と其見を同くし藩主牧野忠恭の京都所司代となるや、共に諫めて之を辭さしめ後又忠恭の老中となるや川島退職を勸ひる一篇の建言書を奉呈するに當り河井大に之を贊し三間市之進（現今憲兵大佐）黨と相謀つて遂に忠恭に其重任を避けしめ勉めて奇禍を未然に防けり、然るに攘夷鎖港の議論より公武の間益々離隔し、遂に慶應三年十月大將軍德川慶喜は土州藩の建言及薩藩小松帶刀黨の說を容れて軍職を解き政權を奉還せしかば、朝廷其請を容れ諸侯の賞罰黜陟は朝廷之をなし、其他の事は加賀以下三十餘藩の入覲を待つて處分すべし云々との優詔を下し賜ひしも十二月九日に至り前議俄かに變じ關白及幕府の名稱を廢し更に總裁議定參與の三職を設け且長州藩毛利の一族を召喚して其官職を復し大小の政務悉く朝廷より出で、德川氏の威權全く地に墮ちしかば佐幕の諸侯は大に不滿を抱き遂に德川慶喜は十二月十二日二條城を引拂て大阪城に入りければ益々物情恟々慘憺朦朧の世と變せり又江戸表に於ては去月朝廷より爾來王臣と心得べき官諸侯伯に嚴達ありしかば譜代の諸侯大に驚き屢々紀州邸に會して王室に對し陪臣の取扱を哀願すべきや否やの問題に就き意見を戰はし議論紛々たりしが長岡藩にては是等の事に關係せず大政奉還の一事を以て天下大亂の基ひと憂慮し是非とも朝廷に向て濟世

の策を奏上し事の成否は兎に角聊か王臣たるの道を全うせんとて河井之を藩主に勸め遂に牧野駿河ノ守忠訓主從六十餘名江戸邸を發したるは仝年十一月下旬なり、主從一同は品川沖に碇泊せる幕艦順動丸に搭じ二十八日無事に兵庫へ着しければ、陸路より大坂に入り、密かに京坂地方の摸樣を伺ふに滯留間もなく九日の改革あり、引續き慶喜大坂に歸城せしかば人心動搖巷說喧傳し容易ならざる形勢に迫り曾て長岡藩が奏上せんと欲する主意も時機已に失して水泡となれり、左れども一旦意を入京に決したる以上は斯くて已むべきにあらざれば、仝月十五日朝廷に奏する所の書面を閣老板倉周防ノ守の內覽に供せしに翌日大目付より河井を召喚し板倉自ら面談の上之を朝廷に奏上せば必す補益する所あるべく、大樹慶喜公に於ても或賞厚かりし旨を達せられければ愈々志を決し十二月十九日午後四時主從一同淀川を發船し伏見を經て竹田街道より入洛し北野林靜坊へ投宿せり、斯くて到着屆を出すと同時に參廳の命ありしを以て翌日河井繼之助、三間市之進、椰野嘉兵衛、澁木成三郎等議定役所へ出頭し公命を待ちしに暫して河井を鶴の間に召喚ありて議定官中山大納言、正親町三條大納言、參與万里小路右中辨、宰相岩倉少將等列座の上勤王に關する趣意を諭達ありて明二十二日巳の刻を期し答申すべき旨を傳へられければ、公命を謹承し

て河井等逐一其事情を復命せり依て翌二十二日河井繼之助、藩主名代となり副使三間市之進付添澁木成三郎と共に出頭し答申して左の書面を奉呈せり、

作恐謹ンテ奉申上候

今般朝廷ヨリ被爲召難有御事ニ奉存候得共陪臣賤職ノ身分蒙御直命候ハ唯々徳川氏ニ斟酌ノミノ儀ニ是ナク奉對朝廷禮義ヲモ失ヒ恐入候儀ト進退迷惑仕候得共如何ニモ御政權奉還ノ儀御内慮奏聞ノ旨ニハ候得共不日ニ敕許有之候御事柄此上ナキ大事件容易ニ御取扱被遊候樣上下擧テ驚愕仕天下爭亂万民塗炭ニ苦ミ候モ是ヨリ起候儀顯然ト奉存候得者彼是酌酌仕候モ不忠ノ義ト不顧恐懼上京奉建言候抑モ保平以來政權武門ニ移リシヨリ屢々御企モ是アリ候得共終ニ御成業モ不被爲在者權與力全カラサルニ因ル事ト存候權與力全ウシテ始メテ天下ヲ制御スベク權與力全カラズシテ徒ラニ空名ノミニテ天下ヲ制御スル能ハザルハ自然ノ勢歷世ノ事變人情照然相分候義德川氏ニ至リ數百年間ノ亂ヲ揆ヒ萬民ヲ塗炭ニ救ヒ候程ノ英明古今ノ事情洞察ニテ天下ノ治安不出此事故ニ朝廷ニモ萬事御委任被爲在候御儀ト奉存候德川氏撥亂治平ニ至リ候後若シ政權朝廷ヘ奉歸候得者今日ノ治世ハ有之間敷昇平萬國ニ無比ハ神國ノ御威光德川氏祖先ノ功業天下

万民今日太平ノ澤ニ浴シ候モ之ニ不外儀ト奉存候昇平久敷打續キ人心偷惰驕奢ニ赴キ候義古今一轍ニ御座候テ德川祖宗天下治平被致候規模無比類盛業其後中興ノ興業モ相立チ時々改革モ有之候得共何分太平ノ弊風上下共ニ偷安苟且ニ流レ候ハ特ニ政令ノ不行屆而已ノ義ニモ無之是又自然ノ勢ト申スベク特ニ嘉永年間外國渡來和戰ノ兩議ヨリ公武ノ御間柄彼是ヲ生ジ時論不定姦雄其虛ニ乘ヲ巧ニ尊王ノ名ヲ借リ浮浪ノ激徒無深長ノ慮狂暴釀亂幾人トナク非命ニ陷リ候次第慷慨決死ノ心底ハ可憐事ニ候得共全ク一心ノ私憤ニ出義理ノ當然國家治安ノ道ヲ不辨不好犯上而好作亂者ハ未有之ト浩歎ノ至ニ御座候爾來物情恟々世上不穩續テ長防ノ事件モ相起終ニ今日ニ至リ候ハ可悲事ニ御座候ハスヤ外國和戰ノ義天下諸侯種々異說モ御座候得共迫年事情モ相分リ既ニ先帝御治世ノ砌交際御許ニモ相成只今ニ至リ候テハ始メテ攘夷ヲ唱ヘ候者モ反テ彼レト和親ニ及ヒ今日ノ形勢徒ラニ攘夷ノ不出來ハ分明仕候義然レハ則チ朝廷ニモ先後ノ御命令御通徹ト申候義ニモ無之乍恐御反省可被爲在御事ト奉存候惣而朝議ヨリ出候而已ニモ有之間敷尊王ノ名ニ託シ攘夷攻戰ヲ唱ヘ候輩ヨリ多クハ此ニ至リ候御儀ト奉恐察候是等ノ人々只今ニ至リ猶攘夷ヲ唱ヘ候ヤ自己ノ明暗ヲ不省先後ノ反覆ヲ不恥ノ獨リ德川氏而已

ニ責ヲ歸シ候ハ仁義有道ノ人々ト可申哉大凡物大ナレバ難治小ナレバ易治如何ニモ天下ノ廣大ナル國初ト違ヒ別シテ多事ニ相成夫々行屆兼候處モ有之候得共追々奮勵致實意ニ更張御座候得者始終大亂ニ不至シテ自然ノ强國トモ可相成當時ノ有樣攻守ノ勢異ナリト申樣ナル勢御座候テ不振樣相見候得共自是後切迫仕候得者强國ニモ相成可申如何トナレバ天下ノ尊敬ヲ受ケ深殿ノ中ニ成長シテ下情ニ不通ノ弊モ御座候得共今日ニ至リ左樣ノ義ニテモ不相濟奮勵モ有之親藩譜代モ追々發憤仕候樣可相成然レバ則チ關西ノ武士必ズ强キト申譯ニモ無之關東ノ者弱ニ終ルノ理モ之レナク多勢ノ中必ズ人傑モ可生四分五裂ニ至候得者天下ノ人心德川氏ノ恩顧ヲ思ヒ出シ候半乎外ニ誰人ヲ思ヒ出シ可申哉其威ノ盛ナル中ハ臣服從順シテ安穩無事ノ恩ヲ忘レ太平偷惰ノ時ニ乘ジ借名釀亂ノ人々ハ假令力不足而一旦威壓セラルヽモ天理ノ自然決シテ心服ハ仕間敷近頃西洋變革ノ說ヲ美ミ變亂反テ開張ノ基ト言說モ一理ナキニハ無之候得共制度モ遠ヒ万國無比ノ太平ヲ開張ノ說ヲ唱ヘ變亂ヲ釀シ候ハ天理人心ノ所不容悲憤慨歎ニ不堪次第天下ノ諸侯德川氏ヘ臣服シ數百年來太平ノ恩澤ヲ不忘却義心有之候テ朝廷ノ不安ハ無之徒ラニ尊王ノ名ヲ借リ不平ヲ懷キ時機ニ乘ジ徒義ヲ唱ヘ或ハ私利ヲ營ミ候樣ナル人心ニテ朝廷ノ安事可有之哉　朝廷德川氏ヘ御委頼ノ厚ク彌々權勢ヲ被爲益候ト御委任ノ名而已ニテ權威ヲ御殺ギ被遊候ハ朝廷ノ御爲如何可有之哉當國强兵皇國治安ノ御命令先年ヨリ度々有之雖有御事ニ御座候得共太平偷惰ノ風習中々以テ急速之改ム可キニ無之內外多端ノ時ニ當リ國是未定政令未整中譬難有御命令御座候共緩急其宜キヲ不被爲得處有之候テハ其名甚美ナリト雖モ其實ハ德川氏ノ疲弊隨テ天下ノ諸侯無益ノ奔命ニ疲レ無用ノ財力ヲ費シ候儀外國而已ノ儀ニ無之公武ノ御齟齬ヨリ出儀モ可有之哉　皇國第一大ナル德川氏ノ疲弊ハ其疲弊ニアラズシテ皇國ノ疲弊ナルヲ能々御了解不爲遊候ハヽ彌々御憂慮被爲在彌覬覦輕侮ヲ被爲受候樣可相成候得者被爲盡慮暫時尊崇ノ虛名ヲ御悅ビナク万民塗炭ニ苦ムヲ御憂慮被爲在任可疑者亂ノ端ナルヲ御鑒是迄之通万事德川氏ヘ御委任被爲在候ヨリ治安ノ道ハ無之義ト奉存候一旦被仰出候御儀間モナクシテ御改メ候ハヽ彼是六ケ敷申立候モノ可有之候得共其段ハ　朝廷ヨリ御敎戒被爲在皇國安危治亂ノ際厚ク相辨ヘ幾重ニモ一和一定イタシ奉安宸襟候樣被仰聞候得者御違背仕候者モ有之間敷御英斷ノ上速カニ御所置可被遊儀ト奉存候奏聞之上被爲聞候御儀疎賤ノ分ト雖モ不憚忌諱犯逆鱗者斧鉞ノ誅難逃假令御寬容ノ御沙汰奉蒙候モ狂暴好亂ノ者有之候得者亦生還スル不能儀ト

歎ケ敬奉存候得共天下万民ノ安危ニ係リ候御儀懼罪逃死獣止能在候モ皇國有生ノ道ニ背キ可申ト乍不及決死極諫無量ノ御高恩万分ノ一ヲモ報ジ候ヘバ死モ猶生ニ勝リ候儀ト不顧恐奉申上候不肖ノ者天下ノ事情詳悉承知仕ニモ無之妄昧疎漏ノ至リ恐入畏縮罷在候得共封土相當ノ家來ヲモ召仕一同助力勉勵敬テ奉申上候唯彼我ノ別ナク一毫ノ求メナキ愚忠ノ心事御採用モ被成下候ハヽ難有仕合奉存候誠惶誠懼頓首敬白

牧野駿河守代人

河井繼之助

慶應三卯年十二月

長谷三位は曹面落手の上歸館を命ぜられ、入京の素志稍達せりと雖ども爾來何等の公命なく而して京坂地方次第に切迫の摸樣あるを以て坐して傍觀する時にあらざれば更らに德川氏に向て處世の策を忠諫せんと思ひ其旨朝廷に奏請せし所直に許可を得たれば再び二十八日京師を出發し、其日は牧方に一泊して二十九日大坂に到着し平野町なる石崎喜兵衛の別莊に投宿せり、斯くて入城の上建言せんと欲するも此の時は已に公武の間陰然殺氣を含み物議紛々浮説百出の折柄なるを以て城内の警戒頗ぶる嚴しく通券を所持せざるものは入城するを許さゞるを以て徒らに慶應三年も暮れて四年の元旦となりぬ、是日河井漸く入城することを得、公武の間柄に關し建言する所ありしと雖ども已に德川慶喜會桑の兵を率ゐて入京に意を決したるを以て啻に素志の貫徹せざるのみならず、却て長岡藩に命ずるに兵粮奉行の任を以てす、然れども河井は勅意に背ける擧動なりと非難し强ひて之を辭して供奉せり僅かに玉造口に出で〻不時を警むるのみなりしが、果して日ならず伏見の戰亂起り藤堂の裏切に依て東軍大敗し會、桑の强兵多く倒れて後軍續がず京阪の間俄かに修羅場と變じければ、德川慶喜も松平板倉の諸侯と共に軍艦に搭じて倉皇江戸に歸へり、全たく其主領を失ひしかは諸侯の周章狼狽益甚しく加ふるに此一戰に依て向背を變じたるもの多ければ、敵やら味方やら更に分明ならず其紛擾雜踏は筆紙の能く記るし得る所にあらず、長岡藩は河井の命に依り豫じめ此事あらんと期したれば敢て狼狽せず徐かに德川慶喜の行衛を探り北東歸せしを確めて正月七日藩主を奉じ歸路に就き十三峠を越へ伊賀に入らんと欲す偶々藤堂和泉守西軍に應じて幕府の奇兵隊を上野に襲擊し勢州の關門を嚴鎖して通行を禁じ東軍歸へること能はず、河井屈せず關に至る毎に單身守衛に面談し漸く伊勢松坂に至り海路より三州吉田に出で無事に東海道を經て江戸に歸へることを得たり、是より驛長岡に於ては藩主の入京以來種々の風説市在に傳はり加ふるに京都より何等の消息もなければ士

民の憂慮一方ならず已に京坂地方戰爭起りしもの丶如く說話するものありて、藩主の養父忠恭大に之を憂ひ十二月廿五日藩士一場五郎右衛門、二見虎三郎、野村豊作、伊東兵馬の四名を京都地方に遣し諸侯の叛服向背及藩主の行衛を探らしむ、爰に於て四名のものは高田に於て二手に分れ二見、野村は木曾街道より一場、伊東は北陸道より各々道を異にして赴けり、仝じく廿七日に至り万一の備へとして花輪馨之進を隊長として藩の壯士一小隊を上京せしめ尙ほ稻垣林四郎の一隊を引續き出發せしむ、一場、伊東の二名は越前福井に至て始て伏見の變を聞き其驚き一方ならず藩主の安危存亡此時にありと馳て京都に入らんと欲するも越前、近江の人心恰も湧が如く諸藩の警戒頗ふる嚴しく互に猜疑甚しき折なれば事情や道理で通行も出來ず已むを得ず道を轉じて鳥居本より間道を經て水口に出でしに、折りしも木曾街道より來る所の二見、野村に邂逅し共に其顚末を語りて夫より暗峠を越ゑ大坂に入らんと欲せしも大垣、彦根、龜山諸藩の敗兵倡樂の間道より逃れ來り道路の混雜甚しく遂に進行すること能はずして江州中野河内に引還せり、去臘廿七日に長岡を出發したる花輪隊は越前に至て始めて伏見の變を聞き大に驚いて尙ほ探聞するに官軍京路の諸關を嚴守して出入を禁し藩主の一行正しく京都にあるもの丶如し爰に於て我が兵苦心焦慮之

を救ふの策を講ずと雖とも更に其方法を得ず、頗問川島億二郎說をなして曰く彦根藩に談判して後詰を乞ひ我兵死を期して大津の關門を破り後事を他藩に依托すべしと衆之に同意し進んで鯖江に至り高田の臣老竹田十左衛門に逢ふ竹田は藩主に先驅して上京せしも道路驅擾の故を以て空しく歸途に就きたるものなり、我兵之を要し共に大津に進まんと請ふ、竹田默して答へす我兵之を訴り遂に分れて中野河内に至り先の四名と相會す、然るに後詰を請はんと欲する所の彦根藩は此時已に變心して大津の關門を守るの報に接しければ我兵大に落膽し此上は秘密探偵の外なしとて川島億二郎、一場五郎右衛門の二名は偵者となりて、美濃路に出發し花輪隊は高田より江戸に出で後發の稻垣隊は長岡に歸へれり、川島、一場の二名は其身を種々に扮粧し寒風積雪の間を潛行して藩主の一行を探り大垣に至て始めて長岡藩の伏見の戰爭に與からざりしことを確かめ、且藩主一行の歸路に向ひしとの風說を聞き稍安心して江戸に入れり

第三章　仝　其二

伏見の一戰に東軍大敗し、引續き朝廷德川征討の詔勅を下し錦旗關東に向ひければ、佐幕

の諸侯或は昵近の幕兵之を迎へ戰ひ天下騷擾湧くが如し、爰に於て執政河井は此の上は封土を鎮撫して十万の民を安んじ姑く天下靜謐の時を待つに若かずとて、備さに當今の形勢を藩主に上申しやがて一片の屆書を投し主從一同歸國せしは二月下旬にして河井は有司數名と共に尙ほ滯留して後事を處せり、是より曩二月初旬牧野家の家族江戸を發せしが當時三國峠積雪丈餘通行困難なるを以て道を信州路に取り末家、小諸藩に泊せしに偶々上州の博徒、櫻井常五郎なるもの伏見大變以來人心恟々諸侯其向背に躊躇するを機として、無賴浮浪の徒數百人を率ゐ自ら官軍先鋒隊と名乘り信州岩村田陣屋の兵器彈藥を奪ひ取り松代上田松本諸藩を威迫して米金を借り碓氷峠及其他に關門を築へて旅客を脅かし其威大に奮ふ、然れとも官軍先鋒の名あるを以て諸侯逡巡避けて之に抗せざるを以て道路閉塞人心恟々小諸藩にある所の家族、發すること能はず、從士澁木成三郎急使として晝夜兼行江戸に來り備ぶさに其狀を述べて警衛の人を請ふ、爰に於て强健の士卒十六名を撰拔し山本帶刀之を率ゐて直に江戸を發し碓氷峠の山麓坂本驛に宿す、其夜山本諸兵を集めて曰く吾聞く敵關門を碓氷頂上に設けて通行を厳にすと若し果して然らば明朝關門に至り言論の末戰鬪に及ぶやも計り難し元來吾々は勝敗を決するための兵士にあらずして、藩主の家族を警護

するを以て目的となすものなり、故に明日假令干戈を交ゆるも他人を願みず、一人にても速かに小諸に至るを第一の急務とせん、斯くいふ余にして假令寸斬せらるゝも諸士必ず救ふこと勿れと諸兵謹承して詰旦坂本を發し雪を拂ふて碓氷頂上に至れば、豈圖らん、人影だもなし、而して遙かに輕井澤地方を望めば黑焰天を焦し驛中殆んど熱地獄の如し、山本即ち伊東兵馬、伊東孫太郎、横田大助の三名に事情を探らしむ、偵者三名は輕井澤より沓掛驛に至れば、驛中人なく兵火熄まんとし、死骸散亂頗る慘狀を極めり、一人の敗兵を捕へて尋問するに、櫻井の姦謀小諸藩の探知する所となり今日しも其襲撃に逢ふて大敗せる旨白狀なしければ、三名は其趣を復命し雨を冒して夜に入り小諸城に着し夫より主從一同無事に歸國するを得たり、偖又長岡に於ては一月以來江戸表の命に依り、

上樣御政權御還上以來諸代家諸侯方ニ往々二心ノ風說モ不審ノ至ニ候御家ニ於テハ假令御國内ニ御獨立被成候共只管義ニ依テ德川氏數百年來ノ御恩澤ヲ被爲報度トノ御忠志ニ候間上下一致ニ可勵忠勤且京師ヨリ多人數下向ノ趣キ頻リニ相聞エ何時長岡へ御差向相成ヤモ難計其節應接ノ次第ニヨリ兵端ヲ開キ候ハヽ累代ノ報恩此時ニ候間彌士魂ヲ研キ不覺ノ儀無之樣盡力肝要ニ候依テ此度人數別致シ置キ非常ノ相圖次第早速各所へ出張ノ

用意致シ罷在様組合中へ能々可申候

京坂戰爭ノ儀薩長ヨリ發砲ニ及ビ依テ素ヨリ朝敵ノ義無之候處朝廷ノ汚名ヲ蒙リ殘念ノ至リニ候就夫御恭順御謹慎ノ御取計思召候、屆兼候節ハ猶取計ヒノ品モ可有之候右ノ心得ニテ一同忠勤ヲ盡シ候様御賴ニ御座候

是れは正月十九日江戸表公儀に於て御譜代中へ被仰出候に付其寫長岡ニ達シタルモノナリ

以上二ヶ條の趣意を全藩に通達して治民の策を講じ居りしが是より蹕朝廷にて北越各藩へ恭順の勅諭を下し給ひ四條高倉の勅使高田に下向あり長岡藩よりは之に先立て出迎として植田十兵衛、木村竹吾の兩名出高し朝命を伺しに只何事もなく出兵すべしとの命なれば其旨長岡に通報せし所ろ、藩論遂に二に分れ甲は恭順の意を表して出兵すべし徒らに之を拒んで却て德川氏の不利益を釀しては不都合ならん尤も我兵をして德川氏を討たしむるが如き事あらば其時には斷然義を重んじ固辭して可なりと、乙は又甲を毆して今日出兵を命せらるゝ所以のものは德川氏征討の兵にあらずして何んぞや、然るに之を知りつゝ出兵するは兼ての示達に相違せるものなりと、甲は德川氏の達を基とし、乙は藩達を楯とし、互ひに讓る所なかりしも、兎に角出兵する方穩當ならんとの說に決し本富寛之丞等を隊長となし高田に發せしめんとす、然るに藩の壯士大に之を怒り相團結して、後より討たんと議するのみならず兵學所の役員亦之に反對し銃器を拒んで渡さず、役員森廣之丞（前札幌農學校長森源三）等門を閉ぢて家に歸る、本富等如何ともすること能はず、紛々擾々其議遂に消滅せり、斯くて藩主の一行は無事に三月一日着城ありぬ、三月三日諸士一統を招集し藩主忠訓は河井の改革案を衆に示して曰く今や天下の形勢容易ならず薄德の我等如何すべきや只管一統の力に依り人心一和忠勤の外なし、各自祖先の功あり分限に應じ軍制相立べき筈なれども、身命を拋つは貴賤同体なり、故に祿高に增減をなす如左大身の面〻難澁可致と雖とも是迄の家風を一洗して以て一同忠勤を勵むべし云々と又添書を通達して曰く今般沙汰せられ候條〻御治世以來の重大事件に候得共方今至當の御儀已むを得させられざるよりの御英斷可奉感佩候太平の風習五体に染み込み候子々孫々世態の省察方深淺より御主意抔疑惑の物議も難計、右者是迄政治御寛慢により人心一和の筋に至兼候次第今更御悔悟一際御勉勵可被遊との御旨誠とに以て恐入候就ては一統厚く相辨へ御主意遵奉非常に立居御奉公專務に可被心掛候小身の面々御充行御增し足輕以下次三男迄御扶持方被下候は容

長岡藩士祿高增減

易ならさる御處置に候得共身命を抛ち御奉公申上候ものへ時行被下物無之ては御義理合も不相立且被下ものの御手薄にては自然練兵行屆兼可申との思召に候處御仁恕に甘へ奢侈に移り候樣の儀聊か有之候ては以ての外の事に候云々、

改革案

從來の充行高	改正高
二千石	五百石
七百石	四百石
六百石	三百石
〔四百五十石ヨリ三百石マデ〕	二百石
〔三百八十石ヨリ二百石マデ〕	百七十石
〔百九十石ヨリ百五十石マデ 四十五人扶持〕	百五十石
〔百四十石ヨリ百石マデ 三十八人ヨリ廿八人扶持〕	百三十石
九十七石	百石
〔九十石ヨリ廿五人扶持〕	九十五石
〔八十五石ヨリ八十石マデ〕	九十石
〔七十五石ヨリ七十石マデ 二十人扶持〕	八十五石
〔六十七石ヨリ五十石マデ 十七人ヨリ十四人扶持〕	八十石
〔四十八石ヨリ四十石マデ 十三人ヨリ十一人扶持〕	七十五石
〔三十八石ヨリ三十五石マデ〕	七十石
〔三十四石ヨリ三十石マデ 九人扶持〕	六十五石
〔二十九石ヨリ二十四石マデ 八人ヨリ七人扶持〕	六十石
〔二十二石ヨリ二十石マデ〕	五十五石
十八俵以下五人扶持	五十石

第四章　仝　其三

如斯長岡藩にては非常の改革を行ひ二千石を五百石に、千石を四百石と百石迄減額を施し更らに百石以下を増俸するのみならず、士卒の二三男を兵隊に編入して之に食祿を給する

に至りしかば、士氣益々奮ひて全藩の人心一和せすと雖ども此時已に王師越に臨むの説盛んなれば平士川島億二郎建言して曰く、今や王師越に臨むの時に際して徒らに拱手傍觀し居るは得策にあらず、宜しく長岡藩の微衷を哀願して獨立の實を全うすべし、尤も高田に來る所の兩卿は或は是等の事を許容するの權ありや否や覺束なし故に高田に於て省せられずんば進んで東海道より來る所の總督に哀願すべし、若し一人の正使あらば不肖謹んで隨從せんと（因に記るす川島の此説を献じたるは植田、木村の兩士尚ほ高田にありしときにして漫然出兵すべしとの朝旨故其要領を得んが爲め政廳より川島に出高を命せられ川島途中に於て認めたる建言なり、而して川島の高田に至りしときは四條、高倉の兩卿江戸表へ發足し植田十兵衛之に隨行なせしを以て川島は空しく歸藩せり、植田は一旦隨行せしも長岡より何等の報知なきを以て遂に中途より逃亡して長岡に歸へれりといふ）爰に於て藩廳にては種々評議の上川島の説を容れ小林虎三郎（博學の士）に請願書を草せしめ山本帶刀を正使に川島を副となし將に發せんと欲せしも、上越地方騷擾の風説あるを以て暫らく其發程を見合せり、其請願書左の如し、

誠惶謹ンデ奉申上候德川慶喜去冬大政奉還其後間モナク十二月九日御大政改革被仰出候處慶喜部下ノ者臣子ノ私情ヨリ何ントナク心中不穩趣相聞エ候ニ付自然粗忽ノ所爲有之宸襟ヲ奉惱候テハ尊王ノ素意ニ背キ深ク奉恐入トノ微衷ヨリ右趣意御屆申上大坂表ヘ引取リ其後尾張前亞相越前中相ヲ以テ被爲召候ニ付當正月三日其供トシテ會桑二藩兵隊等伏見關門迄差登セ候處薩藩人數ヨリ發砲ニ及候ニ付餘義ナク戰爭ニ及ビ候内慶喜命ヲ下シ人數引上ケ御屆申上候テ東歸仕候始末最初大坂表ヘ引上御屆候モ會桑二藩ハ既ニ歸國被仰付候テ物騷ノ振柄故暫ク留置候モ二藩兵隊始戰爭ニ及ヒ候モ慶喜ニ於テ聊モ朝廷ヘ奉對野心ヲ挾ミ候義ニハ無御座候處豈計ランヤ右ノ條々ヲ以テ慶喜反狀顯然朝敵タルノ旨御布告ニ相成官位被召上候而已ナラズ既ニ　御征討ノ御勅諚モ下リ夫々御手配モ有之追々御人數御差向に相成候旨拜承仕驚入候次第私事ハ德川氏ニ於テ數百年來恩義モ不淺家柄ニ御座候處一朝斯ノ如キ大難ニ罹リ候ヲ見及候ハ誠ニ以テ殘念ノ至リ日夜愁苦此ノ事ニ御座候私庭ノ者　朝廷御法律抔彼是申上候モ恐入候儀ニハ御座候得共謹テ大寶律ヲ案候ニ八虐罪ノ内ニ謀反ハ國家ヲ危クセント謀ルト相見即チ平將門抔ガ所爲ノ如キヲ申候哉ニ奉存候又反ハ國ニ背キ僞ニ從ハント謀ルヲ謂フニ相見ヘ即チ皇家ニ背キ僞賊若クハ外夷ニ奔リ託シ候半ト巧ミ候ヲ申候哉ニテ彼ノ方隅ニ割據シ朝命ヲ

不奉者モ叛ニ屬シ候義ト奉存候然ル處此度慶喜ガ處爲前文數ケ條ノ迹ヲ以テ熟考仕候ニ
國家ヲ危クセント謀ルノ情實ハ万々相見ヘ不申反狀顯然ト被仰出候處乍恐律ノ明文ニ照
シ候テハ適當如何ニテ寃罪ノ樣ニ奉存候又慶喜大阪表ヨリ御屆申上直樣東歸仕候其ノ迹
ヲ以テ叛計有之哉ノ御疑モ被爲在ンカナレモ其戰爭後猶大阪表ニ罷在候テハ益京攝間
ノ騷擾ヲ增シ候ハントノ意ヨリ直樣東歸仕候而已ニテ他意無之其儀ハ東歸ノ後自己ノ不
束ヨリ近京騷擾ニ至リ候ヲ悔ヒ　宸怒ノ程深ク恐入只管恭順謹愼居城ヲ退キ東台ニ引
籠リ今度ノ罪過悉皆一身ニ負ヒ　朝廷ヘ厚ク御詫申上譜代諸藩並ニ旗下ノ士ノ有采地者
共ヲモ其意ニ任セ散遣仕候ニテモ　朝廷ヘ奉對分毫モ野心ヲ挾ミ不申候處ハ顯然相分リ
候義ト奉存候右ノ譯合ニ御座候得者慶喜ガ不束ヨリ近京騷擾宸襟ヲ奉惱候罪過ハ固ヨリ
不可辭恐入候次第ニハ御座候得共既ニ反ニモ無御座又叛ニモ無御座朝敵ノ汚名ヲ蒙ムリ
候程ノ情實ハ万々無御座樣奉存候然ルニ寃罪ヲ以テ御征討ヲ蒙ムリ永ク不得洗雪候テハ
私ニ於テハ誠ニ以テ殘念至極哀痛悲慟ノ情ニ不忍候仕合仰願クハ朝廷至仁ノ御心ヲ以テ
慶喜ノ中情深ク御洞察朝敵ノ名御棄損被成下只不束ヨリ近京ノ地騷擾ヲイタシ宸襟ヲ奉
惱ト申丈ケ罪過ヲ以テ御裁斷被成下置度此段味死奉懇願候偖　朝廷ニ於テ鄙言御聞屆被

成下朝敵ノ名御棄損被成下置候テモ前條不束云々ノ罪過ヲ以テ若シ多分削封等被仰付候
テハ其先祖ノ餘業モ衰替ヲ極ハメ候是レ又歎ケハ歎次第是レニ就キ更ラニ懇願仕度義御
座候大寶律ヲ案シ候ニ六議ノ内ニ議功ノ目相見ヘ申候抑モ〳〵應仁以來天下擾亂ヲ極ハメ候
處慶喜祖先家康織、豐二氏ニ續ギ　皇室ヲ奉翼戴亂世ヲ撥テ之ヲ正ニ反シ候ヨリ上下昇
平ノ樂ヲ共ニ仕候事是迄殆ンド三百年是固ヨリ　皇德ノ所使然トハ乍申家康カ勳績
居多ニ御座候事ハ愚婦モ知ル所武臣ニシテ天下ニ是程ノ勳績ヲ建候ハ前古ヨリ其類モ無
御座次第左レバ之レガ子孫タランモノハ假令罪過御座候テモ大惡逆ノ外ハ總テ寬典ニ被
爲從候儀固ヨリ　朝廷ニ於テ御相當ノ御處置ニテ天下ノ人誰カ御私偏ト可奉申上且慶喜
事モ最前ヨリ實父贈大納言ノ意ヲ續ギ尊王ノ志深ク中頃之ヲ以テ奸人ノ爲メニ中傷セラ
レ多年閒閑居其後　先帝ノ宸斷ヨリ故大樹家茂ノ後見被仰付又久々京師在留鞏穀ノ下ヲ
鎭撫シ前後數ケ年王事ニ勤勞シ候上一昨年將軍職ヲ拜シ候以來益勵精奮發勤儉ヲ以テ
下ヲ率ヰ海内士民ノ開化文明ヲ果敢取ラセ少シモ早ク皇國ヲシテ歐羅巴亞米利加諸强國
ト並立ノ勢ヲ爲サシメント日夜苦心焦思規畫經營イタシ既ニ其驗シナキニモ非ルハ衆人
ノ所見是又無効勞モ難申哉ニ奉存候今般不束ノ次第ヨリ宸怒ヲ奉犯候處ハ前文ニモ申上

候通リ恐入候次第ニハ御座候得共何卒律文議功ノ意ニ被爲基遠クハ家康ガ無前ノ勳績被思召近クハ慶喜ガ是迄ノ功勞ヲモ不被爲捨格外ノ御宥恕ヲ以テ寛大ノ御處置被下置度左候ハヽ慶喜ニ於テハ當來ノ臣下ヲ祿養シ益學藝ヲ興シ人才ヲ育シ富强ノ術ヲ施シ皇國ヲ奉保護此度ノ罪過ヲモ償ヒ御洪恩ノ萬一ヲモ奉報事出來可申如何計リカ可奉感戴哉方今御政務筋御復古ノ折柄刑律等ノ事モ遠ク　先皇ノ御成規ニ被爲基寛仁公平ノ　御主意ヲ以テ天下後世異議無之樣御施行被遊候儀勿論ト奉拜察候得者右ノ通恐ヲモ不顧奉哀訴懇願候吳々モ私庭ノ者　朝廷御威斷ノ事迄モ彼是ト奉申上候ハ誠ニ以テ僭妄ノ至死有餘罪ト深ク奉恐入候得共前段ニモ奉申上候通リ德川氏ニ於テ　恩義不淺家柄ノ義此ノ節ノ大難默止仕兼候寸衷ノ程御明察御進止被下置候樣偏ニ奉懇願候誠恐誠惶稽首再拜

牧野駿河守

慶應四年四月

江戸表に殘務を整理し居たる河井は賣却すべき物品は凡て之を賣り拂ひ餘は悉く北海洋航行の船に搭載し自分も亦海上より新潟に上陸し歩兵の暴行を鎭撫して四月中旬長岡へ歸りしが山本等の請願一條を以て時機已に後れ其功なきものとし寧ろ恭順の意を表して領民を撫育し王師境に臨むを待て請願するに如かずとて遂に使節の一行は消滅せり、

牧野家累代藩主の中には書畫其他の技藝を好みし人多分ありしを以て刀劍書畫を始め什器の類庫中に充滿し諸侯中屈指なりしが故江戸表引拂の際悉く運送すること能はず、河井は單騎横濱に赴き一人の洋人を伴ひ來り價格を鑑せしめ直に洋人へ賣却せりといふ、此洋人は佛羅西人スチールなる者にして當時日本三艇(壹艇は土州藩の手に入れり)と稱されたる大砲二門及精銃數百を購ひたるは皆此スチールの力にして河井と尤も親密なりしと、後スチール北越に來り福井、大黑の戰爭に大砲を運轉し官軍を惱したるは皆人の知る所ろなり河井は又江戸深川に藩の米穀數千石ありしを大概賣却し彼是巨萬の金を携へ歸國せりと云ふ、而して藩の貨物を積みたる船舶新潟に遲着せし爲め什寶珍器皆敵の有となり戊辰の亂定まるの後牧野家一物品の重んずべきものなかりしは之が爲なりといふ、

河井の新潟に上陸するや偶々幕府の隊長古屋作左衛門の歩兵市内を横行し亂暴狼籍至らざるなく、市民戸を鎖して戰々兢々たり河井即ち其の重なるものに面し諭すに江戸表今日の形勢を以てし、決して悠々日月を消するときに非らざる旨を說きしかば是より歩兵の暴行全く其跡を絶ち、市民始めて蘇生の思ひをなせりといふ、

河井歸國

候通り恐入候次第ニハ御座候得共何卒律文議功ノ意ニ被爲基遠クハ家康ガ無前ノ勳績被思召近クハ慶喜ガ是迄ノ功勞ヲ不被爲捨格外ノ御宥恕ヲ以テ寛大ノ御處置被下置度左候ハヽ慶喜ニ於テハ當來ノ臣下ヲ祿養シ益學藝ヲ興シ人才ヲ育シ富强ノ術ヲ施シ皇國ヲ奉保護此度ノ罪過ヲモ償ヒ御洪恩ノ萬一ヲモ奉報事出來可申如何計リカ可奉感戴哉方今御政務筋御復古ノ折柄刑律等ノ事モ遠ク先皇ノ御成規ニ被爲基寛仁公平ノ御主意ヲ以テ天下後世異議無之樣御施行被遊候儀勿論ト奉拜察候得者右ノ通恐ヲモ不顧奉哀訴懇願候吳々モ私庭ノ者朝廷御威斷ノ事迄モ彼是ト奉申上候ハ誠ニ以テ僭妄ノ至死有餘罪ト深ク奉恐入候得共前段ニモ奉申上候通リ德川氏ニ於テ恩義不淺家柄ノ義此ノ節ノ大體默止仕兼候寸衷ノ程御明察御進止被下置候樣偏ニ奉懇願候誠恐誠惶稽首再拜

慶應四年四月　　牧野駿河守

江戸表に殘務を整理し居たる河井は賣却すべき物品は凡て之を賣り拂ひ餘は悉く北海洋航行の船に搭載し自分も亦海上より新潟に上陸し歩兵の暴行を鎭撫して四月中旬長岡へ歸りしが山本等の請願一條を以て時機已に後れ其功なきものとし寧ろ恭順の意を表して領民を撫育し王師境に臨むを待て請願するに如かずとて遂に使節の一行は消滅せり、

牧野家累代藩主の中には書畫其他の技藝を好みし人多分ありしを以て刀劍書畫を始め什器の類庫中に充滿し諸侯中屈指なりしが故江戸表引拂の際悉く運送すること能はず、河井は單騎横濱に赴き一人の洋人を伴ひ來り價格を鑑せしめ直に洋人へ賣却せりといふ、此洋人は佛羅西人スチールなる者にして當時日本三艇（壹艇は土州藩の手に入れり）と稱されたる大砲二門及精銃數百を購ひたるは皆此スチールの力にして河井と尤も親密なりしと、後スチール北越に來り福井、大黒の戰爭に大砲を運轉し官軍を惱したるは皆人の知る所ろなり河井は又江戸深川に藩の米穀數千石ありしを大概賣却し彼是巨萬の金を携へ歸國せりと云ふ、而して藩の貨物を積みたる船舶新潟に遲着せし爲め什寶珍器皆敵の有となり戊辰の亂定まるの後牧野家一物品の重んずべきものなかりしは之が爲なりといふ、

河井の新潟に上陸するや偶々幕府の隊長古屋作左衛門の歩兵市内を横行し亂暴狼籍至らざるなく、市民戸を鎖して戰々兢々たり河井即ち其の重なるものに面し諭すに江戸表今日の形勢を以てし、決して悠々日月を消するときに非らざる旨を說きしかば是より歩兵の暴行全く其跡を絶ち、市民始めて蘇生の思ひをなせりといふ、

河井の長岡に歸るや間もなく佐幕諸藩の敗兵長岡に迫り共に盟約して官軍に當らんことを請求して已まず、甚だしきに至つては長岡若し之を肯んぜざれば其城を屠らんと論するものあり、爰に於て河井は會、桑諸藩の將士を長岡に迎へ長岡藩の方針を說て曰く抑も今日に於ては各藩各自獨立獨行を以て天職を盡すにあり、我長岡は獨立獨行封内を鎭撫し以て清時を待たんと欲するものなり、今や大將軍江戸表に謹愼して公命を待てり、我藩の謹愼すべき固より論を待たすと雖とも若王師にして我哀願を容れず强て不德の事を爲さしめんと欲するあらば、是れ王師にあらざるを以て斷然正當防禦する決心なり、其何れの場合に遭遇するも貴藩等の後を攻め裏切するが如きことは拵てなさゞれば心を安んじて諸君は諸君の事をなせよと、諸士其理に服して是より復長岡を疑ひ出兵を促さず、然れとも發に柏崎地方及頸城魚沼兩郡に遣したる偵者篠原伊左衛門、伊東兵馬、加藤一作等前後歸り來り官軍連戰四境騷然たりと報しければ、先以て領民安撫のため各要所へ出兵することゝなり閏四月廿六日諸士一統を中島の兵學所に召集し藩主一場の諭告あり、終て河井繼之助衆士に說て曰く今や天下の形勢塗炭に陷らんとす德川氏の措置元より其當を得ずと雖とも朝廷の擧動も亦感服すること能はず、我藩先に其筋を經て上奏せしも何等の沙汰を蒙らずして

今日に及べり、勤王佐幕は我藩の共に偏すべからざるものなり、唯今日に於ては勤王佐幕の論外に立ち封土を鎭撫し十万の民を治め以て、上は朝廷及德川氏に對し忠實を盡し下諸侯たるの責を全うするの外なし、或る長州人は彥根藩を目して亡國の相ありと言へり我寔に知言となすなり、何となれば彥根は井伊にして德川氏末路の政權を握り怨を西藩に搆へ屹として政柄を執りしものならずや、然るに伏見の一戰と共に大津の關門を閉ぢ彼れ身を殺して德川氏の爲めに寃を雪ぐことなかりしは、之れ亡國の相なり、諸士今より兼ての軍制に從ひ努力する所あれ云々と、尤も痛快に辨じて諸士を勵まし夫より本陣を攝田屋村に定め總督河井繼之助、大隊長山本帶刀、牧野圖書、軍監萩原要人、花輪求馬（後之進ノ改名）三間市之進、隊長大川市左衛門、齋田轍、波多謹之丞、本富寬之丞、田中小文治、渡邊進、牧野八左門、稻垣林四郎、安田多膳九里磯太夫、鬼頭六左衛門、大瀨庄左衛門、長谷川健左衛門、倉澤喜惣次、槇三左衛門、保地九郎右衛門、毛利幾右衛門、佐野與三左衛門、長谷川五郎太夫の各隊及大砲十餘門を草生津蔵王前島六日市地方に派遣し、當夜警戒して巡邏怠ることなく特に鬼頭の一隊は蛍峠及石峠へ出張し農兵を募り壘を築き萬一の準備をなす、

攝田屋村ハ長岡ヨリ凡一里南ノ方

草生津ハ長岡ヨリ四凡十二丁藏王ハ全北十丁前島ハ全四一里半餘六日市ハ全南二里半餘蛍峠石峠全乾ノ山中

第五章　戰端記事

會藩にては昨年の新潟會議に基き屢々書を北越の諸侯に送り且水原表出張の軍事方は勉めて奥羽同盟に加擔せしめんと欲し百方遊説する所ろあるを以て各藩何れも其方向に當惑し獨り興板藩のみ彦根の故を以て隱然討幕に左袒せり（藩主幼なるを以て大事は本家彦根に於て指揮せりといふ）然るに幕府の歩兵隊長古屋作左衛門は兵士六百人を率ゐて奥羽を廻り會津に出北越を經て信州に入らんと欲し、會藩の時機尚ほ早しと諫むるにも拘らず北越に來り興板藩の怪説を耳にし、直に兵を進めて興板城に迫り兵を城裡の山頂に陣して金錢米穀を請求す、而て隊下の歩兵市内を亂し人民恐懼生を安んせず、近鄕爲めに騷然たる事長岡に聞ゆければ河井單騎興板に赴き古屋に面し其暴行を詰責す、古屋大に曉る所あり即ち暴行者數名を刑して之を謝し、日ならず興板を出發し柏崎より高田に至り告て曰く吾幕府の命を受けて信州を鎭撫すと高田藩遂に之を支へずして關門を通しければ、古屋の兵進んで信州飯山城を圍み其向背を決せしむ、藩主本多豐後守大に之を憂ひ、一方には急を近隣諸藩に告げ一方には古屋を慰撫して以て奇禍を避くるの計をなす、古屋充分に飯山を脅かし更らに進んで上田に迫らんとす、偶々松代及尾州中野陣屋の諸兵飯山の援兵として來

興板ハ長岡ノ北信濃川ヲ隔テ、三里

るに會す爰に於て兩軍千曲川を隔てゝ砲戰し勝敗を決せざること數刻特に河水氾濫兩軍共に渡ること能はず、然るに松代の兵密かに上流を渡り、腰卷と稱する所より攻擊し、飯山の兵亦城中より發砲し相夾んで攻擊せしを以て、古屋の兵遂に支ふること能はずして退く、其退くや疾風の如く飯田城に突入し火を市中に放ち苦戰して北越に敗走す、然るに此時已に高田藩關門を嚴鎖して敵意を表はし古屋の敗兵を討つこと甚だ急なり、古屋の兵大に驚き前後其途を失ひ山を越へ澤を渡り柏崎及安塚十日町地方に走る、爰に於て北陸道及信州路上り來る所の官軍皆高田に集合し薩、長、加賀、尾州等の諸兵殆んど數千となりければ、官軍兵を二手に分ち一軍は直江津より海道を進み、一軍は松の山より魚沼郡に進擊す、而して魚沼郡に進みたる官軍は千手に於て再び兵を分ち、一は千手より小千谷に進み一は十日町より小出島を討たんとす、是より蜂伏見に破れたる會兵は各地に轉戰して越に入り、三國峠を保すと雖ども腹背憂慮する所少からざるを以て退て小出島に陣を移し、兵を堀の内浦佐六日町に散布し町田源之丞、池上武助之れに將として官軍を防禦す、然るに閏四月廿七日官軍六日町浦佐より魚野川を渡り、小出島を襲ふ會兵佐梨川を以て之を迎へ、激戰數刻互に勝敗を分たず、然るに官の一軍堀の内より椽原峠に出て魚野川を隔てゝ大に砲を激

柏崎ハ高田ノ北凡十三里安塚ハ全南五里
十日町ハ全東十里松ノ山ハ高田ノ東山中

堀ノ内浦佐六日町ハ共ニ三國線小出島ハ浦佐ヨリ一里南

射し頗ぶる猖獗を極はむ、會兵必死防戰すと雖も兵僅に百に滿たず、加るに死傷益增加するを以て遂に防禦の術を失ひ接戰數回辛くも猛火焰々の間を引揚げ山に沿ふて下越地方に走る、仝月仝日千手口の官軍は將さに小千谷に進まんと欲し芋坂の壘に迫る會の將井深澤右衛門其正面に當り桃澤彦二郎古屋作左衛門左右の翼となり奮戰死守すと雖とも地形不便支ふること能はずして退き、雪峠の嶮に據りて防戰す、官軍勢に乘し襲擊すと雖も會、桑の兵山川の要害に依て能く防ぎ且榴彈砲を激射し刀劍を揮ひ其勢甚鋭きを以て官軍破ると能はず、爰に於て官軍東軍の兵少なきを偵知し密かに隣村より迂回し山に登り雪峠の横面より擊下す東軍大に慌き之を防ぐと雖ども兵少くして如何ともすること能はず、遂に敗れて小千谷に走る、官軍直に進んで池ヶ原に陣し小出島の官軍亦東より小千谷に迫る、會幕の兵小千谷の終に守るべからざるを曉り即夜兵を授て三島郡片貝地方に退き壘を築き備を立以て柏崎の東軍と連絡を通じ、進攻の策を計る、扨て又柏崎に本營を構へ居たる桑藩は兵を封境鯨波に出し青海川を隔てゝ官軍と對峙し未だ砲を交るとなかりしに閏四月廿七日官軍大擧して鯨波に來襲し其勢破竹の如し、隊將松浦秀八半小隊を以て此に當り心死防戰すと雖ども衆寡敵すること能はず、乃ち退きて小河内山及び鬼穴の山上に防禦す、官軍

小千谷ハ會津ノ領地ニシテ陣屋所在

雪峠ハ小千谷ヨリ一里

柏崎ハ桑領ニシテ陣屋所在

勝に乘じ火を鯨波に放ち兩山の麓に戰ふ偶々前日大雨車軸を流し溪水暴漲せるを以て官軍進むこと能はず、薩、長の兵勇を奮ふて山に登り松浦隊を壘にせんとす、爰に於て立見鑑三郎町田老之進等の諸隊來援し奮戰激射互に功を爭ふて猪進し遂に敵兵を退く官軍の後援加州、松代の兵亦擊破せられて鯨波に止ること能はず、相散亂して青海川に火を放ち鉢崎驛に走る桑兵鯨波の一戰に大勝を得と雖も其兵寡くして敵に對すること能はず、而して官軍松の山より小千谷に入り、小出島亦敗軍の報ありしを以て翌廿八日妙法寺に退き壘を各要所は築て保守す、當時水府脫兵の巨魁朝比奈彌太郎（堤兵衛と變名す）市川三左衛門（渡邊對馬と變名す）等兵數百を率ひて出雲崎に屯し諸道の應援たりしを以て會、桑及水戸、幕府の兵を合せ殆んと一千有餘なり、

因に記るす、桑名の藩主松平侯は伏見の敗軍以來江戸表に謹慎し居りしが、三月上旬幕府より北越の領地柏崎に謹慎すべき命ありしを以て家臣百五十餘名と共に魯艦コリヤ號に搭じて柏崎に來り、勝願寺に恭順し居れり、然るに是より先藩の壯士は主公の精忠水泡に屬し一身措く所なきを見て大に悲憤慷慨し飽まで幕府を佐て西軍を討たんと決心し、屢々藩老に說くと雖ども、恭順論盛んにして其志しを達すること能はず、依て同

鯨波青海川ハ米山峠ノ東

鉢崎ハ仝峠四ノ麓

妙法寺ハ柏崎ノ東三里

出雲崎ハ海岸

士八十餘名脱藩して、兵隊を編成し松浦秀八、町田老之進田副嘉太夫等之を率ゐ、機を見て事を擧げんと欲す、會々幕の博習隊と意氣相投じ秋月登之介、大鳥圭助、本多幸七郎土方歳三等三千餘人と共に下總鴻之臺に屯して進軍の方略部署を定め、下妻陣屋を襲ふ立見鑑三郎會の士米澤某土方歳三等と共に論解して之を下し、夫より下館城を降して兵粮方を約し、直に進んで宇都宮城を圍み激戰數回遂に之を陷れ大勝を得、後ち官軍のために破られ日光山に據り再び進略の方法を議す、偶々越に赴き君側に後事を謀らんと論ずるものありて遂に之に決し强ひて大鳥等に訣別を告げ、同志八十餘人、日光を發し八十里越を經て若松に入りしは、閏四月六日なり、是より先藩老山脇小左衛門君命を帶び若松に出張し居り旨を傳ふる所ありしを以て諸隊直に若松を發し、越に入り柏崎に着す、然るに此時柏崎にては恭順論益盛んにして之に決したる模樣なるを以て脱藩隊の壯士大に之を怒り屢々藩老と辨難激論し遂に恭順派の巨魁にして藩の老臣たる吉永某を途に於て暗殺す、爰に於て恭順派萎縮し佐幕派勢力を得、衆士の入札を以て軍事諸役を撰任し、間もなく鯨波の一戰に及へるなり、藩主恭順謹愼すと雖とも志氣慷慨鬱勃の情抑もる能はず柏崎に來て脱藩兵に面會するや、戰死者を吊慰し宇都宮地方の事情を諮詢し共待遇恭順派に過ぐる所ありしと云、

第六章　河井小千谷談判

小千谷ハ長岡ヨリ南四里餘

閏四月二十七日を以て小出島雪崎鯨波の諸壘皆其守を失ひ、官軍長驅して海手は柏崎より關原に入り、山手は本陣を小千谷に擣へ其勢一擧して全越を席卷するの有樣なれば、長岡藩の境外已に彈丸雨飛の地となり市在恟々として指く所なければ有司は力を盡して士民を安撫し諸兵の巡邏怠りなかりしが、官軍の先鋒愈々小千谷に來りたること確かなるを以て河井は花輪彦左衛門を小千谷に遣はし、重役河井繼之助なるもの衰頽の筋之れあり出頭致し度許容有之べきや否やを伺はしめ、且官軍の摸樣を視察せしむ、花輪命を受けて五月一日長岡を發し小千谷に赴き其旨申入れしに早速河井の出頭を許可し且花輪を遇する甚だ厚かりける故花輪も大に安心し暇を乞ふて長岡に歸へり備さに官軍の情態を告げれば河井豁然として大に曉る所あり、乘て六日市地方に出張せしめたる兵隊を攝田屋の本陣に退かしめ、又近頃新調の大砲等にして光輝日に映じ人目を眩するものは樹間に隱くして其上を草にて掩はしめければ、藩兵大に其擧動を怪み血氣に速る壯士輩は河井を目して前言を食む

卑怯者となし、屢々隊長に迫るも隊長も亦其故を知らず、却て壯士輩に左袒するの傾きあるを以て、大川隊なる加藤一作、小林寛六郎、河井に迫て曰く、襲に出兵を命じて今日兵を退くるは抑も何の故ぞや、兵器を樹間に隠すが如き實に其意を得ざるの處置なり、苟も如斯なれば誰か命を奉ずるものあらんやと、河井大に之を叱し兄等は一兵卒にして軍機に喙を容るべきものにあらず、若し強て言論せば藩籍を剝奪せんと、加藤等大に怒り自盡せんとす、諸士百方諭解し河井亦其失言を謝し事已むと雖ども、藩の士氣は已に充發して抑ゆべからざるに至れり、蓋し河井は花輪の復命に依り官軍の強ひて戰ひを欲せざる摸樣あるを以て、可し成戰備を撤し恭順の意を表し無事に封土を治めんとの深意あれば勉めて出兵の形蹟を掩ひ、以て敵をして口を藉くこと能はざらしめんがため如し斯處置に出でたるものなり、斯くて河井は二見虎三郎を隨て五月六日攝田屋の本陣を發し、途上二見を戒しむるに謹慎して敬禮を誤ることなからしむ、やがて小千谷に着しければ、其趣きを本陣に屆け直に面談を許され監軍岩村精一郎を始め諸隊長左右に列席し頗ぶる莊嚴を粧ふ、河井先づ言を發して曰く、今日の時態略ぼ了知せざるあらずと雖ども特に北越に出兵ありて、弊藩如きを召さるゝは抑も何んぞや希くは歎願書爰にあり、閲覽を經ば幸甚なりと、岩村儼然之を嚇して曰く今日に於て出兵の如何を問ふは無用なり、速かに恭順の意を表して藩兵を會せしめよ、若し夫れ命を奉ずること能はずんば兵を調へて天兵の臨むを待つべし、歎願書の如きは敢て見るの必要なしと意氣昂然頗ぶる無狀を極はむ、河井百方辨解して二心なきを陳ぶと雖ども岩村堅く執て聽かず、然する中に列座の士俄に刀を提げて起ちければ、別室に控へたる二見虎三郎亦將さに刀を執て起たんとす、然るに諸士皆席を退て別室に入りしを以て二見も稍や安堵せしが、河井自若として動せず將さに坐を起たんと欲する岩村の裾を控へて固く願書の探達を乞ふも岩村遂に袖を拂ふて入る、爰に於て河井は尾州、松代、加賀等の諸藩に乞ふて願書の周旋を乞ふも皆薩長の前を憚りて固辭しければ河井其遂に志を達すること能はざるを覺悟し、心中の憤怒恰も湧くが如く怨骨髓に徹して本陣を出て野澤七郎右衛門方に投宿す、其旅館に投ずるや否や直に横臥して鼾眠前後を知らざる者の如し、官軍の偵者屢々之を伺ひ、其大膽に驚き一々之を本陣に通告し、本陣にては長岡の擧動に關し頗ぶる顧念する處少からず、河井は五月六日拂曉小千谷を發し片貝より歸へちんと欲せしも此の日片貝に於ては會桑の兵官軍と戰ひ道路騷擾せるを以て更らに道を轉じて高梨村より攝田屋に歸へる、當時の歎願書は如し左

乍恐謹而奉歎願候

丁卯ノ十月德川氏天下ノ政權ヲ被致奉還候節今日ノ勢ニ可至ト悲歎ノ餘リ不顧疎賤不憚忌諱上京獻言仕退キテ德川氏ヘモ忠諫仕度旨以書取相伺御聞濟ノ上十二月二十八日京地出立翌廿九日下阪仕候處城内物騒敢早速入城モ不相叶當正月二日畫頃ニ至リ漸々重臣ノ者入城屆仕候處彼是混雜其邊ニ至リ兼二日三日ト相成候テハ既ニ如何トモ不可致摸樣萬民ノ艱苦忽チ可生ハ眼前相分候得共何ト可仕樣モ無之尤モ上京前德川氏政令ノ不治ト當今ノ形勢ト一二執事ノ者ハ申出候得共其段モ屆兼猶又下坂ノ上爲ト諫爭仕度奉存候處前件ノ次第柄吳々歎息罷在候仕合歸府以來屢々申立候得共其段モ屆兼猶一ニ見聞スル事而已ニテ致方モ無之ト無據歸邑仕候當春ヨリ德川家御追討ノ御勅令有之候得共臣トシテ君ヲ諫ムルハ可有之諫爭モ不仕忘恩義累代ノ君一鋒ヲ向ケ候ハ大惡無道忍ンデ可爲之哉方今諸侯伯ノ所業辨論ヲ不待日本國ノ人理滅絶ニ至リ何ト可申樣爲之是等ノ人々何程御味方仕候共格別御爲ニモ相成間敷歟德川家ハ前後條理モ不相立終ニ今日ニ至リ候次第日夜苦心罷在候得者何樣憂慮仕候モ致方無之微少ノ弊邑ニ御座候得共人民十万餘モ有之候得者右ノ者共ヲシテ職業ヲ勵マシ財用ヲ足シ四民ヲ安ジ候ヲ以テ天職ト心懸居候外他

事ナク愼テ天下ノ治平ヲ得テ乍不及應分ノ御奉公可仕心底ニ御座候尤モ表ニ忠義ヲ唱ヘ内實ハ割據傍觀可仕樣ナル儀ハ他ニ有之候モ可惡處ニテ其邊ハ申譯仕候迄モ無之一毫ノ求ナク誰人ニ有怨ニモアラズ御威力ノ十一ニ不當ハ愚昧ノモノモ相分リ候儀ニ御座候共義理ヲ守リ天職ヲ盡シ滅亡仕候ハヽ天命ト諦ラメ覺悟モ可極候得共彼是ノ强弱ヲ計リ二心ヲ懷キ不義ノ名ヲ以テ隣國ノ兵禍ヲ受ケ領民ヲ苦シメ滅亡ヲ取リ御名ヲ後世ニ殘シ候テハ申譯モ無之衷情御洞察被成下候樣仕度奉存候方近海外ノ諸國互ニ富强ヲ計リ嘉永癸丑渡來ヨリノ所業御承知被爲在候通リ申上ル迄モ無之歎息罷在候處自國ノ爭亂不止ノ勢ト相成候テハ行末ノ所深ク御案事申上候事ニ御座候微少ノ弊邑迄モ用ヲ節シ儉ヲ勤メ兩三年中ニハ海軍用意モ可仕ト一同勉勵仕候處斯ル形勢ト相成亂ヲ濟フニ補ナク徒ラニ領民ヲ苦シメ農時ヲ妨ケ疲弊ヲ極ハメ候テハ可悲事ニ御座候万死ヲ犯シ朝廷ヘ奉獻言無其詮德川氏ヘ申立候モ無其益進退失途只領民ヲ治スルヲ以テ天職トナシ暫ク清時ヲ待ツノ心事宜シク御憐愍ヲモ被成下候ハヽ此マヽ被差置度不然ハ民心ノ動搖大害ノ生スル所幾重ニモ御赦免奉願上候獨リ一領一國ノ爲メニテ申上候ニハ無之日本國協和合力世界ヘ無恥ノ强國ニ被爲成候ハヽ天下ノ幸不過之事迫リ情切愚誠ノ程御採用ニモ相

成候ハヽ難有奉存候恐惶恐懼謹言

慶應四辰年五月

牧野駿河守

斯くて又片貝地方に屯集せし、會桑諸藩は兵を塚の山鴻の巣及本道に配置し塚の山の兵は柏崎より襲來の敵に備へ鴻の巣及本道の兵は小千谷の官軍に當り五月三日拂曉より三處とも一齊に砲戰を始しが本道の官軍高田藩、先づ破れて退ぞきしかば、東兵勝に乘じ鴻の巣の敵に當り勇奮激鬪官軍を逐驅し將さに大勝を得んとす、然るに塚の山の官軍岩村精一郎等能く兵を用ひ東軍の背后に出で本道の援兵薩長の精兵死を決して奮擊し來りしかば東軍遂に支ふること能はず、與板地方に走る、此の時長岡の兵信濃川を隔てゝ戰鬪を傍觀せしが獨立の主意を奉じて救援することなかりしと雖ども會桑の兵敗走して浦村を渡り我地に逃れ來りたるものは敢て咎めず厚意を盡したりといふ、河井は攝田屋の本營に歸へる途次前島に立寄り平士川島億二郎を召して曰く吾紛々擾々の間に獨立して忠義を全うし民を治め天日光明の時を待たんと期せしに何んぞ圖らん官軍の無情なる遂に我藩をして不忠不孝の地に陷れんとは實に遺憾なり、曩に速に向背を決せざりしを悔ゆ願ふに吾今一命を捨てゝ以て天下に謝せば庶幾ば藩の名譽を保存することを得んか冀くは兄等後事を處せよと

川島大に驚き之を諫めて曰ふ今や全藩の士氣正に勃興して抑ゆべからず、假令總督死するも獨立の衷願採用なき以上は必ず戰はん、即ち總督の生死は藩論を左右し能はざるなり、余淺識無智なりと雖ども冀くは驥尾に付して努力せんと、是より先河井川島と意見を異にせることありて、交を絶つこと數年なり、故に河井先づ川島の決心を試み其怨を捨て努力せんと盟ふを見て大に喜ひ即日川島を擧けて軍事掛兼奉行となし樞機に參與せしむ又諸隊長を攝田屋に召集して曰く抑も王師は戰を好み人民を苦むるものにあらず、然るに彼漫りに兵威に誇り義理人情を拋擲し强ひて他人をして不德に陷らしめんと欲す、是れ所謂天兵の名を藉りて私慾を逞ふする奸賊の徒なり宜しく國家の爲め此奸賊を討滅せざるべからず、諸君幸ひに隊下を皷舞し士氣を勵まし軍令の出るを待て、若し夫迄の間に於て假令敵に逢ふことあるも彼れより發砲せざる限りは之に抗すること勿れ云々と意氣慷慨心中の不平滿面に溢れ眼光烱々たり小千谷の本陣にては一旦威赫して河井を歸城せしめたれども河井の擧動深沈にして圖り難き所あり且偵者をして長岡の模樣を伺はしむるに戰備を治むる樣子なれば、今此時に際し長岡に於て反しては會津征討の時機に後るゝの恐れあるを以て成るべく無事に經過せんとて參謀等協議を盡くし尾州藩の軍監某をして調和の任に當ら

しむ、爰に於て尾州藩は妙見地方を徘徊し我兵に面せんと欲するも我兵常に避けて面することを能はず、偶々五月九日渡邊雲八二見武作等の砲士四五名六日市の茶店に息ふを認め之に面せんと欲して來る我兵徐かに避けて本道より歸へる尾藩大に當惑し茶店の主人を以て前の砲士に告げしめて曰く余は尾州藩にして使命を帶びて來るものなり、數日來貴藩に面せんと欲して徘徊すと雖とも如何なる故にや皆遊けられて其機を得ず、本日は是非面談ありたし云々と我兵之を謝絶すること能はず、其返答に躊躇するの際使番澁木成三郎來りしかば即ち其故を語りしに、澁木は面會するも差支なかるべしとて直に引返し面談せしに尾藩の曰く、小千谷談判の衝突より貴藩兵を攘ふるの說ありと雖とも官軍に於ては强ち戰を始むるにあらず、成べく貴藩の請求を容れ無事に通過せんと欲するものなり拙藩其取扱を依托せられたる次第なれば願くば、明日を期し當村に於て示談あらんことを望む云々と澁木は之を承諾して本陣に歸へり其事情を河井に告げしも當時河井の心中憤怨充滿し居り尾州藩の一條を以て官軍姦譎の計に出たるものとなし、毫も意に注めず而して昨今官軍榎峠の嶮に據り長岡に迫るの勢あるを以て河井先づ此敵を拂はんと欲し、五月十日軍事掛川島億二郎、隊長大川市左衛門、波多謹之丞、田中小文治、牧野八左衛門の四小隊を間道より齊田楡、本富寛之丞、渡邊進の三小隊及軍事掛榊原要人砲二門を本道より共に榎峠に進擊せしむ偖て又尾州藩にては昨日澁木と契約あれば松代藩一名と共に從者を伴ひ美服を飾り早朝より六日市に出張して茶店の戶障子を排し以て異心なきを示し我藩使の來るを待受けしに豈計らんや齊田等の三小隊突然進軍し來り言語も交へず尾藩等を捕縛なしければ尾士等大に驚き百方辨解、澁木に面會せんことを求むと雖とも、我兵聽かずして攝田屋に護送なしければ、河井は澁木に面會せしめず直に長岡に送り入牢せしめたり。

榎峠ハ長岡ヨリ南三里

妙見村ハ長岡ヨリ南三里白岩峠北ノ麓

金倉山古城趾ハ白岩ノ東山

第七章　妙見口各地戰爭及長岡落城

斯くて間道より進みたる我が川島等の一軍は、古城趾にある官軍を襲んには金倉山に登り眼下に擊下するに如はなしと思惟し、道を迂回して金倉山に登り、次第に古城趾に迫れば一谿あり、之を越て上るにあらざれば古城趾に至ること能はず、即ち我兵却て古城趾の敵に擊下しとなり軍略全く齟齬すと雖も事爰に至る、亦如何ともすると能はず、銃をも發せず無二無三に急進しければ、官軍其猖狂に驚き壘を捨て、山下の本道に走る我軍壘を奪ひ崖下を向へば敵兵白岩鐵坂の間に團集して我本道よりの兵と必死防戰す、我兵即ち横面よ

三佛生ハ妙見ヨリ信濃川ヲ隔テ、四

り荐りに發射し敵兵益苦戰將に散潰の色あり、時に砲聲を聞き官軍來援せんと欲するも會ま河水氾濫渡ると能はざるを以て三佛生河原に散兵を布き大砲を放つと雨の如し、本道より進みたる我兵は前面白岩鐵坂の間に當り、更らに大砲二門を妙見の壘に構へて三佛生の兵と砲戰なしければ、彈丸雨飛黑煙天を掩ふ日暮に至り我兵其徒戰たるを曉り砲戰を止む此日の間道より進擊に小笠原朝之進即死し、小川千三郎、吉田椎之助等傷を蒙むる、翌十一日前島村の安田多膳隊大川隊に代らんが爲めに來り、會桑の兵と共に旭山に陣す、而して其の他の諸隊亦東方連山に散布なしけれて、官軍も退て要害に壘を設け、互に攻守の策に汲々たり、當時官軍の守る所は浦柄鉄坂及西岸三佛生にして、我兵は榎峠旭山古城趾の三嶮を占領せり、斯くて十一日に至り官軍信濃川を渡り鉄坂に來援するもの增加しければ三嶮の戰爭一層勢を增し、特に三佛生の壘に於ては官軍壁側に隊列して循環其衆を示し巨礮を妙見の壘に彈射すると昨日に倍し、榴彈破烈し西鄕勇、花井鋌藏、等即死し渡邊久馬八傷を負ふと、我砲士隊より放つ處ろの雷礮敵壘に命中すると前後二回にして、敵の死傷するもの亦甚多く、官軍爲めに動搖の色あり、是より翌夜砲戰已むときなく六日市より榎峠に至るの間彈丸雨飛して通行すると能はず、會藩市岡隊亦六日市に壘を築き三佛生の横面を擊ち以て妙見の大砲隊を援け、大小砲の激戰殆んど寸間なく砲士松井策之進、柳町平四郎等の死傷ありしが當時信濃川の水稍減せしを以て官軍の榎峠に來るもの次第に增加し、我三嶮の兵晝夜警戒して怠らず然るに三佛生にある所ろの官軍山縣狂介、時山直八等相議して一舉榎峠を取らんと欲し、十二日夜時山先づ手兵二百を率ゐて渡り明旦旭山の我軍を襲ふの謀をなし、山縣二陣に進むの約をなす、我旭山の兵之を知らず、十二日の激戰に疲勞して少しく警戒を怠る、敵將時山直八斷岩絶壁を攀ぢ榛莽を潛り密かに我安田隊の壘に迫る、時に朝霧朦朧として咫尺を辨せざるを以て我兵其迫るを覺ゑず其第一壘に近づき砲を發するに至て始めて敵の來襲せるを曉り、直に備を立て、必死防戰すると雖ども事不意に出でたるを以て頗ぶる苦戰の色あり、而して敵の我に迫るや、後背を我に向け空銃を自軍に放ちて逆進するを以て、我兵其敵たるや否やを辨別すると能はず砲發少しく緩む時に安田隊の左右壘に在る會桑の兵來援し桑の隊長立見鑑三郎（陸軍大佐）大呼して曰く、壘外にある者は敵味方の差別なく之を討つ如何と、我兵聲に應じて發砲し官軍一時に倒るゝ者數十、是に於て時山自ら隊旗を揮ひ正面より進み其勢ひ破竹の如し、我兵即ち銃を捨てゝ拔刀し壘外に進まんとす、立見亦之を止めて曰若し接戰する時は同士討の恐あ

り姑く之を忍び時機を待てと、安田隊之に從ひ敵の壘壁に迫る、殆んど一歩を隔るを見るや亂發拒戰遂に時山直八を斃す爰に於て官軍俄かに逡巡の色あり我兵機に乘じ銃擊し官軍遂に大敗して身を谿谷に轉じ其死するもの幾許なるを知らず、我軍凱歌を奏じ三嶮の軍之に和し、官軍瑟靡す、此日安田隊に於て吉田正次郎、秋原岩之進、井上勝太郎、千木木幸之助、横山轟造、村松甚之丞等の死傷ありしが、最初敵の壘に迫るや吉田正次郎を罵て曰く汝近日來、賊兵を指揮して暴を逞す今日は天兵汝を許さずと、吉田聲に應じて之を斃し尚ほ二名を擊て重傷を蒙むり後遂に死す、我三嶮の兵山縣狂介等の嶮峠に渡りしを知らずと雖も十三日詰旦よりの發砲前日と異なり、大小砲の命中頗ぶる非凡なるを以て三所の軍始めて强敵の來加せしを曉り一層其警戒を嚴にす、而して妙見本道の我兵屢々御駕臺に胸壁を築かんと欲するも鐵坂三佛生の官軍に沮せられて其志を達することを能はず、十六日の激戰に於て武士俣清吉、永井伊之七、阿部甚太郎等傷を蒙むる、然れども我兵壘を各所に築き漸次戰線を擴充し、或は時に浦柄の敵を襲ふて火を放ち以て兵威を皷舞しければ官軍益々苦しみ常に守戰の地位にあつて兵を進ると能はず、爰に官軍の諸將妙見の遂に破るべからざるを知り、更に戰略を變じて與板出雲崎地方の兵を召集して禎下大島浦村の

出雲崎ハ海岸柳下大島浦村ハ長岡ヨリ信濃川ヲ隔テ、西岸

各所に配置し以て長岡城を陷れんと欲す、我兵亦草生津藏王前島諸村に壘を築き防禦の用意怠るとなし十六日に至り大島の官軍我が草生津の壘に砲擊を試み我兵激發返射し是より各所の砲戰頗ふる烈しく特に官軍大工町本妙寺の巨刹を的として巨砲を擊ち禎下鼠島の官軍藏王の森林に發砲するが如き、最も目覺しく、越ゑて十八日に至りては益ゝ甚しく、黑煙天を掩ひ砲聲川に疎き市在爲めに騷然たり、就中草生津藏王二壘の戰爭は最も烈しく砲聲斷の間なしと雖ども當時信濃川の水漲溢し、且爾軍の警戒、嚴重なるを以て互に進むことと能はず、偶々大島の官軍船を艤して進來す、我稻垣林四郎討て之を退く、而して此日の藏王口に於て屋井宇右衞門、長沼助一郎草生津口に於て伊東豐次右衞門の死傷あり、河井は馬を縱横に馳せて諸隊を勵まし若今日一日を耐守せは必ず敵を破るの計りごとありとて頗ふる注意を促かす、是れ蓋し河井已に妙見の事情を知り川島、及び會藩佐川桑藩山脇諸士と計議し二三日を出てずして小千谷を奪ひ、官軍をして首尾を顧るの暇なからしめんと、略々胸算わりしを以て斯く言ひしものなり、是より先市民にして野心を挾むものあり、密かに我兵の虛實を敵に通じければ官軍我守壘の强弱及地理を詳と策を決して十九日詰旦長の一軍は中島に、薩の一軍は禎下を渡り、諸藩の兵之に隨て一擧長岡に入らんと欲し先

つ各所の砲戰を平日に倍さしめて以て我兵力を計り、又數十の小舟を槇下地方より下山邊に引き登し、或は空船を流下して、以て水路を探り、我兵の擧動を伺ふ、我兵之を怪むと雖も未だ其計策を曉るの暇なく、必死防戰最も勉む、而して官軍全力を盡して草生津藏王の二ヶ所を攻擊し寺島地方の砲戰少しく緩む此日使番森廣之丞寺島を巡視し守兵に告げて曰く、斯の如く敵の發砲烈しき折は寧ろ應砲を控へ篝火を減じ敵をして疑懼の念を抱かしむるに如かずと、毛利幾右衛門隊之に隨ひ且此夜十二時半小隊宿營に歸へり休息せしを以て、其守備大に虛となる、斯くて官軍は草生津藏王各所の砲戰を益々鋭くし、我兵の必死他念なきを伺ひ、十九日未明密かに船を艤し我が長谷川、小島二隊の壘前を流下して、毛利幾右衛門隊の壘に突入し、俄かに吶喊發砲す、我兵大に驚き隊を整ふの暇なく各自奮戰突擊して姑らく支ると雖ども僅かに半小隊の小人數なれば如何ともすること能はずして散乱敗走す、宿營にありし半小隊は砲聲を聞くや否や驚起して壘に赴くと雖ども敵已に我壘を占め彈丸雨飛進むと能はず、三々五々或は戰ひ或は走る官軍勢に乘し、火を寺島の民屋に放ち荐りに大小砲を亂射し、其勢ひ破竹の如し毛利隊の南隣に守衛し居たる長谷川五郎太夫、小島久馬右衛門の二隊は此有樣を見聞して、大に驚き來援せんと欲するも煙霧稠

寺島ハ長岡ノ西北ニシテ凡十町餘

密咫尺を辨せず敵兵前後より出沒自在に發射し、如何ともすること能はざるを以て、遂に大工町及渡里町に退き是亦或は戰ひ或は走る官軍常に中島の兵學所を以て我軍樞要の根據と思惟せしを以て其寺島を破るや兵を驅て火を中島村に放ち疾風の如く兵學所に迫る兵學所近傍を守衛せるは豫備隊と稱し、十五歲以上十八九歲の少壯年にして倉澤竹右衛門牧野八左衛門之を率ゐ壘を築き對岸の敵と砲戰し居しが、十八日に至り藏王口の砲戰頗る烈しきを以て中島の北端に胸壁を築き兵を分て之を守りしに十九日拂曉俄に火起り內川口の本道已に敵の有となり兵學所への發砲烈しく終に其守るべからざるを以て火を兵學所に放ち返戰數回神田口御門に退て之を守る、寺島の我敗兵は三々五々に分裂し內川橋を渡り東堤(鰻屋彌助前)に據り必死防戰する際中河井繼之助、望月忠之丞を從へ馳せ來て曰く、我は是より渡里町に敵を防がんと欲す、諸士此橋を燒て以て防戰せよと我兵命を領し橋を燒かんと欲するも事俄かに出て〻方法なし然るに敵兵已に進んで、橋に迫る我兵即ち退て、東堤を(現今松田書肆の地)壘となし敵を斃す少からずと雖も、衆寡敵せずして遂に城に退く(豫備隊及寺島の敗兵內川の堤に散布して防禦際中安善寺に止宿し居たる村松藩の兵は中島に火起り彈丸寺に達するを以て敵の襲來と誤想し、長岡兵の裡面より發砲なしければ、

城下堤（長岡北凡三十丁

我兵大に驚き之れ必ず村松藩の變心したるものなりと速斷し、一層早く内川を退けりといふ、）藏王の壘を守りたる長谷川健左衛門、武作之丞の二隊は寺島の砲聲火烟を見聞して、疑懼逡巡せる折りしも敵の精兵槇下を渡り襲ひ來るを以て城岡堤の大砲隊と力を合せ、必死防戰すと雖も敵兵毫も退くの色なく、而して後を顧みれは長岡市中兵火焔々の有樣なるを以て遂に支ふると能はずして、城内及栖吉川に沿ふて走る、城岡土手の大砲隊も之と同時に敗走せしが伊東道右衛門獅り走るを肯せずして之に死す、道右衛門の家は牧野家譜代の臣にして代々鎗術の名家なり弱冠より相傳の秘術を錬磨し名譽遠近に鳴る、其將さに城岡壘の破れんとするや、同僚に向て曰く斯る樞要の地に一人の奮死するものなしと、敵に嘲けらるゝは實に殘念の至りなり、吾年老て殆んど餘命なし、冀くは強きに誇る西國武士に我が老腕を試みん、諸士は年尚は壯なり宜しく城廓に據て主公の先途を保護せよとて、大砲の要具を拔き捨て傍にある槍を執て敵を待つ、已にして官軍勢ひに乘じ益々迫り來る伊東聲を揚て曰く、吾は長岡城主牧野駿河守の家來伊東道右衛門行年六十七歳なりと、敵兵之れに應じ其姓名を告げ三士一時に刃を揮ふて戰ひしに、道右衛門瞬間に一士の咽喉を貫ぬき更らに槍を一閃し、忽ち二士を倒す、敵皆砲を止めて其の技倆に驚ろく、然るに勢ひ鋭く伊東の進み來るを以て敵兵其の接戰の難きを覺り、四方より亂發し遂ひに伊東を斃す、却説槇下の官軍は藏王及城岡の我軍を破り神田町を正面に進み來るを以て、神田口御門に防禦せし豫備隊は或は門扉に據り、或は松根屋上壘類を楯として必死砲戰すと雖ども官軍毫も隊列を亂さず、直進直射坦然として迫近し（薩州の精兵）其勢ひ少年隊の能く敵する處ろにあらざるを以て遂に敗して城に入る、草生津の守衛稻垣林四郎、倉澤喜惣次の二隊は、十八日以來晝夜大島の敵と戰ひ居りしが、十九日拂曉中島に火起り砲聲盛んに聞ゑければ、大に驚き草生津の壘を退き稻垣隊は大手口より城内に入り、更らに高橋小路より出で呉服町中島近邊の敵を防がんと欲するも唯砲聲の聞ゆるのみにして敵影を見ず、進で神田口に出でんと欲し、西願寺前に至れば、此の時官軍豫備隊を破りて神田口を奪ひ、將に城に迫らんと欲す、我兵之を見、俄かに砲を發して奮進す、官軍顧みて隊列を變じ、必死我兵と互に一歩も退かず激戰すと雖も敵强くして容易く破るべからず、而して後を顧みれば北御藏寄場邊の兵火將さに呉服町に延燒せんとし、若し退くとて一歩後るゝときは猛火後路を絶んとす、是に於て我兵已むを得ず退て城に入る、草生津を退きたる倉澤の一隊は渡里町口に向ひしが、官軍勝に乘じて小島、長谷川の敗兵を尾擊し各寺院の墓碑を楯となし發

栖吉ハ長岡ヨリ東一里
持立峠ハ全東二里
栃尾町ハ全東五里

射すると甚し、我兵奮進渡里町上田町の間に亂戰せしも隊長倉澤喜惣次銃丸に斃れ、衆寡敵せずして遂に敗走す、總督河井は渡里町より來る處の官軍を大手口に防禦し、平素秘藏せる所の機關砲を自ら運轉す、偶々流丸來て右肩を傷く、河井自若として屈するの色なし、從兵荒木某抱き止めて曰く、先生總督の身を以て一兵卒の事をなす、若し誤ちあらば如何すべきと、河井亦其遂に支ふへからざるを知り城に退く、前島に守衛せる安田多膳隊は長岡の黑煙砲聲を望み見大に驚き將さに兵を引て來援せんとす、偶々使番槇吉之丞馬を馳て來り中島藏王已に破れ安危計るべからず速に來り援よと、安田隊益驚き馳て草生津に至れば已に我守衛退て人影なし進んで大手口に至れば、會藩一小隊壘を栖として敵を防ぐ、我兵之に合し必死防戰するの際、大隊長牧野圖書來て曰く、諸口已に猛火となり勢頗ふる銳し、藩公疾に城を去れり、諸士徒らに惡戰すると勿れと、我兵之を聽かず、牧野百方說解して漸く退去す、是に於て長岡城全く敵の有となり、我兵藩主を奉じ栖吉普濟寺に至り敗兵を集め持立峠を越え、栃尾に走る、最初中島藏王の破るゝや我兵城に退き死を期して防がんと議す、然れ共當時我精兵多くは妙見口を堅め城中兵甚少くして如何ともすると能はず、河井亦後圖の志あるを以て血氣に勇む壯士を宥め藩主を擁して城を退く、而して河井は持立峠に堅壘を設け平地の敵を支へんと欲せしも、當時村松藩變心して栃尾を奪ふの怪說流傳せしを以て遂に守を置くこと能はず、倉皇栃尾郷に入り再び持立の嶮を占むると能はずして已む、(持立峠は中越地を眼下に俯瞰して山野の峻嶮たり、)主從の城を去るや、池田彦四郎城樓に火し退く、飯田直太夫、須藤武左衛門、野村龍太郎、武山千三郎、武器庫に放火し彈藥破裂して共に死し、又一物を餘すとなし、妙見口にある我兵は漸次戰線を擴張して敵兵を苦め、不日小千谷に迫らんと欲するの勢ありしに、十九日拂曉長岡に當り黑煙天を掩ひ砲聲山河に響き頗ぶる懸念すべき模樣あるを以て諸隊互に眉を顰め其事實を知らんと欲するも長岡更らに何等の報なし、六日市本營にある軍事掛川島億二郎等大に之を憂ひ、屢々使を馳せて事實を探らしむと雖ども行くものとし歸るものなく、徒らに諸隊悒々たるのみ午后に至り始めて落城を知り、其無通知を怒ると雖ども事已に爰に至り如何ともすること能はず、即ち相議して曰く本夜諸隊團結して必死長岡に突入し、敵を破り城を恢復せんと、諸隊之に同じ軍議稍熟すと雖も、偶々異見を抱く者あり曰く主公已に城を退て栃尾に遁る、然るに我輩徒らに暴戰して功なきときは却て之れ不忠ならずや、姑く退て主公の命を待つ、之れ順道なりと、是に於て議論二派に分れ、遂に日暮るゝに至る、而して

我兵旭山古城趾榎峠に布陣し強敵を前面に控ての評議故往來困難軍議決すること能はず、已に別杯を傾けて進撃と覺悟するの隊あれば、又退陣の用意して山を下るものありて、遂に進入の事熄み、各隊密かに雨を冒し嶮を攀ぢ村松濁澤より萬苦して半藏金森上等に退く此日長岡兵にして死するもの三十八名、傷者十六名にして、其姓氏は都合に依り卷末に掲記すべし、

附記す、濱手に於ては五月中水府の脫兵曾地妙法寺に轉戰し又寺泊に舶せる會艦桑艦は長艦丁卯丸及乾行丸と砲戰し、互に勝敗あり、　當時官軍より寺泊人民に左の布達あり

寺泊ノ義會津桑名ノ逆賊ヲ引入皇化ニ服セズ、一新ノ御政德ヲ妨候義不至極ニ候就中賊艦ヲ繫置諸所出沒致候段、重疊ノ罪科逃難ク候、官軍艦ヲ差向ケラレ賊艦ヲ一時ニ燒討候、向後村民奮過ヲ改メ賊徒ヲ防キ退ケ候ハヽ、前罪ヲ赦スヘシ、左ナクハ再度不日ニ來リテ玉石共ニ焚亡スヘシ、浦中ノ者共屹度此旨可心得事、但觀音寺ノ休左衛門ガ輩賊徒ト親ミ手先ト成候罪、甚可惡ノ所業ニ付、村中ノ者共、速ニ彼者ヲ斬首御詫可申上者也云々、

休左衛門ハ義俠ノ博徒

第八章　杉澤合戰及加茂地方記事

戰ひ破れ城陷りて昨日の榮華は今日の夢、妻子眷族一朝に離散し、八萬の都城下全く敵の蹂躙する所となり、一劍一銃空しく栃尾鄉に退きたる長岡兵は毫も屈するの色なく、志氣益充發して慷慨愈々切なり、大川市左衛門等諸隊に告げて曰、妻子を後に控へ故園の月を眺めて戰ふものは決して眞正なる戰爭を爲すと能はず、今や我が最愛なる父母妻子已に流離して其所在を失し、死生亦た知るべからず、城陷りて家宅已に敵の有となる、是れ我輩の眞正なる、戰ひをなすの時機來るものなり、請士乞ふ益奮ふて長岡藩の名譽を發揚せよと、此の時米澤藩兵を北越に出し、中條豐前、色部兵部、甘粕備後、芋川內膳、千坂太郎右衛門、木村主殿等と共に兵を合し、新發田を圍み出兵を促す、新發田依違躊躇決すると能はず、米澤村上の兵怒て之を屠らんと欲す、會藩百方其間に周旋し、新發田藩遂に出兵を諾す、是に於て三藩の兵進んで加茂に陣脚を定めたるは寔に五月廿三日なり、長岡の兵之を聞知し、即ち藩主忠訓を勸めて雖を會津に避けしめ、自余の兵隊は總督河井繼之助之を率ゐて加茂に退く、妙見口を退きたる我兵は西軍の追擊を遁れ千辛萬苦して森上半藏金諸

加茂ハ長岡ヨリ東入里

見附町ハ長岡ヨリ東五里

村に來り加茂に退くの報を得て、廿三日杉澤村に宿す、然るに此時官軍已に栃尾に入り見付を奪ひ堀溝村に陣するを聞くや、即ち會藩佐川隊は見付街道堀溝の敵に備ふる爲め十ケ峯の頂上に我藩田中に文治は赤坂口に大川隊は人面より栃尾口に、九里隊は池の島口に陣し以つて不時を警戒す、廿四日詰旦官軍(薩長及加州藩)密かに迂回し、佐川隊の前面を過ぎ、池の島口に備ふる九里隊を襲ひ、又時機を計て佐川隊を攻擊す、會々九里隊地理を失し荆棘中に陣したるを以て隊伍を整ふること能はす九里大喝一聲銃を揮ふて荆棘の中より跳出し、隊士之に隨て奮進す、敵兵狙を定めて連發連射し、我等進むこと能はず、而して佐川隊先づ破れて急を報じ、本道全く敵の有となり、兩隊の苦戰益々甚しく彈丸雨飛退く事能はず乃ち身を本明川に投して東岸に登り並木を楯として敵を防ぐ其間僅に三十餘歩に過ぎず人面にある大川隊赤坂口の田中隊急を見て來援し奮戰激射必死防戰す薩長の軍之れが爲めに逡巡の色あり加州の兵先敗して松代藩の急援を促す、是に於て松代藩兵を驅て進み來り池の島口より我側面を激射す、砲士伍長村上藤左衛門等之を迎へ戰ひ將に闌なり、偶ま暴雨車軸を流し、我軍低地にあるを以て遂に支ふること能はずして敗走す、此の日村上藤左衛門、長谷川敬之進、疋田幸太郎、渡邊善藏、大崎豐左衛門、野口和吉等之に死し、

三條興板間五里
三條見附間三里
三條栃尾間五里

澁木成三郎、中川久之進、佐治恭藏、太田權平、長谷川誠之進、木部建太左衛門、若林今右衛門、星野藩七、等傷を負ふ、疋田幸太郎銃を善くし敵を斃すこと少からす、最後に至り同伍を省みて曰く、我必ず彼を擊たんと、敵亦疋田を狙擊す、仝時に發砲して彼我共に倒る、渡邊善藏の斃るゝや隊長九里磯太夫涙を揮ふて之を介錯し、村上孫之進亦其兄藤左衛門を介錯して逃る、杉澤村の人民戰死者を憐み相謀て戰死塚なる者を爰に建て、毎年祭典を設けて死者を吊ひ毫も怠る事なしと云ふ、(會藩六名亦此中にあり)澁木成三郎の重傷を負ふや、密かに民家に潛伏して療養し後姿を變じて間諜となり頗ぶる力を盡したる話し柄は後章にあり、加茂に集りたる各藩の兵は杉澤村の敗報に接し俄かに軍議を決し、米の一軍及村上の兵は三條より信濃川を渡り與板口に進み長岡の兵は會津村松米澤の兵と共に見附栃尾の敵に當らんと議す、廿四日夕軍事掛川島億二郎三間市之進は大川市左衛門、鬼頭六左衛門、波多謹之丞、稻垣林四郎、毛利幾右衛門、長谷川健左衛門、田中小文治、槇三左衛門、渡邊進、森一馬、大瀨庄左衛門、の十一小隊大砲二門を率ゐ栃尾に進む時に風雨烈しく、我軍間道の嶮峻を攀ぢ曉に至て漸く上鹽等の各村に達するとを得、上鹽より進みたる波多隊之を聞て本道より保地九郎右衛門隊宮の原口より來援し本富、長谷川の二隊亦來り

共に畦間に散布して奮戰す陶山藥師岳の官軍山上山下より大小砲を發射し、我本道來援の道を絶つ、我上鹽村にある砲士隊之を見て施條砲を本道に安し陶山藥師及文納の敵に發砲す、每砲殆んど膚發なく文納の敵之れが爲めに倒るゝ少からず兩軍相對するの距離僅かに二十余間唯一小谿流を隔るのみなるを以て硝烟の際互に罵詈悪罵又銃戰せしに日暮れ翌曉に達するも勝敗決せず既にして我兵彈丸盡き兩軍共に疲勞して進む者も進まず、退ふ者亦退はず、終に交殺す、此日伊東忠藏、長澤金太之に死し、秋山虎五郎、渡邊久馬八、永井覺之進、奥村鉄次郎、曾根千次郎、橋本茂太郎、吉田彌太郎、杉田鈔次郎、關植右工門、小池松左衛門等傷を負ふ

而して此日米澤の兵大面小栗山に兵を進め又一軍を赤坂の本道に向はしむ、官軍必死防戰東軍其の側面を擊つ、頗ぶる猛烈を極むと雖ども地理宜しきを得ずして遂に之れを撤して去る、爾來日として戰はざるなしと雖ども著しき勝敗なし、越ゑて六月朔日に至り、長岡森の一馬、稻垣林四郎の二隊米澤村松の兵と約して密かに駒籠大平長澤諸村を發し赤坂堀溝に進擊す、戰ひ闌にして一軍赤坂の壘後に廻り俄かに激射す、官軍大に驚き顧みて之を防ぐと雖ども東軍勢鋭く、官軍將さに敗れんとす、薩長の兵急を聞て來援し左右兩山に分

れて東軍を下擊す、東軍奮戰及を接して戰ふと數回死傷山をなす、敵兵彌々增加し如何ともすると能はず、遂に隊伍散亂して退く、稻垣隊獨り之を知らず、堀溝に火し敵の後を絶んとす、然るに何んぞ料らん敵已に山を奪ふて歸路を絶ち退くと能はず、即ち直進して見付街道に出で勇を鼓して他道より長澤村に走る、此日福島友次郎、中島勇藏等即死し、山本重藏傷を負ふ是より先廿四日加茂を發したる桑名村上の兵は會の木元新吉壁野左右平の二隊と相合して信濃川を渡り地藏堂に陣脚を定め進軍の方法を議す、即ち會津、村上及桑の松浦梶川(大砲隊)隊は本道より町田隊は中道より立見隊は北野口より進むに決し、廿六日曉天本道の兵大河津の敵を擊破して塔の浦に進み中道の軍北野口の兵と共に相合して金ケ崎を襲ひ、與板の兵を敗つて北野に戰ひ勝に乘じて荒巻に進む、然るに官軍嶮を守り能く防ぎ破ると能はず、依て退て入輕井に陣す、二十八日本道の東軍塔の浦を破り與板城に迫る、官軍本與板に胸壁を築き必死防戰す、東兵勇を奮ひ激進し桑の隊長大平九左衛門を始め其死傷する者許多なり、而して薩長、富山、須坂、飯山、等の官軍互に乘を勵まして防戰すと雖も東軍の勢氣愈々加り遂に本與板を奪ひ、進んで大山の敵を襲ふ、偶々羽州上の山藩士松平誠之介一隊を率ひて來援せしを以て東軍益勢を得、廿八日拂曉勝に乘じて與板

本與板ハ與板城ノ裏

城下に進む桑藩立見、松浦の二隊は荒巻を破て火を民家に放ち間道より城後の山に登り俯瞰して敵を討たんと欲す、爰に於て與板城下一大修羅場を現出し官軍死を盡して表裡の關門に防禦し桑の隊長馬場九郎闘矢金右衛門梶川彌左衛門等を始め東軍死するもの益増加し敵の死傷亦之に倍す日暮れ兵疲れ、其遂に破るべからざるを知り、本道の兵北野に退くと雖ども間道の兵は奮戰翌廿九日曉に達す而して東軍鷹ヶ峯に壘を築きて陳ヶ峯の敵に當り爾來日として砲戰あらざるなし、六月三日官軍與板口北野村にある東軍の本營を擊んと欲し島崎村より來襲す、桑藩町田、立見の二隊之を北野の原野に迎戰し激發連射彈丸雨の如く勝敗を決せざると數刻なり、時に庄内藩中村七郎右工門一隊を率ひて間道より不意に官軍の側面を暴射す、官軍大に驚き隊伍稍亂る、東軍機に乘じ奮戰して遂に之を破り尾擊して島崎に闘入し火を放ち皷噪して進む、炎焰天に漲り飛火紛々官軍益撓む、即ち進んで小島屋(稻葉左衛門の領)を奪ひ是を東軍の本營と定む爰に於て鷹ヶ峯には桑藩及水戸の市川三左工門上の山藩松平誠之介等之を守り、本與板には會の木元 萱野の二隊信濃河岸には、水藩朝比奈隊之に陣し、翌夜砲戰已むときなく、村上の兵別に木の芽峠日の浦口に進む、

今町ハ南長岡ヘ三里東見附ヘ一里金丑宵三條ヘ三里今町加茂ノ間凡六里

第九章　今町激戰

官軍の長岡城を陷るや、其勢竹破の如く未だ數日ならずして栃尾見附今町與板等の諸要害を奪ひ山野一面に連絡を通じ容易に破るべからざるの勢あり、而して今町口最堅固にして、薩長諸藩の精兵之を守り下越地方を席卷せんとす、加茂にある河井繼之助此の戰狀を按し先此の强敵を破り以て東軍の戰線を擴充せずんば長岡城を恢復すると能はずと思惟し、六月一日軍事掛萩原要人隊長小島久馬右衛門、齋田轍、本富寛之丞、大川市左衛門、池田彦四郎、田中稔の六小隊大砲二門を率ゐ白馬に鞭て加茂の本營を發し、三條に至り進軍の方面部署を定め六月二日未明七小隊大砲二門三條より信濃川に沿て鬼木三林に出、本富寛之丞、池田彦四郎及會の衝鋒隊は今町川の西に渡り堤上堤下川に沿て中の島口に齋田轍、田中稔及會の佐川、市岡の二隊大砲二門は河井自ら之を率ゐて三林より安田に進み東堤より今町口に入らんと欲す、而して我が山本帶刀、大川市左衛門小島久馬右衛門及砲士隊等は今町の本道三王坂井より進擊す安田口に進みたる諸隊は堤上に搆へたる敵壘に直進し刀を揮ふて壘中を襲ふ、守兵尾州藩要害を頼み稍〻懈怠の色あるを以て大に周章狼狽し我兵刃に血ちぬすして奪ふことを得たりと雖ども、今町の壘壁は頗ぶる堅固なるのみならず官軍の精

兵之を守り三好群太郎(陸軍中將)之に將として能く防ぎ彈丸雨飛進むこと能はず河井即ち佐川を顧みて曰く、今日此强壘を破らんには尋常の戰畧を以て志を遂ぐべからず、豪膽銳氣を以て敵に迫るべしと、依て諸隊に銃戰を禁じ五十步乃至百步堤上を奔進して堤腹に息ひ漸次敵壘に迫るべしと傳令し、自ら卒先して彈丸雨飛の間を疾走す、此の日河井は紺飛白の單衣に平袴を着け日の丸の扇子を揮ふて諸隊に指揮す、再進の時齊田轍倒る、木村文吾之を介錯して從僕江口某涙を揮ひ首を携へて走る、河井之を目擊し齊田死せり、諸士何んぞ死せざると、益勇を鼓して胸壁に迫る、其相去る殆んど三四間に至る、是に於て諸隊一時に起て發砲し壘中に闖入す、官軍其勇に驚怖し周章狼狽遂に大敗す、今町裡中の島口に進たる本寫、池田及衝鋒隊は豫期の如く今町川を渡り猫田の壘を襲ふ、猫田の敵之を知らず出で、西堤に潛伏し東堤より進む所の齊田、田中等の隊を擊たんと欲して他顧に暇なし、我兵之を見て背面より激射す敵兵大に驚き走て猫田の壘を死守すと雖ども我兵砲戰を欲せず、拔刀奮進して壘中に戰ふ、敵遂に支ふると能はず走て急を本營に告ぐ、中の島にある薩長の兵之を聞て大に驚き必死を極めて返襲し來る、淵邊直右工門等之を率ゐ勢ひ破竹の如し、我兵猫田の胸壘に依て之を迎戰し、兩軍の砲射雨の如し、官軍死傷山をなし遂に

志を得ずして退く、我兵機を失せず急進追擊敵をして首尾を顧みるの暇なからしめ、一呼中の島に闖入し火を放て凱歌を擧ぐ、山王坂井より進みたる本道の兵は今町柴野各所の壘に發砲し安田口中の島口の砲聲を聞くや益攻擊を銳くし蘆萩或は水田中に散布して敵を惱ます、我砲士隊又間斷なく巨礮を擊射し三所の軍相吶喊して進む、日暮に至り遂に本道の壘を奪ひ今町に入る安田口中の島口及本道の破れたるは同一の時刻なりしを以て三所の軍一時今町に進入し、見附上新田等に敗する敵兵を尾擊し、勇氣愈銳どし諸隊河井に迫て直に長岡に入らんとを請ふ、河井肯せずして曰く勝て誇らず負けて憂へずとは今日の事なり、諸士宜しく三林鬼木に退て警戒すべしと、(本道口の戰は山本の傳に讓る)

今町大戰の翌日安田口の番兵一男子の來るを見認之を捕へて詰問す、答て曰く長岡藩鄉仲間後藤廣太なるものなり、河井總督に面じて一大事を注進せん爲めに來れり云々と、依て之を本陣に送致し河井面じて其故を問ふ、曰く下卒は伊東道右工門に從て下條口にありしが、長岡落城の際伊東氏の最期を見屆け爾來人夫の姿裝に變じて敵情を探偵せしに、今や今町の官軍大敗するや、長岡地方の官軍は賊兵數千襲ひ來り其銳鋒當るべからずして早きものは已に小千谷關原に退き、目下絡繹として退走最中なり、而して見附の官軍

亦退かんが爲めに俄かに人夫百名を長岡本陣に促徵し來れり、下卒乃ち其人夫となり間を得て密かに田圃を匍匐し本營に來れり、若し今日長岡に進擊せらるゝあらば及に血ぬらずして恢復することを得ん、若し下卒を疑ひ玉はゞ、陣頭に率ゐ身体其處する所ろに從はんと云々と、諍氣忠實外に溢る、河井慰撫して大に其忠を嘉みし直に兵粮の用意を命ず、佐川寛兵衛傍らにあり、河井を諫めて曰く、注進者の言元より疑ふべきにあらずと雖ども、三軍死生の機實に爰にあり、決して輕忽の擧あるべからす、長岡城下盡く忠の士民少からす、若し後藤の言の如くんば必ず尙ほ報ずるものあらん、其時進軍すべしと、古屋作左衛門之に反し進まんと主張す、河井沈思稍久ふし、再び後藤に敵情を探らしむ、後藤翌日來り報じて曰く官軍一時退去せりと雖ども、今や漸く我兵の虛實を探知し關原小千谷の官軍續々長岡に來り戰線を張る、機已に失す、昨日の比にあらずと、遂に進軍の事熄む、

却說澁木成三郎は、杉澤負傷以來長岡に潛伏し身を種々に紛して敵情を探偵す、今町の勝報長岡に達し官軍の狼狽退陣するを見、機失ふべからずとなし之を報せんと欲するも策なし、偶々道に長興寺の僧良山に逢ふ、即ち密かに告ぐるに實を以てし、貴僧如何にもして一書を我軍に屆けよ、栃尾今町其何れを問はずと良山容易に承諾し密書を固封して草鞋の間に挿み持立峠を越ゑ栃尾に赴かんと欲す、持立の官軍良山を怪み直に捕縛して詰問す良山陳辨するに戰時衣食を充すこと能はざるを以て食を他方に糊せんと欲するのみ、官軍許さず惠米の符を與へて長岡に歸へらしめ、澁木の苦心全く畵餅に屬す、

今町の役齋田轍、中島安四郎、古澤直三郎、本木京五郎、高橋吉之助、正山猪三郎、等即死し、野村貞之丞、井上貞藏、杉田爲五郎、原田泰次郎、松本四郎、田島勇藏等重傷を負ふ、中島安四郎の倒るゝや、其兄文治右衛門介錯し首を脊に負ひ衆に先じて進む、諸隊之を見て大に感奮し銳氣益加はりしと云ふ、本木京五郎は强勇粗暴を以て其名全藩に鳴り、人呼で鬼穴と稱す、曾て堤上に颯れて誤て水中亂杭の間に顚落し杭木の爲めに臀部を穿たること最も深し、京五郎毫も意となさず、是より鬼穴の稱起る、

六月四日我兵葛卷傍所に進む、是より見附の官軍今町敗軍の爲めに其守を失ひ、退て押切村に陣し栃尾川の南堤及ひ鹿熊に防戰す、蓋し官軍福井大黑の間に胸壁を築かんと欲するも、我兵の進擊するを恐れ姑く栃尾川に防禦して其間に成就せしめんと欲するものなり、故に其防禦最も嚴重にして容易に破ると能はず、兩軍の距離僅に十餘間砲戰頗ぶる烈しく

此邊ハ長岡ヨリ凡二里ニシテ丑寅ノ方

して、頭を擧ると能はず、見附川岸の我兵側面より攻擊すと雖ども官軍（信州田の口の兵）必死防戰退くの色なし、六日に至り官軍福井大黑の胸壁成工せゝを以て密かに軍を退く、是に於て官軍は川邊、十二潟、池の島、筒場、大黑諸村に堅守し東軍は本營を四ッ谷村清水美之七方に移し押切、福井、百束、四ッ谷諸村に壘を築き以て進攻の策を議す、而して栃尾口の官軍は今町の敗に由り赤坂、杉澤等に止まると能はず、一は退て浦瀨を陣脚と定めて栃窪、土ヶ谷に一は持立峠を堅守して田の口荷頃地方に一は半藏金に據り中野俣より東谷地方に各戰線を張て以て平地の官軍と氣脈を通ず我兵亦栃尾に陣脚を定め荷頃、田の口、栃窪、中野俣、吹谷地方に壘を築き、大隊長牧野頼母軍事掛川島億二郎之を總督し以て平地の東軍と連絡す、

第十章　十二潟持立以下各所の合戰

六月七日中の島に陣せる大川隊米藩と共に約して大口村に進擊す、大川隊五百刈村に至る時米藩已に敗れ來り敵強くして知るべからざるを說く、我軍奮然敢て進まんと欲す、偶々河井繼之助來り厲まして曰く、黃昏を期して必ず其功を奏せよ、會の佐川隊又來援せんと、我軍即ち勇を皷して敵に迫る、敵兵猿橋川を隔てゝ防戰し、彈丸の來ると頗ぶる烈し、我軍大呼激進して猿橋川に至り、將さに川を渡らんと欲するも津梁なくして進むこと能はず

而して敵西堤に依り注射すると雨の如きを以て彈丸兵糧の通路を斷たゝれ進退利を失し苦戰して漸く中の島に退くことを得たり、此日田中小太郎即死し森安五郎、弓削豐太郎、武兵之助、村井賢次、等重輕傷を負ふ、仝月八日栃尾各所の我兵一致して持立峠に進擊す、花輪彦左衛門、渡邊進、萩野喜右衛門、稻葉又兵衛の四小隊は一の貝より持立の東南に出會津村松の二小隊は輕井澤より前面に進み我が栃本五左衛門の一小隊は其右側を堅め、會津一小隊は比禮より進む、相約して曰く敵の發砲非常ならざる限は我より發砲するとなく疾驅して壘中に雷擊接戰せんと、即ち各携ふる所の彈藥を限り、別に豫備をなさずして進擊す時に天未だ明けず、官軍我兵の迫るを知らず、然るに我軍中約に背くものあり、壘に至らずして砲を發す、敵兵大に驚き蹶起して防禦の術を盡し、發砲すると最も烈し、我軍已むを得ず之に應じ、勇進激厲殆んど壘を奪はんとす、官軍亦戰の不利なるを覺り成願寺村にある輜重を長倉に運送せしむ、大砲隊已に砲を引て山を下る、然れども此時官軍の援兵來り我兵未だ全く壘を奪ふこと能はず、而して限りあるの彈藥は激戰の爲めに發射して殆んど一彈丸を餘さゞるに至りしを以て、如何ともすると能はず、遂に其目的を達せずして退く此日武丈左衛門、柿村掬次右衛門、吉岡榮八等戰死し、山岸甚太夫、辰野友仲太、高橋丹五衛

只見ハ會津
八十里越ハ若松線

門、山内谷右衛門、山岸梅吉、關川成右衛門等傷を負ふ、

因に記す始め長岡の兵藩主一族を奉じて會津に入るもの用人花輪彦左衛門、柿本五左衛門及扈從組其他を合して八十餘名なり、然るに只見村に至て長岡城恢復の爲め苟も銃劍の任に堪ゆるものは凡て出陣すべしとの議起り、之れが爲め其間多少の議論ありしと雖ども遂に之れに決して花輪、柿本各一隊の長となり、八十里越より葎谷に出で持立の役に會したるものなり、故を以て藩主に付添の士は豐部政之丞等數名にして余は悉く兵役に就くに至れりといふ、

六月十一日我藩田中稔、池田彦四郎の二隊相約して敵を襲ふ、田中隊は福井本道より進み池田隊は鹿熊福井間の泥畔深田中より園土手(堤名)に進む、時に午前十時にして敵我兵の進むを見認め狙撃すると雨の如し、我兵泥土中を疾歩して園土手前面の小堤に據り必死激戰すと雖ども敵要害に拒戰し、加ふるに押切筒塲各壘の敵兵池田隊の左右前面より撃射し如何ともすると能はず、會の佐川隊急を見て來援すと雖とも敵壘堅くして破ると能はずして退ぞく、此の日鈴木始次、安田玄太郎等傷を負ふ、越ゑて十四日に至り我軍策を決して大黒の敵を襲ふ、蓋し池田彦四郎隊は大黒口の火焔を相闘に猿橋口へ進み、大黒口進撃の

諸隊は押切口の砲聲と同時に進むの約なり、軍事掛三間市之進、稲垣林四郎、横田大助の二小隊及會藩木元隊は押切村の砲聲を聞くや、直ちに福井の寺裡より畦畔を潛行し、横田隊は大黒壘の北より稲垣木元の二隊は三間之を率ゐて南より進撃し、壘を隔つと殆んど數間に至て發砲す、壘の守兵富山、高田の軍大に周章狼狽し錯愕の間に兵を整て注射すと雖ども我兵機に乘じて壘中に躍入し、劍銃相接し敵の倒るゝもの少からず、敵兵走らんと欲するも、我兵南北両面より追撃して其逃路を絶つ、即ち身を猿橋川に投じて彼岸に達すと雖ども多くは我兵の狙撃する所となり、其死傷殆んど算なし、而して遁逃の機を失したる敵兵は壘の側にある竹蔭に潛伏す、我兵之を知らず三々伍々敵を驅逐して備を乱る、猿橋口の官軍敗報を聞て來援す、其勢ひ破竹の如し、我兵之を迎へ討つと雖ども隊列整はずして諸兵の進退意の如くならず、加るに襲に猿橋川に投じたる敗兵河の西にあつて我側面を要撃し竹藪中の敗兵亦起る、我兵必死防戦すと雖ども兵少なく機失し、如何ともすると能はず、隊長田中稔、横田大助等重傷を蒙むり、其他死傷するもの廿二名殆んど一隊を失ふ、返戰數回漸々にして福井寺裡の壘に退く福島靜衛之助、高井湧輔、關川文晉、櫻井定次郎、加藤安太夫、神保國之丞、植村音之助、之に死し、田中稔、牧野弘人、大川長之助、森清次

篠原玉藏、村松忠太郎、中村藤之助、太田音五郎、高橋文太夫、高野豊七、横田大助、村松武八、倉澤多仲、三堀鉉太、武幾彌、堀井鉄八、等重輕傷を負ふ、

當日の戰爭は今町以來の激戰にして、官軍の死傷殆んど百名なりしといふ、押切口の相圖後れたる爲め、大黑口の我兵火焰を擧ぐると能はず、故を以て池田隊進擊の時機を失せりと雖ども、會津衝鋒隊は大口より進んで十二潟高見の敵を不意に襲擊し、大砲一門を獲て歸へるといふ、

土ケ谷ハ長岡ヨリ凡東四里

三間市之進諸隊を激勵して一意來援の敵を防禦す、傍らの竹藪中に潛伏し居たる敗兵之を伺ひ、密かに刀を拔て三間の背後に現はれ、將さに斬らんとす、衆皆之を知らず、其機間に髮を容れず、三間の從僕鶴吉なるもの之を認め聲を發し注意を促すの暇なきを以て自ら帶ぶる所の刀を拔き、敵の背後より兩斷す、諸兵大に驚き始めて竹蔭中に敗兵の潛伏せるを知れりといふ、

此日又土ケ谷に陣したる戰が保地九郎右衛門、鬼頭六左衛門、偵小太郎の三小隊及米澤の一小隊栃窪峠の敵を襲擊す是より先浦瀨の官軍兵を土ケ谷に向け、比禮平石平上鴉嶺等に壘を築て氣脈を通じ、以て土ケ谷と砲戰す、我鬼頭、偵及米澤の三小隊は本道より進み、

福島ハ四ツ谷福井ノ末申ニシテ此間凡三十丁此所ニハ丁ト云大沼アリ

保地の一隊は扇ケ谷より其側面に突入し、以て敵應援の衝を絶つ、偶々雲霧冥漠咫尺を辨せず、守壘大垣の兵我兵の迫るを知らず、錯愕狼狽儘に砲を交て敗退し、山麓に止まつて拒戰す、上鴉諸壘にある官軍來援せんと欲するも應援の道絶して如何ともすると能はず、我兵壘を奪ひ勢に乘じ山下の兵と激戰し翌曉に達す、長州、松代諸藩の官軍急を聞て來援し密かに龜崎の山に上て我側面を擊ち山下の兵と共に挾擊す、時に朝雨滂沱雜霧濛々たるに會す、我兵敵の方略を辨知すると能はず、密かに軍を拔て土ケ谷に退く、小令吉田仙助、草生鐵三郎、本間左吉之に死し、矢田定平、鈴木時之助、池野庄七、山本藤七郎、伊佐竹次郎、吉田定之丞、飯田直之進等重輕傷を負ふ、爾來各所屹として對壘し砲聲已むなしと雖ども互に進擊するとなかりしが、

六月廿二日長岡の兵策を決して城下に進擊す、其約に曰く池田、千本木、大川、篠原の四小隊は會、米の諸兵と共に福島村に進擊し、火光を擧ぐべし、大口押切笛塲等の諸壘は之を見ると同時に疾驅雷擊すべしと、曉二時諸隊四ツ谷沖の道に出れば夜來の大風雨にて泥土膝を沒し、特に沼地にして本年數度の洪水に遭遇せしを以て道絶して進むへからす、我兵或は畦畔を步し水田を渡り、楷梯板の類を以て橋を架け、道を造り福島に至るとき正さに

鶏鳴なり、村端に至れば村民四五篝火を焚て番守せり、我兵告ぐるに實を以てし、且敵陣に先導せしむ、村民感泣命に應ず、爰に於て我が大川、篠原の二隊は米澤一小隊と共に分進し、宮島村より永田に出て池田、千本木の二隊は福島村に火して東軍に相圖を報じ夫より稻葉に進み、新保に至て大川、篠原の二隊と共に相合して長岡に入らんと期す、斯て池田、千本木の二隊は福島の敵壘に入り、直に本營を襲ふ、富山藩本營に搆へ銀燭煌々として頗ぶる威嚴を粧ふ、我兵進んで之を圍み俄然連發亂射し、恰も百雷一時に落るが如し、敵兵大に狼狽し彈藥器械は固より衣類を身に纏ふの暇なく隊將裸跣田間を逃走するの有樣なるを以て我兵大に奮躍し、火煙を擧て諸隊に勝勢を報じ、陣脚を爰に定め、先池田の半隊をして稻葉に進ましむ、依て半小隊は直に稻葉に入り進んで永田村に至り殆んど城下を去る數丁なり、長岡にある官軍之を見て大に驚き衆を盡して來拒す、我兵迎戰奮鬪すと雖も衆寡敵せす、支ふると能はす、即ち援を福島村の陣に促す、答て曰く福島も亦兵少くして分隊すると能はす、天明已に近し、必す來援の兵來らん暫らく退て共に福島を守れと、依て半小隊福島に退く、蓋し福島の兵進んで城下に迫るを難しとなす、然れども後に浦瀬の官軍を控へ右に大黒諸壘の強敵あり、而して大川、篠原二隊の戰狀明らかなるを以て、姑く福島に守衛する者なり、福井共他の我軍は福島の火勢を見て一層攻擊を鋭くし、稻垣、田中二隊相合して大黒の壘に迫る、會の佐川隊米兵と共に來援し奮鬪激射最も勉む、守兵高田藩必死防戰すと雖ども勢支ふること能はす壘將さに陷らんとす、偶々薩の一軍來て力を援け勝敗決せざること數回、我兵常に泥土深田の中にあり、其酸苦謂ふべからず、乃ち姑く福井に退く、大川、篠原の二隊は宮下村の官軍を驅逐して篠原隊は追擊龜貝村に至り壘壁を築き、大川隊は宮下村の要所に胸壁を搆へ以て浦瀬の官軍に備へ、以て各所の戰狀を探知し、直に長岡に入らんと欲す、而して浦瀬の官軍福島の火煙及び大黒地方の砲聲を見聞し、大に驚き其後を絶れんとを恐れ、長岡に退かんが爲め必死となつて我二隊の胸壘に迫擊す、我兵奮戰拒守敵兵進むと能はず、然るに池田の半小隊と永田に戰ひたる長岡の官軍兵を分けて宮下に進み、我二隊の後背を擊射すると頗ふる烈し、我兵死を期して守ると雖ども寡兵且つ來援の軍兵なく、遂に敗して福島村に退く、爾時福島村の我兵は稻葉右道より進み來る敵と激戰し居りしが先に大敗したる富山の兵下條より再び隊を整へ薩兵と共に福島に進擊し、宮下の官軍亦勢に乘じて來襲せるを以て我軍如何ともすると能はず、已むを得ず水門に退き死戰す、大黒稻葉各所の官軍益勢を鋭くし、彈丸雨飛我兵死傷益

水門ハ福島大黒村ノ界

福島ノ東ハ浦
潟北ハ筒場十
二潟

多し、然れども發戰毫も尾せず、水門の敵壘を奪んと三回に及ぶ、防戰數時彈丸兵粮次第に欠乏し走らんと欲するも、泥沼水澤前後にあつて如何ともすること能はず、進退殆んど維谷まる、福井にある稻垣林四郎、森一馬の二小隊會米の兵と共に來援し、軍事掛三間市之進亦一隊を指揮して來る、是に於て我兵一條の血路を開き福井百束の壘に歸るとを得たり、此日三間毓之助、龜倉恭之進、長島金彌、原政之進、（後會津病院に自刃す）長谷川半七、風間太五右衛門、堀口良次右衛門、秋元友之助、阿部八百助、酒井富貴次等之に死し隊長森一馬嚮導加藤一作、杉山虎藤太、保高三吾右衛門、廣江喜野太、水澤與五左衛門、奥山善藏、阿部甚太夫、伊津健吉、井田忠太郎、田川巳貴太、大味豊之丞、小林峯彌、藤本權兵衛、西脇森之助、佐藤太郎吉、大崎直太等の重傷あり、而して軍事掛萩原要人砲士司令士陶山左右平、秋山伊右衛門の輕傷あり、

編者曰く當日の戰爭に關し數冊の日誌ありと雖ども、各異る所あり、而して之を當時の人に問ふも亦多少の異同あり、左れば寸毫も誤謬なしと保證すること能はず、又當日の戰爭は我軍退口に於て頗ぶる苦戰せりと雖ども、其最初福島に深入し突然火の手を揚げ、諸壘一時に發砲せしときは、官軍も大に驚き浦瀬を始め十二潟筒場等の官軍皆退軍の準備をなせしといふ、

此日又田の口中之俣等諸壘にある我藩花輪彥左衛門、渡邊進、萩野喜右衛門、稻葉又兵衛の四小隊米澤二小隊會津一小隊と共に鷄鳴發進して半藏金の敵壘を攻擊す、萩野、稻葉の二隊は本道より其正面を衝き會兵は右傍南の山上より、花輪、渡邊の二隊米藩一小隊は、左の山上より三方共に挾擊す、本道の砲戰數刻方に闌なるに及んで、花輪、渡邊の兵數十先驅して密かに山を越ゑ敵の背後に出でゝ、砲擊す、守兵尾州藩大に散亂し殆んど敗せんとす、長藩及松代、松本の兵左右の山上に散布して、本道の官軍を援け必死我兵と拒戰す、我兵高低其宜しきに從て發砲し頗ふる全勝の觀ありと雖ども、渡邊、花輪の二隊戰線相離隔して未だ至らず、而して時正午に迫り彈藥兵粮繼ぐなきを以て己むを得ず、先驅の兵退て山を下る、途に二軍に逢ふ、依て再擧を圖れば敵已に我據を占めて發砲す、我兵迎戰すと雖ども時機已に失して如何ともすると能はず、即ち本道の兵と共に退て田の口中野俣等に保守す、此日長の三番隊長を始め敵の死傷甚多し、我山本清三郎、宮岩太郎、村松清太夫等即死し、柘植房五郎重傷を負ふ、砲士小令九里孫次郎（今の少佐九里孫次郎の養父なり）は微傷を蒙ひり、勇を鼓し單獨にして退く、我兵慄怖心甚きものあり、退軍の號令を聞て疾

歩し、九里を見て敵と誤謬し背後より之を斬る、九里爲めに重傷を受け栃尾に至て死す
因に記るす、此日會の隊長井深澤右工門は曾て地理を探知し其前夜密かに荆棘を開きて
一條の間道を造り、突然山上より攻撃したるを以て官軍大に狼狽し、之れが爲めに長州
十番隊長を始め死傷甚多かりしといふ、」

第十一章　土ヶ谷以下各所の激戰記事

今町激戰以來官軍常に守戰の地位を占めて一回も進擊するとなし、然るに七月朔日山手の官軍兵を分て進擊す、則ち浦瀨村の官軍は土ヶ谷口へ、持立峠には荷頃口へ、半藏金口は木山中野俣口へ、兵を三路に分て來侵す、我軍既に敵兵の增加するを見るや、豫じめ備を設けて、之を待つ、土ヶ谷には我が鬼頭六左衛門米藩一小隊と共に本道の壘を守衛し我が小島久馬右衛門、槇小太郎の二隊は西南山上に陣して以て比禮桂の中間を横斷し、壘を築て堅守す、朔日未明敵果して來り、小島、槇の二隊を挾擊す、槇の一隊南方に進み散布して之を迎戰し、小島の一隊は壘に據て西來の敵と戰ふ、而して我本道の兵亦大小砲を斜めに激射して、二隊の勢を援く、然るに敵兵數隊突然我本道の壘に進擊し其鋒最も鋭く、我兵必死力戰すと雖ども遂に支ふると能はずして走る、山上にある二隊之を知らず、前面の敵

と激戰して餘念なし、本道の敵兵密かに其背後に突出して我が小島、槇二隊の歸路を絶つ
我兵大に驚き前後奮戰すと雖ども衆寡懸絶死傷增加し遁逃の路なし、即ち各伍散亂身を
荆棘榛莽に投じて菅谷内村に敗走す、其走るや、逃路宜しきを得たる者は幸に無事なりと
雖ども、不幸にして本津川に出たる者は、敵の已に比禮より我に先んじ、爰に據るに會し
無慘の死狀をなす者ありき、澁澤準次、隅野鷹四郎、谷口茂、小令杉本庄助、小林辰太、
今井治兵衛、小林權四郎、隊長小島家來政吉此日即死し原田音五郎、加藤市之丞、加藤治
部右衛門、丸田順之丞、小林數右衛門、澁谷信右衛門、松本又市等重輕傷を負ふ持立峠の
防禦線は會津、村松二小隊其正面に當り、我が柿本五左衛門渡邊進の二隊及仙臺一小隊其
北に陣し、共に一の貝の間道並に比禮の敵に備へ、土ヶ谷と戰線を通す、諸隊相戒めて曰
く不幸戰利なく退かんと欲するものは必ず相提携し、苟も挺身して退くこと勿れと、曉官
軍一の貝より來襲す、會津村松の兵之を本道に防禦し、我二小隊亦其左右に迎戰し、頗ぶ
る劇烈を極はむ、軍事掛川島億二郎大隊長稻垣主税と共に諸隊に指揮し防戰怠るなし、然
るに半藏金の官軍十ヶ坂に登り我本道の側面を臨射す、本道の兵之が爲めに動搖し告げず
して退く、仙兵も亦敗す、十ヶ坂の官軍勢に乘じ之を尾擊して荷頃に闖入し、我本營を奪

ふ、我渡邊、柿本の二隊之を知らず奮戰拒擊して怠らず、午后に至り始て敵我本營を奪ひ後路を絶ちしを覺る、是に於て川島諸兵を戒め順次間道より密かに大野村に退く、小令竹垣錄之助、加藤五郎左工門、岡村友次右工門、即死竹垣友彌、三浦勘左衛門、石井釼三郎等重輕傷を負ふ、半藏金口にては花輪彥左衛門一小隊を以て東中野俣に陣し以て之を防ぐ、官軍衆を盡して西中野俣木山の兩所より來襲す、我兵少時之を迎戰すと雖ども衆寡敵せざるを知り、去て吹谷に退て死守す、官軍亦鋒戰を好まず轉じて持立峠の軍と合して我荷頃の兵を擊ち、進んで大野に來擊す、此日我が花輪隊に於て花輪伊寿太、山岸甚之丞重輕傷を負ふ、三路の官軍大勝を博したるを以て其勢ひ實に破竹の如く、荷頃に陣脚を定め、更に隊列を組み栃尾町に進來す、爰に於て東軍布陣して栃尾を守り、我が柿本隊は大野古城趾の左に、渡邊隊は右に陣し軍事掛川島億二郎之を總督して敵を防ぐ、官軍衆を盡して來擊し、栃尾に入らんと欲するも我兵難所に散布して擊射するを以て能はず、空しく荷頃に退回す、而して官軍の荷頃を奪ふや、堅壘を諸所に築き、荷頃藥師に一陣を張り我兵を扼す、話頭兩岐福井百束にある米藩は大黑一ッ家の軍を襲擊せんと欲し、長岡兵の後援を我が總督に精求す、河井即ち池田、本富の二隊に命ず、二隊答て曰く謹で命を領すと雖ども

も、是暴虎馮河の戰略徒らに兵を損するのみならんと、河井慰撫して曰く我れ暴戰の所以を米藩に說くと雖ども米藩前夜敵壘を探偵し、此の胸壁の最も虛薄なるを斷言して聽かず、若し米藩にして壘を奪ふあらば長岡藩何の面目かあらんと、我兵即ち之れに從ひ米兵と共に進む約あり、曰く米藩決戰隊密かに敵の裡面を擊たん、其砲聲を聞て前面より襲擊すべしと、依て我兵白布を頭に纏ふて福井の寺裡に隊を列ね、決戰隊の相鬪を待つと數時、決戰隊は微息潛行小銃遽發すると同時に拔刀して敵壘に闘入す、然れども決戰隊の進擊遲刻せし爲め此時已に東天微白を帶ぶ、我兵砲聲を聞くや否や、疾歩直進敵壘を衝く、守兵壁に據て退かず、散彈小銃を放つと雨の如し、本富隊最も銳烈に進み壘を隔つこと僅かに數間なり、守兵富山、高田の兵先つ退き、全壁將さに我有たらんとす會々薩長の兵返戰し來たり、其勢ひ最も猛烈を極はむ、我兵兩後の水田に膝を沒し、銃器皆泥土に被はれ、身体發射共に自由を得ず、僅かに畦堤に據て敵と戰ふ、既にして米澤決戰隊遂に敗走せしを以て、敵兵愈勢ひに乘じ彈丸飛來面を向けがたし、加レ之に我兵白布を頭に纏へるを以て敵の狙擊に便を與へ彈丸蝟集苦戰數刻終に相散潰して本壘に敗還す、此の役最も激烈なる爭鬪にして傳令恩田久右衛門半令牧野勘兵衛、大野禎助、山本新吉、中島文治郎、金津釼之助、

宮原岩次郎、金津虎三郎、横山健三郎之に死し、隊長池田彦四郎小令吉田郡右衛門、吉田政之進、本富時太郎、牧野啓次郎、越村正一郎、飯守敬太郎、中川乙三郎、池守軍之助等重輕傷を負ふ、而して米兵の死傷八十餘名の多きに至り、官軍の死傷亦た正しく之に倍せりといふ

因に記るす、東軍は各藩集合せしものにして、之を總理するものなしと雖ども隱然河井繼之助之れが總督の地位にあり、然るに米藩の北越に入るや、勉めて越人の歡心を得んと汲々とし、高田城を得んと欲すると大旱の雲霓に於けるが如く、速かに該城を陷いれ舊領主たらんと欲するの念慮姑くも頭腦を離れず、時々言外に溢るゝことあり、河井之を覺知し、或は冷遇し、或は激勵す、是に於て米藩此一大激戰をなすに至りしものなりといふ、此の日の戰猛烈なるの証は一人として後に倒るゝ者なく、皆畦堤に據りしまて にて戰死す、隊長本富寛之丞引上の号令を發するも皆動かず、近付て之を見れは皆死せるなり、池田隊は槍長隊と稱し曾て安田多膳之に長とし旭山に長軍を破りしより或諸隊に冠たり、劍術隊(大川市左衛門隊)と相拮抗す、

此日中島文次郎大呼して進で曰く、壁を去る殆んと數歩槍長の要は今日にありと、偶々

敵の狙撃する處となり重傷を負ふ、牧野敬次郎之を挾んで走らんとす、文次郎謝して曰く主公の爲めに死す、之れ其分を盡すものなり、我が爲めに兄等を死傷せしむべからすと、牧野即ち介錯して走るといふ、

四ッ谷本營にある河井繼之助は、七月朔日山手の三路大敗の報に接して、大に驚き先此の敵を驅逐せんが爲め守りを諸藩の兵に托し軍を拔て栃尾に發す、五日諸隊の部署を定め荷頃藥師へ根岸信五郎隊を其側麓へ、本富、稻垣の兩隊を陣ヶ峯へ、萩野隊を其側面へ、大川隊を泉口へ、大瀬隊を向はしむ、而て河井は荷頃藥師を以て戰略上栃尾鄉第一必要の地と思惟し、根岸隊等と共に進擊す、敵兵大小砲を激射すると雨の如し、河井奮然荊棘中に自ら進み、以て我兵を勵ます、我兵勇を鼓して進み遂に藥師の壘を奪ひ、敵を荷頃に縮す此日隊長根岸信五郎、永井間左衛門、森田久助、山田柏之助、等重輕傷を負ふ、

第十二章　長岡城恢復前記並に河井家族記事

爾來栃尾各所を始め海濱出雲崎迄廣袤十里の間、晝夜砲戰已むときなく、北越の中央を横斷して兩軍互に山川の嶮に倚り、勝敗何時果べきやうもあらざりき、特に長岡兵は五月十九日以來徒らに舊城を三里以内の眼前に眺むるも、今町に於けるが如き快戰なく、屢々舊

八町沖トハ浦瀬ノ西福島ノ東福井百束ノ南ニシテ大沼ナリ長岡ヨリ一里餘

進勝利を得と雖ども兵寡くして守ること能はす、志望空しく去て死傷山をなすのみ、而して官軍西郷吉之助(隆盛)柏崎に入り、官兵愈増加し流言怪説紛々として人心を狐疑せしむ、總督河井繼之助苦心焦慮屢々深謀を回らし間諜を使用し親ら三間、川島、山本、佐川等と間道を潛行して進軍の策を講じ、遂に七月十七日諸隊を會せしめ長岡勢は間道より長岡城に進入するに決し、新に十七小隊を編成し將さに二十二日を以て舊城に入らんと期せしも、風雨の爲め間道字八町沖溪流漲溢して進軍すべからざるを以て廿四日に遷延す當時各隊に配付したる心得書なるもの左の如し、

心得書

一味方印白木綿振旗ノ事
一白木綿胴巻ノ事
一左ノ乳ノ所へ御合印可レ付事
一合言葉誰ト問ヘハ川ト答フルノ事
一夕七ッ時仕度仕舞ノ事
一七ッ半時食事直出立致サレ候樣用意致シ居雷鼓相打候ハヽ宿陣ノ前へ速カニ可相揃ニ

事

一行軍ノ節一人ノ間三尺一隊ノ間二十間四隊ノ間三十間ノ事
一行軍中銘々氣ヲ付ケ暫クモ油斷致ス間敷事
一夫ヨリ八町沖潛行ノ節敵打懸リ候ハヽ差圖次第二十間程田ノ中へ出居敵不追ハ何程打候トモ不搆伏居極々迫ラバ速カニ起キテ狙打一發イタシ直接戰ニ可及半隊二隊一隊ハ敵人數ノ多少ヲ見テ臨機應變タルヘシ、左右後モ同斷前ノ隊ハ伏セズ進ムヘク時宜ニ寄リ宮下ノ敵ヲ可打拂事
一何レニテモ伏兵等ニ逢候トモ兼テ覺悟ノ義決シテ驚クベカラザル事
一御城下へ打入燒立候節聲々ニ長岡ノ人數二千人城下へ死ニ來タ殺セ〳〵ト可呼事
一八町沖潛行ノ節彼レヨリ打懸ケ候砲聲相聞候ハヽ福井口ニテ大砲連發、田井ノ山上ニテ相圖ノ流星ヲ上ケ栃尾城モ同斷諸口甲乙ナク猛烈ニ攻擊火ノ手相見候ハヽ敵ノ集ラサル中ニ一刻モ早ク御馳セ付被下度事

又方面部署を定むること左の如し

方面部署

宮原ノ喰違ハ長岡南ノ人口

土屋ハ商人官軍ノ器械製造所

新町喰違長岡北ノ入口

前哨十人一丁程前ニ進ムベキ事、大川、千本木ノ二隊ハ前哨兵ニ續キ八町沖ヨリ上陸浦瀬宮下ノ敵ニ備ヘ花輪彦左衛門、槇小太郎ノ二隊ハ福島ノ敵ニ備ヘ通行ノ後敵來ラバ代々後殿イタスベシ、若シ無事ニテ通行ノ後敵來ラハ宮下ノ橋ヲ燒キ小曽根ヘ出デ大橋幷ニ其川上宮路道ノ橋ヲ燒キ、夫レヨリ堀金通リ川崎ヘ出デ船橋幷ニ庄八ケ裏ノ橋ヲ落シ、地藏町ヘ出デ不殘燒拂ヒ大川、千本木ノ二隊ハ產ノ穢川西土手ヲ固メ應援心得ベク花輪槇ノ二隊ハ蛍所町ヨリ御弓町中通リイタシ千手ヘ出デ宮原ヘ攻入喰違先ヲ燒拂ヒ喰違ヲ固ベシ、花輪、槇ノ二隊ヘ山本帶刀、大川、千本木ノ二隊ヘ川島億次郎付添監督ス、

稻垣林四郎、篠原伊左衛門ノ二隊ハ龜貝ヨリ新保橋ヲ經テ新長屋ヨリ藏王ヘ行キ安禪寺、極樂寺始メ藏王石内不殘燒拂ヒ、夫ヨリ新町ノ寺院ヲ燒キ土屋始メ其邊探索シテ喰違ヲ固メ鬼頭、小野田ノ二隊ニ合シ城岡ノ土手ヨリ敵來ラバ打拂ヒ鬼頭六左衛門、小野田伊織ノ二隊ハ新保橋ニ稻垣篠原二隊ヲ待請新長屋ヨリ喰違外不殘燒拂喰違ヲ固ムベシ尤モ稻垣篠原ノ二隊不來內ハ神田新町ノ敵ニ心ヲ付ベシ時宜ニ寄リ四隊新町東裡ヨリ掛リ候トモ新長屋ハ先ニ燒拂ヘシ、右四隊ヘ三間市之進付添監督ス、

鵜殿新井ハ藩士ノ屋敷勘之丞金子ハ官軍ノ本陣戸倉屋同斷

新町大島信濃川ヲ隔テ河岸

邊渡進、望月忠之丞ノ二隊ハ龜貝ヲ通リ永田ヨリ產ノ穢土手ヘ上リ長興寺裏ヨリ榮涼寺近邊ヲ燒廻リ士屋敷足輕屋敷ハ臨機應變タルベシ、夫レヨリ長町ヘ出デ鵜殿裏ヨリ揚之丞新井裡ヨリ金子其邊探索致シ夫ヨリ所々燒拂北御藏糧米ノ有無ヲ改メ安善寺裏ヨリ表町ヘ出テ戶倉屋探索ノ上町口先ニ出ヘシ、小島久馬右衛門、奥山七郎左衛門ノ二隊ハ永田ヨリ同斷ノ道ニテ長町ヘ出テ神田口ヨリ城中ヘ入リ探索ノ上大手口ヨリ表町ヘ出テ柳原探索ノ上横町山田草生津ヘ出テ河岸ノ船不殘東岸ニ引寄其時宜ニ依リ渡リテ新町不殘本大島ノ庄屋ヲ燒クベシ、右四隊ヘ花輪求馬付添監督ス引續本陣河井繼之助諸役人其後ニ從フベシ、

稻葉又兵衛、今泉岡右衛門、內藤內記、河井平吉、横田大助ノ五隊ハ龜貝通前三隊ハ袋町裏土手ヨリ長町ヘ出テ神田口ヨリ御城內ヘ入リ稻葉隊ハ大手口今泉隊ハ神田口內藤隊ハ千手口ヲ固ムヘシ、猶臨時可及差圖河井、横田ノ二隊ハ地藏町ニ出栖吉川ノ土手ヲ進ミ夫ヨリ諏訪堂ヘ下リ四郎丸ヘ出デ敵ヲ追拂ヒ寺院初メ其邊不殘燒拂、進ンデ米山塔ノ邊ニ固ムヘシ、時宜ニ依リ長倉モ可燒拂稻垣主税前三隊ヲ率幷城內ヘ入リ諸事見計可及差圖大川、千本木、花輪、槇ノ四小隊儘カニ小曽根通リニ至リ候ハヾ龜貝永田ノ間大

戸川ノ橋ヲ可焼落事、
又大隊長山本帯刀ハ口上書と稱して左の一編を諸隊に配與せり、

口上書

此一軍サハ第一御家ノ興廢モ此ノ勝チ負ケニアリ、天下ノ分ケ目モ此ノ勝敗ニアリテ、御家ガナケレバ銘々ノ身モ家モナキモノ故御一同共ニ身ヲ捨テ數代ノ御高恩ニ報シ牧野家ノ御威名ヲ萬世ニ輝シ銘々ノ武名モ後世ニ殘ス樣精力ヲ極メテ御奉公イタシマセウ、ナゼ分ケ目ノ軍サト云ヘハ奥州ノ敵モ今ニ墓々敷コトナク東ガ大勝スレハ越後ニ敵ガ居ラレズ、越後デ大勝スレハ奥州ニ敵ハ居ラレズ、然レバ敵モドコマデ引テ夫デ濟ムトイフ譯ニモ參ラズ、ソウナルト天下ノ形勢カ變ジ元々諸大名ガ義理デスル仕事デモナシ、軍ズキガシタ仕事デモナク只暴威ニ劫ヤカサレテヤイデモ難義デモ一寸ズリニ延シタイ愚カノ心底カラ義モ忘レテ右樣ノコトスルケレモ、心ニ誰デモ惡ルイト云フ事知ラヌ者モナク高田ヤ與板ガ快イト云フ事モナク氣樂デモアルマイ、少シ模樣ガ變ズレバ天下ノ諸侯ガ變心スルカラソリヤ敵モ大變デ天下ヲ取ラウトシテシタ仕事ハ空敷ナリソウナルト、天下中ニ惡マレ異國モ見離シ終ニハ國モ亡ル樣ニ至ルカラ容易ノ事デハ引カレヌ筈デ敵モ夫ヲ知テ居ルカラ此ノ大亂ヲ作セシ薩摩ノ西鄕吉之助ガ越後ヘ來テ天下分ケ目ノ軍サスルト云フ事ヲ聞マシタガ、何ニシテモソリヤ分ケ目タカラ此ノ軍ハ大切デ私共間違ツテモ御城下ヘ入テ死ネハ義名モ殘リ武士ノ道ニモ叶テ遺リ置事モナク、思ノ儘ニ勝テバ天下ノ勢ヲ變ズル程ノ大功ガ立カラ精一杯出シテヤリマシヤウ、御城下ハ目ノ前ニアリテ入ル事モ出來ズ如何ニモ事多デ御一同ノ御難義モ不目立樣ナレモ、中島文次右衛門殿ノ弟ハ先月二日ニ今町デ討死シ、其弟ガ兄ノ首ヲ介錯シ始終負テ戰ヒ居ルヲ私ハ見テ居マシタガ、其男ガ當月二日大黑口ノ先駈シテ又討死シ竹垣德七殿ノ兩人モ栃尾ニテ討死シ、其外アツバレノ働シテ討死手負シ人々ハ皆樣御承知ノ通忠憤戰死人ニハ實ニ氣ノ毒ノ事ナレモ、是モ是非ナイ事ニテ此上ハ一刻モ早ク長岡ヲ取返シ兩殿樣ヲ早速御迎ヘ申上御一同御忠死ノ程兩殿樣ヘ申上戰死ノ人々ヲ厚ク弔ヒ、目出度御入城ノ上兩三年モ御改革ヲ御立被遊ルレバ元ノ繁昌ニスルコトハ慥ニ出來ルカラ御一同共ニ必死ヲ極テ勝マシヤウ、死ヌ氣ニナツテ致セバ生ルコトモ出來疑ナク大功モ立ラレマスガ若シ死ニタクナイ危イ目ニ逢ヒタクナイト云フ心ガアラウナラ夫コソ生ルコトモ出來ズ、空敷汚名ヲ後世マデ殘シ殘念ニ存マスカラ身ヲ捨テ、コソ浮ム瀬モアレト、申シマスレバ能

々覺悟ヲ極メテ大功ヲ立テマシヤウ、一昨夜ヨリ風モ強ク此ノ一戰ヲ大切ニ思ヒ皆樣ト御一心ニナツテ此度ハ是非大勝ヲ致シ度ト心ニ浮ミシ文ケ口上ニテ申上ヤウト書マシタガ屆カヌ事デアルケレドモ篤ト御考被下マシヤウ、

始め長岡に戰端の開くるや、士民共に三百年の泰平に慣れ現境に遭遇する者なきを以て砲聲一聲周章狼狽爲す處ろを知らず、一度落城の難に陷るや飛說喧傳士家の婦女子道路に彷徨し其慘狀實に謂ふに忍びず、而して又農家の如き商工の如きは領主の關係より戰時に使役せられ一敗一勝毎に敵となり味方となり、加ふるに家屋田園の焦土荒蕪となる、其酸鼻狀すべからず、若し之れを許せば其話柄幾頁の能く盡す所にあらず、特に紙數限りあるを以て畧して左に河井家族の顚末を掲ぐ、

長岡城の陷るや、河井の家族兩親并に妻は難を村松村の知人に避く、然れども敵の探偵頗ぶる嚴しきを以て更に濁澤村の某に依賴す、某は仝村阿彌陀寺の住職神田月泉に向て深く此事を依賴す、月泉答て曰く首謀者たる河井の家族を隱蔽して若し發露するときは我生命財產は勿論寺院も焦土とならん、固より身を捨てゝ人を助くるは僧侶の義務なるを以て敢て之れが爲めに固辭するにあらずと雖ども目下我に弟子三名あり若し我にして死するときは弟子の前途を如何せん、然れども萬一貴下にして保證せらるゝあらば一命を捨てゝ確諾せんと、某の曰く若し貴僧にして不幸災難あらば某不肖と雖ども弟子三名を受引け長老金として一名に金五十圓宛を與へんと、月泉即ち欣然として承諾し、河井家族を寺內に潛伏せしむ、然るに家族潛伏の事何時しか世間に漏れ官軍の偵者屢々寺內を伺ふ、月泉其遂に蔽ふべからざるを曉り荷頃にある官軍の本營に至り面謁を求む、番兵其理由を詰問して已まず、月泉百方虛を吐き漸く長州磐石隊長に面して曰く愚僧曾て知人の請に依り河井繼之助の家族を寺內に隱蔽し置けり、此段注進に及ぶと隊長之を聞き雀躍して曰く汝の忠實嘉みするに餘りあり、恩賞其望に應せんと月泉徐かに說て曰く愚僧別に恩賞を望まず、河井家族の生命を乞はんと欲するなり、抑も敵となり味方となる各其主の爲めに盡すものにして心事寔に憐むべきなり、況んや事實に關係せざる家族其ものに於てをや、然るに河井を惡むの餘情其家族に及ぼし之を斬殺するが如き、豈士の爲すべき處ろならんや、願くば貴下幸に明察を垂れよ云々と、官軍遂に其乞を許し當分預け置くの一證を渡し請書を徵す、月泉大に喜んで寺に歸へれば河井の妻既に髮を斷て姿を變ず、月泉大に驚て曰く我苟も公然人の依托を受け其姿を變

せしむる、之れ我が罪なりと、之を荷頃に報せんと欲するも已に陣を移して分明ならず依て當時其村にある長藩に具申せんと思ひ一日其營に至る、本營は高梨村の寺内にあり月泉寺門に入り傍を顧みるに當寺の住職捕縛せられて松根に繋がる、月泉異しみ其故を問ふに答へて曰く近頃鯉魚の價格其性質に依て甚しき高低あり、吾多く庭池に鯉魚を蓄養す、然るに諸兵一網に打ち去て玉石混交共に烹て之れを食ふ、拙僧今日鯉魚の性質を辨じて打網の指揮をなす、彼等惡んで此の始末に至れりと、月泉首肯して徐ろに寺に入り、隊長に面し先づ河井家族の顚末を陣述す、隊長大に驚ろいて曰く河井家族濁澤村にありと通するものありて本日小千谷より捕縛に向ひたる筈なり、貴僧速かに歸らずんば必ず災あらんと、月泉即ち匆々爰を辭し去るに際し住職鯉魚の始末を語る、隊長大に怒り諸兵を召喚し面前に於て住職に謝罪せしむ、月泉阿彌陀寺に歸へれば果して捕手數十寺院を圍み土足を以て寺院に闖入す、月泉大に怒て曰く抑も當寺の正面には今上皇帝の御牌あり、然るに此の有樣は何等の亡狀ぞや、官兵の實狗處にある乎と捕手爲めに呆然瑟縮す、月泉即ち磐石隊長の預證を示して曰く若し强て小千谷に引致せんと欲せば、更に自分へ宛預證を付與せよと捕兵已むを得ず其言の如くす、是に於て河井家族は小千

谷に引致せられ後ち高田に送らる官新に一室を設け飲食の待遇頗ぶる丁重を尽す戊辰の役罷みて家族無事に長岡に歸へることを得たり、神田月泉は、度量快活雄辨滔々英俊の資あり、曾て長岡長興寺住職となり、名木野村福昌寺の僧澤庵和尚と善し澤庵和尚亦河井の爲めに頗ぶる尽す所あり、

第十三章　奥羽諸藩同盟記事

是より先會津の兵は伏見に破れ倉皇として主君松平容保を擁して江戸に歸り、後若松に退て後圖を善くせんと欲し、表に謹愼恭畏の態を粧ひ、密かに天下の大勢を窺ひ一蹶大に爲す所ろあらんことを期せり、然るに伏見の殘兵は幕軍と合体し大鳥圭介、土方歳三等と共に常野の間に轉戰馳騁して勝敗を爭ひ、一起一倒の大勢は未だ容易に薩長の手を以て鎭壓すべからざるの摸樣あり、且つ北越列藩の如きは、先年集會の盟約もあり旁同意すべき形勢あるを以て、先づ奥羽同盟の策を行ひ而して後ち天下の衡を爭ふべしと內決し、說客を諸藩に派遣して以て連衡の計を行はしむ、此時已に奥羽鎭撫總督九條澤三位の一行は仙臺に、あつて各地諸侯に朝旨を諭解し、遂に雄藩伊達上杉も其趣旨を遵奉して會津征討の爲めに兵を出し、天盡及新莊に於て戰端を開くに至りしを以て、自然會津は孤立の体を免かれ

す、是に於て鎮撫總督に向つては、謹慎異志なきの歎願書を呈出して、曠日持久の計を施し、一方には益連衡の策を成就せしめんが爲め、遂に閏四月十一日降伏謝罪を名として先鋒たる所の上杉、伊達の兩侯を奥州白坂と言ふ所に迎へて密議を凝らし、更に翌十二日岩沼に集會して、會津より奉呈する所の歎願書を庇護することに決定せり、蓋し會藩は薩長を目して德川政府に代らんと欲する野心あるものとなし、只管之を討滅して公武靜謐の舊を挽回せんと欲するの心あり、又米澤は天下紛亂の機に乘じ數百年來夢寢の間も忘るゝこと能はざりし、不識庵謙信基業の地即ち北越を得て旗を春日山上に飜へし、雄を東北の野に逞ふせんと欲する企望心あり、仙臺は曰く彼れ西南の雄藩等假令取つて以て德川氏に代らんと欲するも、吾豈四十八砦の衆を率て彼等の頤使に服從すべけんやとの、自負心あり、而して此他山形の如きは秋田に累世の怨あるを以て、熱心佐幕を主張せし故に會藩の連衡策は思ひの外容易に成就することを得たるなり、會藩より呈出せし歎願書左の如し

歎願書

弊藩の義は、山谷の間に僻居罷在風紀陋劣人心頑愚にして、古習に泥み世變に暗く、制御難澁の士俗に御座候處、老寡君京都守護之職被二申付一候以來乍レ不レ及　天朝尊崇奉レ安三宸襟一度一途之存意より他事無レ之紛骨碎身罷在萬端不行屆の儀には候得共、御垂憐を蒙り多年何んとか奉職仕居臣子の冥加無二此上一難レ有奉レ存鴻恩萬分の一に奉レ報度國威奮勵罷在奉レ對二朝廷一御後闇休の心事神人に誓ひ毛頭無二御座一伏見一舉之儀は事卒然に發り不得レ已次第柄にて是亦異心等有レ之儀には毛頭無レ之候得共、一旦奉レ驚二天聽一候段奉二恐入一候次第に付歸邑之上退隱恭順罷在候處、此度鎮撫使御東下、弊藩へ征討の命相下候由に承知仕、愕然の至り斯迄奉レ惱二宸襟一候儀何共可二申上一樣無二御座一此上城中に安居仕候ては、奉二恐入一候に付、城外屏居罷在奉レ待二御沙汰一候間一視同仁の御宥恕を以て寛大の御沙汰被二成下一度家臣擧つて奉二歎願一候右之段幾重にも厚く御汲量被レ下宜御執成之程深く奉二恐願一候以上、

閏四月

右の歎願書に對し仙臺米澤兩藩より添歎願をなせり、其書に曰く

討會先鋒被二仰付一、兩國共出兵罷在、既に仙臺先手勢及接戰候處、今般降伏謝罪之儀容保家來共申出候に付、仙臺國境陣門に於て問罪督責爲レ致候處、伏見暴動之一舉は、畢竟指揮不行屆より全く卒然に發し奉レ驚二天聽一候段至極恐縮之餘り歸邑退隱之上當時城外に於て恭順謹慎相盡し、頗る先非後悔罷在寛大の御處置被二成下一候樣、別紙歎願書之趣家

來共申出候間、益　天朝の御仁德奉二感戴一候樣　御處置奉二仰望一候、會津國情等の儀は委細演說を以て申上候通に御座候間、深く御汲量寬典の御沙汰被二成下一候樣一同奉二懇願候以上、

閏四月

仙臺中將
米澤中將

如レ斯丁重に歎願書を呈出するのみならず、尙ほ其疑念を避けんが爲めに、坂英力、但木土佐（伊達陸奧守家來）千坂大郎右衞門、竹俣美作（上杉彈正大弼家來）野々村眞澄（南部美濃守家來）丹羽一學（丹羽左京大夫家來）三浦金八郎（松平大學頭家來）平田彈右工門（阿部美濃守家來）相馬靱負、佐藤勘兵衞（相馬因幡守家來）大浦帶刀（秋田万之助家來）水野三郎左工門（水野具次郎家來）池田權左工門（板倉甲斐守家來）渡邊五郎左衞門（藤井伊豆守家來）大平伊織（岩城左京家來）佐藤七太夫（田村右京太夫家來）椎川嘉藤太（生駒大藏家來）等の十七名は會討の件に關して連署の書面を呈出せり、其言に曰く、此度會津征討被二仰付一各藩出兵已に仙臺の先手勢接戰に及ひ候、容保家來共降伏謝罪の儀申出、仙臺國境陣門に於て糺明相遂候處、伏見暴動の儀は全く異志等之れある筋には御座なく候得共、事皆卒然に相發り奉レ驚二　天聽一候段深く恐入、其筋の先手隊長等は別而謹愼申付置き奉レ待二　御沙汰一、何樣共處置仕候由に御座候、畢竟容保兼て指揮不行屆の所レ致に有レ之候段、至極恐縮仕、當時城外に於て恭順謹愼相盡し先非悔悟罷在家來共歎願を以て降伏謝罪仕り候上は、幾重にも寬大の御處置被二成下一至仁の　聖恩奉二感戴一候樣、仰望候、尤も當時　王政一新の御場合にも被レ爲レ在候、得者、何分干戈を動かせられず、人心の向背をも深く御汲量在らせらるべき時節と奉レ存候勿論春夏の間は、農時之甚急務する所に之れあり、自然民命の大に關係する所に御坐候間、是等之儀共篤と御諒察被二成下一度、今日の事は只々會津孤國耳の御處置と御思召されず、寬大の御沙汰被二成下一候者、實以て奧羽御鎭撫の道赫然立たせられ候樣偏に存込列藩衆議相盡し奉二懇願一候、尙又連名外の輩は、駈付次第可レ奉二申上一候恐恐謹言、

奧羽列藩の事態斯の如きを以て鎭撫使も亦其請を容れ東北の兵稍解けんと欲するの機に乘じ、會津は明かに奧羽同盟軍の激文を宣布せり、

天地を經綸し宇宙を總統するもの唯名義の存するを以てなり、一日之を廢すれは天地傾倒萬姓塗炭に陷ること言を待たず、窃かに見るに名分の廢滅今日の甚しきが如きものわ

らず、抑も慶元以來奎運日に開け横目竪鼻の者五常の廢すべからざるを知らざる者なし、保元の亂　天子義朝に詔して父を殺さしむ、萬世の下猶其肉を啖はんことを欲す、王政の過ち是時より甚しきはなし、今日の形勢何を以てか是に異らん今般衆諸侯をして德川氏を討しむ、其一二を擧ぐれば因州備州の如きは、德川内府の弟なり、井伊の如きは德川家の臣なり、其他三百年來臣從するものなり、而して弟をして兄を討たしめ、臣をして君を殺さしむ、天下後世是の政を何とか言はん、義朝の爲義を殺すや、爲義の朝敵たること明白なり、然れども猶屢々哀訴して命を請ふに至る、況んや今德川内府天朝に對して二心なきは天下萬民の知る所ろなり、縱令眞　勅より出るとも奉命すべからず、然るを今天子幼冲姦臣權を竊み猥りに　詔を矯めて追討の命を下す苟も人心あるもの百諫千爭して之に繼ぐに死を以てすべし、是れ皇國の大綱人臣の大義なり、而して、狗鼠の輩是大義を知らず、甘んじて姦臣の驅役を受け、東に向て兵旗を飜さんと欲す、不義無智是より甚しきはなし、嗚呼當今天下文明五常の道照々たる世に生れて、嘗つて一人も之を諫め爭ふものを聞かず、天日地に落ち海内俄かに冥々たり、悲痛歎惜是より甚しきはなし、苟も之を知るものは志を立て速に義兵を擧げ、君側の惡を誅し、名分を正し、萬世の後をして、今の保元を見るが如くならざらしむること今日人臣の節之に過ぐるものあらんや、然らずんば甘んじて賊の驅役を受る者は已れ不義に陷るのみならず、天朝をして不義に陷らしめ、四海の万國に對して　皇國の大名を汚さしむるに至る、其罪擧けて數ふべからず、庶幾ば義節の士是を四方に傳へて天下の義氣を鼓舞作興して綱常を維持せよ、

是れ奥羽列藩が同盟したる趣旨にして、其名を列するもの曰く會津、仙臺、盛岡、松川、二本松、一ノ關、八戸、七手、泉湯、銅谷、棚倉、磐城平、福島、米澤、庄内、龜田、松山、米澤新田、上の山、天童、山形の廿一藩なりとす、是より白川口及秋田口の戰爭に及ぶ次第なるが、事實北越の戰爭に要なきが如しと雖も、編者は首尾を明かにするの心あるを以て聊か奥羽の事實も記して讀者の參看に供す、

奥羽列藩

第十四章　長岡城恢復記事

戊辰の戰亂は海内に彌れり、鋒を交へ砲を戰はし腥風硝煙の修羅場兵火荒涼の野殆んと

枚擧に暇あらずと雖とも、其中に就て最も烈しく且目覺しく死傷累々山をなし、鮮血滾々川をなし、今尙ほ追懷の情に堪ざらしむるものは、會津落城の顚末と長岡恢復の一戰なり蓋し長岡城恢復の役官軍の大敗は關羽威を華夏に揮ひし當時と等しく聖上遷都の期日を延引せんと欲したる程の激戰なり、北越男兒が西南男兒の膽を挫きたるは將さに此の擧にありとす、而して此擧や單に長岡城の激戰のみにあらず、海手は出雲崎日の浦より山手は栃尾谷迄廣袤十里の間に關係を及したる烈戰にして、長岡即ち其中心たるなり、爰に越の官軍は五月十九日一擧にして、長岡城を陷れ進んで三條、栃尾に迫り、殆んど席卷の勢ひを以て八十里越若くは下越より會津庄内に進入するの計畫なりしも、彼の今町の大敗以來は徒らに壘を設けて對陣し曾に一敗一勝に其日を送るのみならず、官軍は常に守戰の地位にあつて進むこと能はず、爰に六十餘日を經過するに至れり、若し荏苒斯の如く日月を經るときは、秋去り冬來り進退如何ともすること能はざるを以て、新に柏崎に來りたる西鄕吉之助等と共に謀し合せ西鄕は艦隊を率ゐて新潟に上陸し、中越の官軍は相合して東軍を討たんと約し、將に七月二十五日を以って總進擊をなさんとす、是より先河井繼之助は、總督仁和寺の宮及西鄕等の柏崎に來り官軍益增加するの報に接するや、必す其一軍は艦隊と共に松ヶ崎に上陸し下越を襲ふの計あらんことは略ぼ推知せりと雖とも、若し之を全軍に通じ徒らに前後を防ぐの計をなさんには必ず進退維谷の場合に至らん、寧ろ下越を西鄕等に襲り我軍は進んで上越を奪ひ旗を上野の間に飜さば必す奥羽の官軍後を顧み東北の圍み解けて天下の大勢或は將さに一變すべし　深慮し、之を諸將に計り我山本、川島、三間會の佐川等と共に屢々八町沖に潛行し、以て進略の計を案じ、遂に前回配するが如く二十四日の夜を期して、長岡城を恢復することに決せり、而して長岡の十七小隊長岡に進入すると同時に米澤及我大砲隊は大黑福井口を擊破して本道より長岡に入り、官軍を夾擊し、會兵は恢尾荷頃より官軍を驅逐して濁澤若くは持立に出米兵の一軍は田井より浦瀨の敵を追擊し、海岸一手も同樣に相一致して連戰連進國境外に至るべしとの手筈なり、當時の十七小隊々長姓名左の如し、

大川市左衛門　鬼頭六左衛門　花輪彦左衛門　小島久馬右衛門
稻垣林四郎　渡邊進　稻葉又兵衛　柿本五左衛門
由良安兵衛　森廣之丞　望月忠之丞　篠原伊左衛門
河井平吉　槇小太郎　小野田伊織　横田大助

奥山七郎左衛門　・　千本木林吉

編者曰く、當時勇猛決死の名譽を得たる人々其他多くの姓名なきは皆前回の戰に於て負傷し若くは中軍付屬本陣守衛の人々なるに依れり、讀者幸に之を了せよ、

斯くて十八小隊は一時に見附に集合し、恰も蜉蝣の朝露に舞ふが如く、我命爰ぞと覺悟を極はめしことなれば或は飲み或は語り快談壯語互に志氣を勵まし、不用の物品金錢類は皆悉く知己のものに餞別となし一劍一銃の外他に一品だも携ふるものとてはなく、身体自由を極め曾て兵粮勝餅として渡されたる十五片を彈藥と共に脊に負ひ、各合印を纏ふて其日の暮るゝを時遲しと待ちけるに軈て七ツ半頃に至りければ、各隊本陣に整列し前哨兵十人即ち鬼頭熊次郎、森田金彌、武井三四郎、花輪豹之助、増井由之助等を始め外五名を先發し諸軍之に繼て軍行せり、元來前哨共は啻に慓悍なるものを撰拔したるのみならず、多くは間道八町沖に川漁を爲し、常に其邊の地理を暗知したるものを用ひし故行軍道に迷ふの憂なく、斯くて我兵市谷の船渡を渡り越し、熟田新町より添山へ出て八町沖の廣沼に至れば敵味方の炬火は一面に遥照し、特に八町沖は隣郡第一の廣沼にして、今こそ水田となりぬれど、當時は茅葦一面に生ひ茂り古來より巨蛇の巣窟と稱し士民の此處に漁するもの

市谷ハ見附ノ東

往々之を見認ることわりて、常人は之を恐れて近寄るものなく、實に寂々寥々たる沼地なり、斯る難所なる其上に此頃の大雨大水の爲め所々の小徑斷絶し、其通行の困難なることは豫期に十倍す、僅かに楷子戸板の類を以て橋を架け道を造り尺進寸歩漸くにして中央に至れば大河あり、是れ猿橋川の源流にして、沿川の茅葦は殆んど丈餘に達し其寂寥たること云ん方なし、敎導は早くも橋を架け茅野を切り開き、道を造り以て全軍を渡すと雖とも、此邊最も深田にして泥土半身を沒し、諸軍匍匐して進み、漸く茅野を出れは二十四日は弧月雲間に現はれ、大黑及田井地方の砲聲耳朶に響き飛丸流星の如く中にも敵の各壘炬火天に漲り奔走驅馳する狀の何んとなく忙はしき有樣なるは是なん將さに明旦を以て總進擊を試みしが爲めの準備なりと知られたり、是に於て全軍は田畦に伏して月の雲間に入るを待つこと一時にして、漸く暗雲籠り月爲めに掩はれければ再び行軍を始め蜿蜒迂曲して前哨兵敎導の植ゑ置く標木を目的とし、無事に先鋒大川、千本木の二隊及軍監川島億二郎等宮下村に入る、然るに敵農民二名をして炬火を守らしむ、我兵之を捉へ將さに進まんとするとき、之を距る數十間に多少の番兵あり我兵銃劍炬火に映するを透し見て大に驚き敵ありと絶叫し亂發狼狽して走る、我兵客氣に乘じ誤つて軍令に背き砲を發するものあり、他の銳

大黑ハ八丁沼ノ四田井ハ仝沼ノ東山腰

士亦之に從ふ監軍之を制するも最早如何ともする能はず、連發連進して宮下村の敵と戰ふ敵兵周章狼狽の間に僅かに隊を整へ以て迎戰すと雖ども我兵鋭氣益加はり一擊の下に追潰し、火を擧て以て相圖を諸壘に報ず、(前哨兵鬼頭熊二郎衆に先立て深入し乱發の間に討死し、中川文三重傷を負ふ)之を見るや、栃尾上山及田井等の諸山より一時に狼煙を打擧け、十二潟押切福井大黒地方の諸壘一時に大小砲を激射し火煙天に漲り、此の聲四方に起り其壯快言語に絶せり是に於て大川、千本木の二隊は浦瀬口の敵を宮下村に拒き全軍の行進宜しきを見て小曾根より川崎地藏町に出産の穢の土手を堅む、花輪彦左衛門槇小太郎の二隊は福島地方の敵に備へ、全軍の無事に通過するを待つて、亀貝より川崎に出大川隊と分れて臺所町弓町を進み、千手宮原に出て狼狽せる敵を驅逐し、火を喰違に放ち、爰に陣脚を定めんと欲す、然るに敵必死の覺悟を以て要地に據り、拒戰して容易に退かず、大隊長山本帶刀一隊を指揮して密かに其背后に出相夾んで之を討つこと甚だ急なり、敵の死傷算なく、遂に支ふること能はずして妙見に走る、稻垣林四郎、篠原伊左衛門の二隊は八町沖より富島村に進み火を民家に放ち亀貝に入らんと欲するや、官軍松代の兵日光浦に屯集し我側面を擊ちけり、我兵奮戰敵を下條地方に驅逐し、直に永田に進み新保橋を渡り鬼頭六左衛門、小野田伊織の二隊を相合して新長屋を始め近邊を燒き拂ひ、勢ひ破竹の如く敵を尾擊し鬼頭、小野田の二隊は喰違を嚴守して以て城岡土手より來る所ろの敵を防せき稻垣、篠原の二隊は逃路を得ずして必死に迫る、敵兵を藤王石内に驅逐追擊し其勢破竹の如し敵兵益狼狽其討たるゝもの算なく、死骸散亂其狀實に見るに忍びず、此の時篠原伊左衛門衆に先立て奮戰し石内の敵壘を飛躍し敵を切ること數十衆皆其技の妙に驚かざるなし總督宮帶ふる所の金飾燦爛たる一刀を奪ひ鋭氣益加はる偶々飛丸來つて体を貫き重傷を蒙ひり遂に死す、篠原人となり穎悟劍を江戸の齋藤彌九郎の門に學んで小天狗の稱あり、後ち藩に歸り、後進より拔擢せられて吉田何右衛門と共に師範役たり、曾て敵兵の大黒地方の諸壘にあるや、屢々篠原の安否を村民に問ひしことあり、是れ江戸に於て其名の喧傳せるに依れり、行年三十有餘にして沒す、斯くて稻垣、篠原の二藩は敵を中島地方に驅逐し極樂寺に突入して之を探ぐり、(長岡藩士の從軍を避けたるもの多くは爰に潛伏せるに依れり、)再ひ新町口に戻り三軒屋の土手に據り鬼頭、小野田の四隊相合して下條の敵を防く、渡邊進、盥月忠之丞の二隊は亀貝永田より產の穢土手に出長興寺裏より進んで榮涼寺を燒き、三々伍々に狼狽せる出沒必死の敵を此所彼所に追擊し進んで神田町に至れば兼て四條

高倉兩宮の本陣と聞へし矢島商家には錦の御旗翻翻として火光に映せり、我兵其備あるを疑ひ之を探くるに一兵もなし、即ち重器を奪て城中に送り、柳原に進む、蓋し渡邊隊は見附に於て諸隊編成の際特に精練なる鋭士を一團となし銃器の如き亦他隊と異れり、故に畧ぼ方面を部署せりと雖とも、此の隊は遊撃隊にして危き方を救ふべき義務を有せり、然るに此時長岡城を探りて横町より草生津に向ひたるに、小島彖右衛門、奥山七郎左衛門（小島は進入の際福島に於て火傷し指揮すること能はず）、の二隊甚苦戦の報ありしを以て即ち之れを援んが爲めに來るものなり、今泉、内藤、稻葉の三隊は地藏町より進んで城に入り北門を守衛し、河井、横田の二隊は地藏町より長倉に進み火を各所に放ち、四郎丸口を堅め以て持立地方の官軍に備ふ、蓋し此夜官軍の長岡にあるもの數百にして多くは各壘に分配して明旦の進撃に備ふ、其宮下村に砲聲起り火烟上るや、官軍進撃の端なりと速了せり、然るに突如として火烟永田新保に起り續て侍屋數寺院一圓に火となり、上下の食違ひを始として四方八方に砲聲轟き雷鼓吶喊猛火天に漲り彈丸雨の如く、市在一時に修羅場と變じたるを以て敵は何れの方面に來りたるや殆んと認むること能はず、　狼狽周章するの外なく進んで下條大黒に走らんと欲するも新町口已に我有たり妙見に出でんと欲すれば、宮原食

違將さに我兵堅壘を築けり、特に夜中不知案内進退維谷まり、多くは草生津に宿して天明を待つて川を渡らんと欲す、然れとも是より先きの敗兵已に相爭ふて舟に乘り逃るを以て東岸には舟一艘もなく已むを得ず一方に敵を防き、一方に應援の船を呼ひ進退益谷まる小島、奥山の二隊は草生津の敵を討たんと欲し其勢ひ破竹の如くに進む、敵兵互に蹂踏して川に溺れ死するもの多く殆んど屠殺せられんとす、是に於て敵將三好軍太郎（陸軍中將）中井弘三（滋賀縣知事）等衆を勵まし草生津堤に據守して背水の陣を布き我兵を撃射すること頗ぶる猛烈を極め、彈丸雨の如く面を向べからず、我二隊楯なくして進むこと能はず、渡邊進隊急を聞て來援し勇を鼓して奮戰すと雖とも敵要地に據て必死を極はめ、彈丸を激射するを以て如何ともすること能はず、諸隊少く逡巡す、總督河井繼之助走せ來り自ら隊旗を揮ひ諸兵の止むるを聞かず、彈丸雨飛の間を進む、隊長渡邊之に激まされ率先して遂に重傷を負ふ、諸隊其暴戰を唱へ且つ告て曰く一軍を草生津の南方に出でしめ左近村より横に敵兵を撃たば必ず其功を奏せんと、河井即ち其の言を容れ前面の砲戰を緩ふす、是に於て小令竹垣權六等の二十餘名草生津を横切て左近の傍に出密かに茅間より敵陣を伺ふに敵兵一面に堤に沿ひ據り前面の我兵と戰ひ横に我兵の迫るを知らず、而して騎兵の率ゐ來

りたる軍馬河を渡すこと能はざるを以て、之を傍らに放ちたるものと見へ、數十の悍馬互に咀み爭ひ、沙を飛ばして一面に沙煙起ち、其狀甚だ意外なり、我兵大に喜び突然横面より擊射すれば、流石に必死を期したる强兵も、其意外に膽を奪はれ俄かに起つて周章狼狽し、堤に沿て内川に走り、更らに陣を布て究鼠の勢ひをなす、是に於て兩面の我兵進んて草生津を窺ひ、堤下を顧れば憐むべし創傷者の如き急遽の際西岸に送ること能はざりしと見へ皆所持の短刀若くば小刀を以て自殺し、見る者慘鼻に堪へず、我兵進んで内川の敵を討たんとす、河井之を制して曰く、彼れは究鼠なり討つべからずと、我軍之に從ひ草生津を守る、此時急使あり曰く下條の敵兵衆を盡くして、新町口に迫まり其勢ひ猛烈我兵大に苦戰の色あり、速かに來援せよと即ち渡邊隊を以つて新町に赴援せしむ、

下條ハ長岡ノ北一里余新町ハ長岡町北ノ入口

第十五章　長岡城恢復記事其二

官軍は去月來本營を下條村に移し百般の軍機凡て爰より出でざるはなく、特に廿五日總進擊の計成るや、主動機となつて軍配を凝らせし、山縣狂介、黑田了介等を始め策士精兵は將に粮を包み、枚を含みて發せんとす、然るに何んぞ圖らん、長岡地方倏忽として炎烟起

り砲戰頗ふる烈しく容易ならざる形勢なるを以て、直に精兵を率ゐて長岡に入らんと欲するも、此の時已に大黑福井十二潟も亦戰爭烈しきを以て前虎後狼の思ひあり、遂に廿五日天明必死の精兵を率ゐ血路を開かんが爲めに城岡堤即ち俗に云ふ發田より一文字に進行して新町に迫り來る、我篠原、稻垣の二隊は豫じめ之に備ふる爲めに三軒屋に壘を築き、左右に分れて之を防き鬼頭、小野田の二隊は喰違を固守し以て必死の敵を迎ふ、斯くて三軒屋の砲戰天明に始まり敵の猛烈なると前後比なく如何に擊たれ如何に傷つくも嚴として毫も退くの色なく、先を爭ふて競ひ來り、特に其進退の機敏なる尋常一樣の敵と異なれり、我兵も亦必死を極はめ死傷算なしと雖とも飽まで惡戰して已ず、然れ共如何せん昨夜見附より八町沖の深田を涉り奮進戰鬪一睫の間も休息する能はず、疲勞困頓苦戰甚し、已を得ず喰違に退く、是に於て敵鼓譟して迫ると愈急なり、鬼頭、小野田の二隊勇を鼓して前の二隊と共に迎戰し、必死防禦すること數刻、隊長稻垣林四郎、小野田伊織を始め傷を蒙り若くは死する者甚多く、全軍爲めに沮色あり、產の穢の土手に堅守し居たる大川、千本木の二隊急を聞て來援し衆亦大に勇み斗擻して戰ふ、兩軍の死傷益多く官軍は特に吾に數倍す、彼の法華塔近邊は鮮血滾々と流れて河をなし、戰後見るものをして戰慄せしむ、此の時敵

法華塔ハ新保橋ノ際

の一軍は藏王より屋臺小路に突出し我兵を横に擊つと甚急なり、蓋し此の敵は逃路を得ざる敗兵各所に潛伏し、天明新町口の戰に乘じ則ち新町を横に出て山手に逃れ浦瀨地方の官軍に投せんと欲する眞の究鼠なり、是に於て我渡邊隊等之を長福寺裡及西神田邊に迎戰し、出沒自在に刃を接へ砲を戰はし頗ぶる防戰に力む、二方の戰ひ未だ勝敗を分たずと雖とも敵の勢ひ益盛んにして、我兵頓に挫色あり、總督河井繼之助は縱横に奔走して援を餘隊に促し、衆を勵まし最も勉む、尙を援兵を差向けんか爲め城に歸るの途次新町に於て飛丸來て足を貫き、遂に起つと能はず、然れども衆士を勵まして已まず、斯くて我兵は朝來彼の强敵と戰ひ疲勞愈甚しと雖とも、互に相勵まして曰く既に大黑福井の諸壘破れて米、會の兵必ず其後を襲はんと、士卒之を恃んで防戰すと雖とも下口邊竟も破れたるの景色なく、敵兵益必死を盡して退くの色なし、是に於て我兵爲す所を知らず、寧ろ逃て城に籠もり死を潔くするに如かずと、軍議一決し日暮軍を拔て城に退き、神田口門を始め四方を警衛して以て敵を待つ、敵果して勢に乘じ吶喊して進來し、大小砲を神田口門に激射すると雨の如し、此の時我兵已に死を決し城を枕にして亡ぶるの外なしと覺悟せしを以て、其防戰も頗ぶる宜敷を得て、敵兵容易に迫ると能はず、時に一天掻き曇り大雨車軸を流し、雷鳴天

地に轟ろきければ、我兵火を所在に放ち炬火に代へ以て苦守せり、然るに不思議なるかな敵の砲聲何時となく微衰し、朝來亂軍突擊の聲に埋れたる長岡も寂々寥々として雨に火の映るを見るのみ、其悽愴たると言語に絶し、諸隊益苦心を累ね寐も交睫すると能はずして天明に至る、遂に又本道口にある福井大黑十二潟の東軍は廿四日宮下富島の火烟を望見すると同時に激進激射し、一時に蹂み碎かんと必死を盡すと雖とも敵兵亦防禦の術を盡し容易に破ると能はずして翌廿五日に至る、而して遙かに長岡を望めば昨夜來の火烟尙ほ滅せずして天光を蔽ひ大小の砲聲耳朶を穿つと益甚しく、劇戰眞最中と見へければ、東軍大に氣を勵まし米會の兵皆曰く我黨若し約に背て此の壘を速かに破ると能はすんば、長岡の兵皆殲殺せらるへきや必然なり、死を恐れ其約を履ますんば何んの面目ありて長岡人士に見ゆんやと、即ち各隊覺悟を決して壘壁に迫ると三回に及ふと雖とも敵の防禦頗ふる堅固にして如何ともすると能はず、蓋し官軍亦願らく今若し此の壘を破らるゝときは長岡の賊に夾擊せられ我兵隻騎も歸ると能はざるや必然なり、下條口の官軍血路を開くを待て退かすんば、一人の生くるものあらざらん、寧ろ爰を嚴守して死するに加かずと、故に其防禦平素と異なり特に胸壁第一の堅牢と稱せられたる大黑福井なるを以て東軍如何ともすると能

はず、然れども其約を履むの決心益強く、且つ我砲士隊長由良安兵備は大黒口に、忽砲隊は福井口にわつて大に氣を厲ますを以て遂に最終の覺悟をなして進む、官軍必死防戰すと雖ども東軍少しも恐れず、死傷を飛躍して進み、刀を揮ひて遂に大黒福井の二壘を陷しゐる、此の時十二潟口の米澤、新發田の一隊も亦必死を盡して十二潟を奪ひければ、官軍益狼狽し死傷を顧みるの暇なく先に爭ひて下條より槇下に渡て敗走す、我砲隊等狼烟を擧げて勝利の相圖を長岡に報ずと雖ども此の時已に日暮れ大雷雨の爲めに天地益晦冥、長岡も亦猛火盛なるを以て之を見認むると能はず、遂に敵を夾擊するの機を失せり、曩に長岡に迫りたる敵勢の俄かに散じたるは福井等の强壘破れ逃路を絶たるゝの恐あるに依れり、斯くて本道の兵は新保口に兵を案し、探りを長岡に入れ、其異狀なきを確めて城に入りしは將に廿六日天明なり、爰に又田井にある米澤の兵は廿四日宮下地方の相圖と共に田井山上に狼烟を打擧げ浦瀨の官軍を襲ふ浦瀨の官軍大に驚き顧みて長岡地方を望めば僅かに一野を隔だてたる宮下富島は已に火烟砲聲の地となり、官軍苦戰の色あるを以て之を救はんと欲するも田井の東軍勢ひに乘じて迫ると甚だ急にして退くと能はず、即ち兵を龜崎の壘に布て以て之を防く、東軍愈奮鬪して壘壁に達す、此の時已に長岡城我有となり吶喊の聲甚きを以て官軍大に狼狽し、胸壁を捨てゝ走る、壘中に一人の壯士あり、劒術に長せり、酒氣を帶び獨り退かず、突然刀を揮ひて壘中より突出す、米兵愕然として逡巡す、隊長鈴木已むを得ず銃を以て防ぐ、壯士一聲と共に銃を兩斷し進んで鈴木を斬らんと欲す、鈴木刀を以て戰ひ顧みて槍を呼ぶと甚急なり、蓋し鈴木は槍を以て米澤に鳴るものなり、槍奴此の合戰を見て恐惶腰骨の機關を傷め槍を出すと屢々なるも及ばざるとす尺なり、鈴木辛うずて之を取り、一閃して壯士の額を突く、鮮血流れて眼に入り戰ふと能はず、即ち聲を擧げて曰く我雜兵の爲めに徒死するとを好まず、冀がくば足下に首級を與へんと坐して動かず、遂に鈴木の爲めに討たる、壯士は高田藩にして今尙ほ美談となす、却說栃尾にある會、米、村松、及長岡の大砲隊は豫じめ廿四日夜進擊の準備をなし、土ヶ谷始め荷頃の敵壘に潛迫し、栃尾山上の相圖を待つと數刻なり、夜は沈々として已に三更に及ぶ、敵兵少しも曉らず快談壯歌して他念なし、一聲の狼煙山上に上ると等しく、東軍銃を捨てゝ刀を揮ひ、敵壘に闖入し吶喊して戰ひ遂に廿六日迄に一擧して廿三壘を陷し、敵を追擊すると甚急なり、敵兵益狼狽先きなるものは妙見に走るを得たりと雖ども、此の時已に妙見地方東軍の據る所となり、逃路充塞せりとの飛說喧傳せしを以て官將鳥山斷三は敗兵を半藏金

に糾合し以て必死の決心を示して守る、是に於て會米の兵悉く長岡に入り殆んど官軍地を拂ふに至れり、抑も此の一軍たる非常に激烈を極はめ東軍の死傷頗ぶる多しと雖とも官軍の死傷亦之に數倍し殆んと千五百に近しと云へり、編者敢て東軍を庇し官軍を貶するにあらずと雖ども官軍の大敗たるは掩ふべからざるの事實なり、爰に一二の記事を掲げて讀者に告ぐるものあり、

爰に栃尾地方の官軍周章狼狽息をも繼がず逃れて妙見に來り、金倉山上に陣を布き將さに明旦を待て走らんと欲す、然れども戰々競々風聲鶴唳にも猶ほ耳を聳つは敗軍の習にて何れも安き心なかりしに、偶々人夫中に鼾聲を發して大に眠るものあり聲壘中に達す一人あり曰く敵の襲ひ來るにはあらざるなき乎と、衆大に驚き一時に起て狼狽し互に相雜踏して逃路を爭ひ或は崖下に落るあり、或は自ら榛莽に投じて助からんと欲するものあり、其狀筆紙の能く記し得る所にあらず、漸く曉に至て騷擾已むを得たり、爰に雜踏中一人の武士驚て谷に投ず、然るに續いて一人亦谷に投じ兩者互に相打ち相組んで溪底に至れり、一人聲を擧げて曰く吾れは濁澤の人夫に過きず、乞ふ命を恕せよと、前者之を聞き大に怒て曰く咄汝人夫の鄙賤として武士の上に落つ其罪恕し難しと人夫悲んで曰く、閣下の如き堂々たる武士烏んぞ溪底にありと思はんやと、前者語究して答ふると能はず、倉皇として逃ると云ふ、而して此狼狽最中一人の壯士坦然として壘に止まり衆を制したるものあり、之れ前の山梨縣令たりし藤村四郎なりと物語りし人あり、

爰に又一奇談あり大黒、筒場、下條にある官軍は六月以來數十日の對陣に無聊のまゝ近郷の婦女子を招き、枕席若くば杯盤の席に侍せしむ、然るに廿五日夕各壘一時に陷るや、全軍狼狽其爲す所を知らず、相爭ひて下條より槇下に渡らんと欲す、偶々二婦人あり情夫を捉へて怨恨潸然強いて同走を乞ふて已まず、流石の隼人男も之を拒むと能ずは、痴情に制せられて共に手を携へ川を渡り芹川村の某寺に至る、寺僧大に怒て曰く軍に臨んで婦人と戯むれ走るに當て之を携ふ之れ抑も何事ぞや、故に今日の敗を來すものなりケ樣の腐敗人物は決して寺内に足を容るゝことを宥さずと二士大に慚愧して去る、此の二婦人今尚ほ存命せりと、或人は物語れり、

廿五日深更長岡の兵枚を含んで長岡に打入り火を所々に放ち、新町口に進み來るとき、年記十五六の紅顏秀美の少年を捉へり、其名を問ふに大和十津川の士玉置清一郎と稱する者なり、我兵之を斬らんと云ふものあり、助けんと主張するものあり、遂に之を助

五間隊子ハ長岡藩ノ合印

けて矢島某に守らしむ、會津坂下に於て此の少年逃れんと欲するとありしが、長岡の五間階子の合印を帶びし爲め會藩の疑を受け、後ち米澤表に於て降伏謝罪するや、少年の衣類調度を美にし以て官軍に送致するに至り、非常の迷惑を受けたりと言ふ、

官軍の敗するや、前言へるが如く頗ぶる急遽に出たるを以て曾て軍營に捉へ置きたる野口伊左衛門、山本四兵衛平林貞次等を斬殺して去れり、野口伊左衛門は曲方村の里正にして五月長岡落城するや、同志を糾合し藩の嗣子牧野鋭橘を以て其後を承しめ以て家名を維持せんとを官軍に出願したる者なり、

長岡藩は河井の注意を以て兵隊の組織を英國に摸倣したるのみならず、銃砲の如き皆洋銃なり、然るに雷振に用ゆる砲丸は洋鐵にあらざれば鑄造すると能はざるを以て頗ふる其供給に窮せしが、大野庄三等能く此の事に熟し長岡敗軍以來村松の大平山を借受け毎日數十發宛の砲丸を鑄造し兎に角七月廿五日迄事を欠かざるとを得たりと云ふ、

此の日我兵死するもの隊長渡邊進、篠原伊左衛門を始め二見斧右衛門、大瀬銑藏、中島文次右衛門、磯貝粂之丞、太田直太郎、太田權四郎、松本四郎、九里波之丞、鬼頭熊次郎、永戸熊太郎、鈴木鐵之助、渡邊强次郎、吉田六次郎、三間騎三太、桑原良藏、伊藤禮藏、

樹宮虎太郎、栂野半左衛門、弓削貞太郎、新井彦兵衛、小杉津左衛、新井兵藏、立川寅次、藤田竹松、須藤金太郎、小池根松、塚本茂八、武士又友三郎、小野與平次、清塚仲右衛門宮政太郎、高橋孫太夫、有坂亥吉郎、川上孫兵衛、清水勝左衛門、關能嘉膳太、清水倉左衛門、村田佐平太、渡邊建藏、丸山清藏、須賀喜幸次、松本大次、小林時助、佐藤悅七、酒井金四郎、小出養助、中村加茂左衛門、海津直之丞、五井幾七、岡村瀧左衛門、加藤庄五右衛門、三門市之進家來鶴吉、望月忠之丞家來市助、の六十三名にして、傷者は總督河井繼之助、隊長稻垣林四郎、大川市左衛門、奥山七郎左衛門、小野田伊織、小令新井鎭吾、竹垣權六、杉生梅次郎、を始め本門侍學、千本木幸之助、牧野又六郎、角田久之助、三間貞藏、荒木邑之進、新井恭藏、田中兵馬、原又三郎、淺井雲平、堤熊之助、吉田廣之進、内藤六郎右衛門、栂野直彌、根岸柳之丞、弓削久之助、吉見平三、小畔定太郎、丸田覺太郎、牧野岩太郎、倉澤鎌之助、稻垣銀治、古澤儀右衛門、屋井文之助、山口雄次郎、水澤與五左衛門、新木好之助、永井間左衛門、佐藤寅次郎、若林今右衛門、阿部長助、吉田丹吾、山部左吉、小林熊之丞、西山勝八、高橋辰次、高橋丹次、小栗小子太、栗原半三郎、八木正之助、磯野彌吉、高野啓三郎、加藤寅藏、杉坂金四郎、增川亥吉、恩田藤吉、

山口林七、大高倉太の五十六名なり、其勇にして死を屑くしたるもの少からずと雖とも、是等は故ありて此に記るさず、

第十六章　新潟地方戰爭記事

去る程に朝廷に於ては、北越の賊兵其勢ひ甚猖獗にして之れが爲めに會津口も容易に鎮定の塲合に至らざるを以て、更らに嘉仁親王（兵部卿仁和寺宮）を北越の總督となし越に下らしむ、是に於て兵部卿は中仙道より越前に出て西鄕吉之助等と共に親兵並に諸藩の兵二千人軍艦七艘を率ゐて七月中旬柏崎に着せり、斯くて西鄕等は中越の軍に約する所あり、右の兵士及軍艦を率ゐて廿五日新潟に來りしが、港内及沿岸に東軍の守備あるを以て密かに松ケ崎太夫濱に上陸し、直に進んで城下町に突入せり、蓋し新發田藩の之を導くなり、是より先米澤、庄内等の兵新發田を疑ひ城を圍んで討んと欲するや、會藩爲めに之を辨護し、遂に新發田は質を出して其二心なきを盟しを以て下越幷に奥羽の兵も之を疑はず、重きを新發田に措き下越の守りを一任して進軍せり、然れども新發田は元來佐幕說にあらずして己に其以前より朝廷に投じ居たるなり、唯勢ひの不可なるを以て姑く東軍に應じたるのみ、故に松ケ崎に官軍の上陸するや、雀躍して之を奉迎したるなり、世人新發田藩を目して首鼠兩端と云ふ、編者は未だ其說の可否を論ずると能はざるものあり、左に一二の事實を記して讀者諸君の判定を乞はんと欲す、

本記第一章に記るしたる慶應三年八月の北越列藩會議は表面會津の主唱にかゝるが如きも其實際は新發田の促したるものなり、即ち新發田藩が當時の形勢を會津に密告したるより胚胎せしなり、其會議前に同藩より會津に密使を遣したる口上書と稱するものは左の如し、

口上書

此度ひ罷出候者別儀に御座なく御當節世上一般人心穩かならず、何方も如何体の變事出來申すべくも計り難き時節にて、御同樣心配の折柄取り留めざる事ながら越後筋に於て容易ならざる風聞之れあり、正義黨と唱へ浪人京都關東越後中に多人數潛伏致し居候由の所、右謀策は越後地の儀米穀豐饒の土地に付巢窟を高田村上兩所の内に定め江城を火にし、會津を攻め落し横濱へ打て出長州よりは京都へ切込み申べき手配、偖て右黨に於ては朝廷の手を借り申さずては賊兵に落ち、且つ諸人信仰も薄く候に付、有栖川宮樣の

公達を招請致し長州を始め其他一味の諸侯人數を分け一手は軍艦にて海上乘り廻はし越後瀬波へ着岸、宮樣は樣を替へ陸地御下りにて同時に落合村上城を借受け、不承知の節は干戈を動かし候手段村上城借用の上は右宮樣を引移し、夫れより米澤へ使者を以て軍勢操り出し申遣はし、越後幷に所々に潛み居候正義黨の者一時に起り立ち動搖の圖を見て、諸侯に正義を解諭候手段軍用金兵粮等の操り出しは、京大坂江戸越後筋身元のものを自黨へ引入れ、聊か差支へ御座なく候由、正義諸侯方御家來の内二百人百人と追々右黨へ加はり候、總裁は有栖川宮樣御差配にて指揮之れある由申唱へ居候由、右黨のもの專ら御當所をねらひ當三四月頃には必ず事を發し候企の趣き追々相聞へ、右は取留めざる風聞には御座候得共、容易ならざる儀と申し探索致し見候へば、右黨のもの諸國へ潛伏致し居り越後筋には餘程入込候義は相違御座なくやに相聞へ、右風說の趣は御承知も御座之あり候や、萬々一變事に於ては相濟まざる次第不安堵至極御許樣の義は越後地に御新領並に御預所も御座候に付、御探索筋は勿論何等の御手配等も御座あるべく候哉、此節御取締向等も御座候はゝ御内々御摸樣相伺申度、右は當方最寄御料領御取扱等も之れ有るべくやの所、餘の儀と違ひ輕卒に御發し相成り難き義に之あり假令浮說の事に致し候ても小家の義默止居候ては不安堵の次第已むを得ず、御許樣の義は舊來より御懇示成下され每度御手厚の御仕向けを蒙ひり居候義に付、聞込候趣き聊か斟酌致さず打明し御談し申上候間、何卒腹藏なく御示敎成し下され度、此段幾重にも御縋り御願み申上候云々、

是を以て當時の摸樣を考ふれば、新發田藩は最も天下の大勢に通曉し討幕の一大衝突あるを覺悟したるや明かなり、而して自藩は明かに佐幕を主張し會津を助けんと欲したるは明瞭の事實なり、然るに又慶應四年即ち戊辰の四月長岡地方へ一二小隊を出兵せしむるの當時、已に朝廷より左の書付を領收せしなり、

新發田藩主　溝口誠之進

越后表賊徒亂入處々暴行に及候に付ては、各藩如何の聞込も有之候處其藩に於ては確守一定の勤王心事貫徹致し候趣き、此の節追々傳聞之れあり神妙の至り猶ほ實効相顯はれ候上は、仰せ付られ品も之れあるべく候間、愈々以て勉勵盡力可致候樣御沙汰候事、

閏四月

會津藩を促して佐幕の爲めに列藩會議迄開きたる新發田藩が未だ一星霜も經ざる間に、

新發田ハ水原ハ會津口
中條ハ米澤口

確守一定の勤王家と賞せらるゝは抑も何んぞ、一方には藩主を質として二心なきを盟ひながら、朝廷に對しては同年同月を以て確守一定の勤王家と見認められたるは、抑も如何なる故ぞ、編者は其秘を語ることを欲せずと雖ども世人が新發田を目して首鼠兩端と言ふは非なり、新發田は兵家の粹を學びたるものなり、彼の與板藩が實直に勤王主義を取り城陷ゐり封領焦土に變じ、而して名揚らず利償はざるが如き所置に習はず、最も怜悧に働きたるものなり會津、米澤諸藩の新發田を恨むは已に遲し、是等は戰亂中の常觀と見て可ならん乎呵々、

如斯次第なるを以て下越の官軍は又に血ちずして其大半を得、且つ新發田の上申に依て敵の虛實地理の案内も明瞭なりければ益々勇み喜び、遂に廿六日方面部署を定め一軍を水原及保田口に一軍を新發田より赤谷口に、一軍を三日市より中條黑川口に一軍を新斥に向つて前後出發せしむ、東軍は斯くとも知らずありしが、此の急報に接して大に驚き水原の會兵に通牒し敵を夾擊せんと欲するも地廣く兵少くして如何ともすると能はず、即ち本所に壘を築て敵を防ぎ其間に於て新潟の守備を嚴にせんと欲す、廿六日官軍兵を二手に分ち一軍は阿賀川を越ゑて海老ヶ瀬に出一軍は堤上より直に本所に發砲す、東軍之に應じ砲戰頗ぶる勉むと雖とも如何せん海老ヶ瀬の敵其側面に迫り來るを以て、遂に退て寺山新田に之を支ふ、然れとも兵寡く始終其守るべからざるを知り新潟に退く、敵の軍艦は此の日新潟沿岸を乘廻はし砲を放つと甚しく、東兵亦十餘ヶ所に砲礮を設けて之れと戰ひ、敵の一艦を貫く、敵其破るべからざるを曉り松ヶ崎に退く、是に於て官軍沼垂に胸壁を築き新潟に向け發射すると盛んなり、東軍亦之に應じ色部長門等軍を督し防戰頗ぶる勉む、越ゑて廿九日に至つて砲戰益甚しく、海岸の方亦將さに闌はなるに乘じ、官軍の將奥平謙輔等密かに上所邊より信濃川を渡り、平島より東軍の側面を擊つと甚急なり、此の日加茂にある東軍水原の急使に接し兵を新津に出し、阿賀川を渡り二本木より官軍の後を討たんと欲す、偶々官軍之を曉り二本木に陣を布て之を防ぐ、故を以て新斥の東軍外に來援の兵なく加ふるに地廣くして防禦の術を施すと能はず、徒らに散兵を以て出沒するのみ敵軍愈迫り、兵火市端に起り如何ともすると能はず、色部長門、山口謹之助等皆亂軍の門に死し殘兵辛ふじて赤塚彌彦に退き、官軍一擧して新斥を奪ひしは正に七月廿九日午后にして、即ち長岡再落城中越の東軍大敗の時刻と同一なり、

第十七章　長岡再落城記事

東軍の長岡城を恢復するや、勢ひに乘じ信濃川を渡り關原柏崎の根據を奪ひ、米山の嶺を扼し一軍を小千谷に進め三國飯山の二路に向て連戰連進し、以て奥羽官軍の後を擣かんとの深謀ありしとは前回已に記するが如し、果せるかな、官軍大敗の餘勢は遂に其止まる所を知らず、若し機に乘じて進まば其目的を達し得べきや必然なり、然れども廿四日見付出發以來全軍睫間も休戰すること能はず、加ふるに廿五日の一大激戰に遭遇せしを以て一層の疲勞を感じ、廿六日に至る迄一睡を貪ると能はず特に河井繼之助を始め渡邊大川篠原奥山小野田等の諸隊長死傷せしを以て、如何に心火熱すと雖ども働くべき勇氣なし、否勇氣あきにあらざるも方面部署未だ定らざるを如何せん、已むを得ず廿六日は長岡城近傍を守衛して聊か疲勞を慰せしが此日各所の東軍皆勝を得て敵壘を破り、米澤、會津、村松等の諸兵入城なしければ、衆亦大に奮ひ、相踴躍して進軍せんと欲す、廿七日花彦左衛門隊大砲一門會藩横山隊を十日町蛇山に、望月忠之丞隊を村松に、米澤一小隊を前島村に、派遣し草生津以北は舊の如く其守りを嚴にして將さに明旦を以て進まんとす、而して當時村

三國線ハ上州ノ通路飯山線ハ信州ノ通路

十日町蛇山村村松ハ長岡ノ南二里

松金倉山上に官軍多く屯集し半藏金の軍と連絡を通じ頗る進路に妨害あるを以て廿八日を期し米澤の兵村松に進むの約あり、一因に記るす村松の村民我兵と合し法螺を吹き喊聲を擧げて山に迫るの情を示せしを以て之れが爲めに遁逃せりと、又米澤の兵村松に來るの約ありしを以て廿七日我兵本營を鷲の巣の定正院に設け萬端の準備をなせしに、何んぞ料らん數多の婦女此の寺にあらんとは、是れ皆兵亂を避けたる藩士の家族にして（一二の奇談あれども爰に記さず）然るに豈圖らん此の日午后飛報あり、曰く官軍太夫濱に上陸し新潟酒屋白根を襲ひ其勢ひ破竹の如く、新發田藩之れが嚮導たりと、米澤、會津其他の兵大に驚き軍情爲めに大に沮して舊はず、我兵廿八日に至り之を促すと雖ども各藩皆な其後を絶たれんとを恐れて逡巡決せず、就中米兵の如き其約に背いて村松地方に進まず、偏に北を望んで新發田の反覆を怒るのみ、如何ともすると能はず、此の時襲に大敗せる官軍は一旦遠く落ち延び妙見にあるものも亦三國の嶮に據らんと欲するの軍議あり、參謀山縣狂介之を排して曰く、一勝一敗は兵家の常なり、豈落膽喪望すべけんや、況んや我兵已に新戸を奪ひ下越を席卷せんとす、長岡の賊勇なりと雖ども數日の戰に疲勞し其防禦必ず盡さゞる所あるべし、敵の備なきに乘せば必ず一擧して恢復するとを得へしと、衆之に從ひ即ち

關原各地に通報し兵を妙見に招集して、廿九日總進擊をなさんとす、然るに廿九日は東軍に不幸、官軍に大幸とも言べき乎、秋來珍らしき大曉霧にして殆んど一時は咫尺を辨せざる程なりければ、官軍之に乘じ小山六日市犬茂島等より大小砲を擊射し、小山の兵は村松に六日市の兵は本道に、犬茂島の兵は前島地方に、各散兵を布て荐りに迫り來りければ、我花輪隊は會藩と共に兵を本道及淨土川の北堤に進め以て拒擊すと雖とも、敵兵其衆を恃んで死傷を顧みず、且つ前日大敗の恥を洗雪せんとの決心あるを以て其勢頗ぶる猛烈なり花輪隊獨り其衝に當り必死を極はめて一歩も退かず、互に相勵まして敵を擊つと算なし、會藩横山隊左側に在つて之を助け、總員四十餘名を散布して防戦すと雖とも、敵の彈丸恰も雨の如く遂に一人傷き二人倒れ何時しか皆退て敵の勢益盛んなり、此の時銃士柳町安之丞衆と共に樹林を楯となし、淨土川の敵を狙擊し之を倒すと十餘名なりしが、傷を負て小徑より走るとき田の中に刀を擁し仰倒するものあり、之れを見れば我實父花輪倉左衛門なり即ち之を助け起さんとするに父顧みて曰く、吾足に重傷を負て歩すると能はず、姑く爰に伏して敵の來るを待つものなり、然るに今汝に逢ふは生前の幸福なり、速かに我首級を擧けよと、安之丞逡巡斬るに忍ひず此の時官軍已に迫り飛丸亦安之丞を貫く而して花

輪聲を厲まして之を促す、安之丞遂に介錯して走る、花輪性深沈にして度量あり、曾て藩校崇德館の教授たり、外に出でゝ名聲聞ゆる所なしと雖とも衆皆歸服す、五月長岡落城の後ち藩主を奉して會津に趣き、只見村に於て藩主に別れ扈從隊を組織して柿本五左工門と共に栃尾に出、己れの一隊は常に中野俣村地方に陣脚を定め半藏金の强敵に當り屢々苦戦を累ね、遂に爰に戦死す、衆皆之を惜まざるものなし、斯くて花輪隊横山隊は非常の苦戦に其兵大半死傷し、已ひを得ず三々五々に散亂しければ、官軍之に乘じて攝田屋に迫る、爰に村松地方にある我兵は小山よりの敵兵を支ふと雖とも衆寡敵せず、且つ本道口已に破れたるを以て倉皇攝田屋に退き、前島の我内藤配隊等は犬茂島の敵を防禦せんと欲する中に西岸の敵深霧に乘じて襲ひ來りければ、非常の苦戦をなし、是れ亦長岡に走る、攝田屋にある我兵會米の兵と共に布陣し敵を防かんと欲す、偶々軍監三間市之進來て曰く、村松口已に破れ敵已に栖吉地方に進み前島の官軍宮原を襲はんと欲す、宜しく退て喰違ひを守るべしと、我兵之を聞かず、官軍果して三方より襲ひ來り攝田屋を塵にせんとす、我兵防ぐべからざるを曉り會兵横山隊及我今泉隊は長倉地方を固め、各隊の敗兵喰違ひに屯集して敵と戦ふ、此時官軍は火を各村に放ち鼓噪して進み喰違の三方より激烈に擊ち出す彈

丸雨の如く、大隊長山本帶刀衆を勵まし自ら銃劍を揮ひ森源三等卒先して激鬪し官軍少しく退く、蓋し此の戰ひは兩軍僅かに一堤を得るのみなるを以て其急危謂はん方なく、從て死傷少しとせず、斯く喰違口獨り破れずと雖ども前島よりの敵宮原の西裡より襲ひ來り到底防禦し能はざるを以て、我兵一時に退き去る、草生津にある小島、奥出の諸隊は十日町口の砲聲を耳にすと雖ども深霧の爲めに之を望むと能はず、喰違ひ口に至て始めて之を知り驚て警衛すと雖ども敵已に左近に出て、堤上より我壘に迫る、彼兵茅葦の間に出沒し敵と迎戰すること數刻なり、偶々飛報あり日〻長岡の各方面已に破れたるを以て城に退て守んと、我兵即ち守を捨てゝ去る、藏王口に固めたる澁木成三郎等の諸隊は川を隔てゝ前面の敵を防ぎ、且つ深霧なるを以て勉めて警衛を嚴にしありしが、拂曉十日町地方に砲聲聞ゑ續いて諸方に火起り已に上口破れければ、益々驚くの際、隊長澁木急病を發して死す、澁木の事は前章に於て畧ぼ記るしたる次第にして才氣秀絶せるにあらずと雖ども常に江戸邸にあつて重役の地位を踏み、其性頗ふる忠良なり曾て杉澤の負傷以來長岡に潛伏し、屢々計を廻らして河井に通牒し、廿四日恢復の如き内にありて大に力を盡す所あり、廿五日渡邊進の重傷を負ふや、擧られて隊長となり、平素人に語て曰士は刀を帶ふるを以て死をな

すに離からざるが如しと雖とも時に臨んで志を貫くと能はざるとあり、故に多少の激藥を懷中して萬一に備へざるべからずと、是に於て長岡の破るゝを見るや、一聲歎じてモルヒネを服して死するなり、衆大に驚き百方療すと雖ども其功なく、而して敵已に迫るを以て益々散亂して敗走す、是に於て長岡城再び敵の有となり東軍大敗して二路に分れて走る、是より先我大砲隊の一分隊は、廿六日栃尾の官軍を驅逐して森立峠に壘を築き爰に守衛しありしが、是の日東軍大敗し長倉より栃尾に走らんと欲するや、砲隊と共に一致し栖吉地方より進み來る所の敵を迎戰す、然るに半藏金の窮兵恰も籠鳥脫して翼を揮ふの勢を以て密に森立頂上の林に上り、我兵の左側より聲下すると雨の如し、我兵大に驚き前後に敵を受け如何ともすると能はず、已むを得ず栃尾に退く、蓋し曾て長岡の兵約するとあり曰く若し不幸にして再び敗北するが如きとあらば全軍城に立籠り屑よく死を決すべしと、然るに此の日の戰爭四方に起り且つ頗ふる銳烈なりしを以て各々隊を組て一定の防禦を盡すと能はず、名は何隊を以てすと雖ども其實は三々伍々に散布して戰ふに至れり、故に一旦敗勢を帶ぶるや、各隊區々に分れ多くは前約を履んで城に籠らんと欲す、然るに城にあるもの及び先んじて退きたるものは其守るべからざるを知り、曾て分捕したる品物を容れ置

きたる倉庫其他に火し、以て栃尾地方に退きたるを以て全軍の進退は實に謂ふに忍びざるに至れり、而して其倉庫に火するや、銃器彈藥一時に破烈し其音天地に響き碎片飛散して城外に逆出し恰も彈丸の如く城に近付と能はざるもの數刻なり、如斯始末なるを以て我兵多くは新町口より退き、下條大曲邊に據て敵を防ぐと雖ども官軍堀金地方より我後を擊ち如何ともすると能はざるを以て福井に退く、此の時我兵殆んど六七十名に達せしを以て西生寺裡の薔壘に依り以て必死拒戰せんと議し、衆大に勇む、抑も福井の胸壘は我兵六十日間敵と對陣したる樞要の壘壁なりと雖ども若し押切口の備なきときは頗ぶる困難の地位たるを免かれず、故に河井の福井に胸壁を築かんと欲するや、特に決死の兵を押切口に出し以て其間に成就したる程なり、蓋し押切口は福井の右側にあつて猿橋川堤に沿ひ屈曲したる地にして一旦此の處破るゝときは、福井は左右前面に敵を受け如何ともすると能はざるなり、軍監三間市之進一軍を率ゐて押切口を堅め、以て福井と共に拒戰せんと欲す、我兵三間に告げて曰く押切口の必要たるは固より論なしと雖ども、若し押切口敗するも我福井に通知するとなければ、我兵一人の生くるものあらざるべし、軍監能く注意して忘るゝとなかれと、三間諾して去る、是に於て二壘の我兵敵の大軍を迎へ必死防戰毫も撓ます

と雖ども押切口は兵寡なきのみならず川袋地方を渉り來る官軍衆を賴んで襲來し、遂に防戰の術を失ひて敗退す、然るに急遽の際前約を履むと能はざりしを以て、福井の我兵之を知らずして前面の敵と戰ふ、押切の敵は密かに田堤に沿ふて福井の村に入り、民家を縱橫に潛行して我寺裡の壘を圍む、我兵寺前にあるもの之を見認め大に驚き僅かに一條の血路を得て逃すもの四五名余は釜中の魚となつて如何ともすると能はず、壯心血氣の蛮刀を揮ひ圍みを破らんと欲するもの十余名、皆敵の爲めに狙擊せらる、而して敵兵益々加はり寺を圍むと愈々急、日將さに沒せんとし敵又火を寺院に放つ、我兵是に於て死を決し刀を揮ひて一躍敵陣を横切て草莽の間に伏するものあり、或は寺裡の竹林より突出して敵勢に紛れ入るものありしが、草莽に入るものは九死一生の間に逃るゝことを得たりと雖ども、敵勢に紛れ入りたるものは逃去するの暇なく敵と共に進退し、勉めて官兵の体を粧ひ遂に夜を徹するに至れり、然るに此の時新發田の兵六小隊見附に於て鋒を倒さにして官軍に降りしを以て、敵兵刃に血らずして栃尾見附の諸壘を奪ひ、我兵逃るへきの道なく遂に民家に潛伏するに至れり、軍後此等の兵士は中途反覆の名を受けしと雖ども其實際に於ては全く已むを得さるに出たる者なり、斯くて我兵は栃尾より森町葎谷地方を經て八月四日一隊

を止めて遲場吉ケ平間に胸壁を築き會兵と共に之を固守し、病者及び其他は皆八十里越より坂下に至る、此の日死傷甚だ多く、銃士隊長花輪彦左衛門、小令桑原文左衛門、傳令酒井貞藏を始め仙田隼人、山本伊助、大野治助、稻葉彌太助、牧野金太郎、丸山齋悅、福島織之丞、鈴木富三郎、福田寅之助、前田雄之助、妹尾束、鳥山岩之丞、中島軍四郎、加藤彌左衛門、市野又十郎、花輪秀八、中川文三、名兒那林之丞、松木保右衛門、石垣濱之丞、九里幸三郎、田中信左衛門、福原良右衛門、和田忠九郎、丸田覺左衛門、牧野十助、須藤岩之助、村尾孫平太、佐藤小平治、中村熊三郎、金子國太、渡邊助三郎、森下增藏、加藤彌晉吉、小林孝之助、猪又佐喜藏、小林國藏、佐藤愛藏、戸井平四郎、佐藤直三郎、中村留五郎、野口龍右衛門、雨谷寄右衛門、永相左市左衛門、栂野六郎兵衛、宮森右衛門、大塚瀨平、後藤峰七、平井甚八郎の五十三名即死し銃卒隊長横田大助、内藤内記、小令安田孫八郎、鶴田定次郎、砲士司令田中脩藏を始め深澤何右衛門、春日習之助、栂野時五郎、高野猶之助、花輪釗藏、伊丹秀三郎、橘造酒之丞、原田武兵衛、栗本行藏、丸山福次郎、持田德次、田村光太郎、篠原八之亟、竹垣鐵五郎、鳥山辰之丞、吉浦文藏、水澤梅吉、堀傳作、佐藤藤次郎、藤澤鐵藏、北澤嘉勇次、小林多野右衛門、建部和志三、鈴木伴七、内藤百合吉、廣江千代藏、杉山文藏、加茂田雄八、室橋新助、田島賢八、金子仲七、島岡伯右衛門、村田音五郎、野口勇七、瀧澤德次右衛門、長谷川孫次郎、坂内熊五郎、鈴木勇次郎、松本五助、清塚五郎兵衛、小林甚内、長田波助、山口角平（隊外士卒を含蓄す、）の四十四名重輕傷を負へり戰死者中記すべきもの少からずして、花輪秀八の如きは下條口大曲に於て敵と（現今の文部視學官野村綱）接戰し刀を拔くの暇なく自ら携ふる所の銃を以て戰ひ遂に討れり、後ち其銃に鮮血淋漓の一點より事實確然し、遂に俳優社會の處作に上りたるは讀者諸君の知る所なり、又中川文造は廿五日付屬士として軍監川島億二郎と共に富島村に進み日光浦の戰ひに重傷を負ひ起つと能はず、民家に療臥す、廿九日官軍勢ひに乘じ進來し富島に迫り中川の家を圍む、中川從容として姓名を名乘り敵と接戰して死す、此の他記すべきもの許多ありと雖ども他條に關連せるを以て河井の傳に讓る、

第十八章　三條加茂地方及村松落城記事

爰に又元與板より日ノ浦木ノ芽峠等出雲崎迄横絶したる方面を守りたる水藩桑名庄内村上の諸兵は、二十五日官軍大敗の報に接し益々氣を得て進攻の策をなし、屢々敵壘に迫り二

十九日に至り水藩の市川朝伊奈等は、官軍の兵少きを探知し(大半は二十八日夜關原に退き長岡城に向ふ元與板を襲撃す、官軍大に驚き與板山城の左右に布陣し東軍を防ぐ、舊戰將さに其壘を陷れんと欲すること數回なり、然るに飛報あり長岡城又破ふると、而して之より先新潟の敗報達せるを以て村上庄内の兵は皆封領に關する一大事なるを以て大に驚き、躊躇するの傾きあり、軍氣大に沮喪しければ進攻の勢に乏しく、加ふるに信濃川以東敵の有たらんと欲するを以て寧ろ加茂に退て防禦せんと議し、遂に八月一日水藩は直に北野に退き庄内村上の兵は海岸より地藏堂に退く、日ノ浦口の桑兵も亦退かんとするとき敵兵其虛實を知り尾撃すると甚急なり、桑兵或は戰ひ或は走り、辛うじて小島谷より北野に退き、諸隊合して加茂に至る、然れども加茂の準備未だ整はざるを以て三條に於て敵を防ぎ、而して後加茂に嚴守せんと欲し八月二日更らに庄内桑名水戸の三兵合して三條を守り、桑藩致入隊長岡口を防禦す官軍大に破竹の勢を以て五十嵐川の兩方面より撃射すること甚しく、東軍之に應砲し頗る强烈を極はむ、然れども兩方面皆川に隔てられて追撃を逞ふすること能はず、偶々日暮加茂の壘壁成るを以て三條を退き方面を守る、飛報あり曰く、村上城將さに陷らんとすと、東軍大に驚き會藩佐川隊馳せて村上に赴援す、下越に上陸し一舉

小松ハ津川線ノ驛

して新斥を陷れたる官軍は勢に乘して小阿賀を渡て新津に出、赤坂口に向ひたる兵は水原を奪ひ東軍の後を擣かんと欲せり、抑も水原は會藩立脚の地にして會兵に取ては必要の地たりと雖とも、新發田を去ること甚だ遠からず、爲めに防禦の術を施すこと能はず、且つ其兵寡きを以て赤坂に退き小松の關門に堅壘を築て守る、

然るに八月一日敵兵衆を盡して三路より赤坂草水の壘に迫る東軍之を前知し兵を本道及山谿に潛め以て之に備ふ、明石新發田の官兵之を知らず、山に沿ふて間道より赤坂に突出するや否や、伏兵起て之を撃射しければ官軍大に驚き、周章散乱して退く、然るに本道及田畦より襲來する官軍の勢ひ甚猛烈にして、東軍大に且色あり加ふるに襲に敗したる官軍再ひ返し來り三路の防禦益々苦しみ、米將横山等乱砲に倒れ諸隊全潰せんと欲するを支へて、以て敵軍を退く爾來益々其壘を堅ふして之を守る、故を以て敵兵進むこと能はず、是に於て官軍密かに一軍を保田より阿賀を渡らしめ、新津の官軍と相合して村松城に迫る、此報一度ひ村松に達するや、市在恟々囂々として殆ど修羅場の如く、藩論二派に分れ戰はんと欲するものあり、降らんと論するものありて衆心一致降參の急報加茂に達するや、東軍大に驚き市民亦火災を望み、頗ぶる騷擾を極はめ、皆負擔弁竟し、市中寂寥たり、是に於て

東兵死を決し一軍を三條より加茂に出る間道天神口に、一軍を上法内口の關門に陣せしめ、尚ほ間道黒水口には桑藩雷神隊を村松口本道には庄内及衝鋒隊を以て守備せしむ、而して會の將佐藤織之進は一隊を率ゐて上法内に布陣して敵を待つ、八月五日三條地方の官軍數百襲ひ來り佐藤の隊と戰ふこと數刻なり、佐藤兵寡くして守ること能はざるを以て退て、下法内の關を守る官軍勢に乘じ擊射し將さに一呼して關を奪はんとす、東軍の此を守るもの曩に上法内の戰爭最中佐藤隊の不利ならんを知り關前の樹木を切て敵の據る所を失はしむ、敵果して一旦勢ひに乘ずと雖ども身を避くるの術なく死傷甚た多く、ために沮喪せり、東軍之に乘じて擊射し戰ひ益々闘なり此の日亦官軍は天神口より加茂に迫らんと欲し密かに兵を挺して來る、此の口は東軍頗ぶる寡兵を以て守衛したるを以て頗ぶる苦戰の色あり と雖ども佐川隊の來援に依て大に勇氣を勵まし、奮戰突擊死を決して守り、夜に至るも尚ほ変んて解けず、日西山に入り四面闇黒敵勢を伺ふこと能はざるを以て火を民家に放ち以て迎戰す、官軍の衆東軍に數倍し其勢ひ亦盛んなりと雖とも其計りことあらんことを恐れ、躊躇して進まず、然るに法内關門の戰益盛んにして、東軍頗ふる苦戰の報あり、此の關門破るゝときは加茂を維持すること能はざるを以て天神口の東兵更らに爰に來援し横面より官軍を擊つ、是に於て東軍再び生色あり、官軍稍躊躇し砲戰曉に徹す然るに偶々飛報あり曰く、官軍村松より我後を襲ひ一軍を黒水に向はしむと、東軍大に驚て曰く若し果して其報の如んは我兵は寔とに釜中の魚たるを免かれざるなり、徒らに溪に死せんよりは寧ろ會津に退て再擧を謀るに如かずと、即ち法内關門の砲戰を一層烈しくし敵の尾擊を避けんため火を市中に放ち、全軍俄に黒水に退く、(因に記す戊辰の役加茂町は四月以來東軍の本營となり、市民誠實を盡して諸軍を優待せしは今尚ほ殘傷の故老か物語る所なり、特に歩兵三小隊を應募組織し會桑に付屬して屢々奮戰せしは、皆人の知る所なり、然るに東軍一朝退くに當て兵火の難に罹らしめたるは頗ぶる殘酷の處置と謂ふべし、)斯くて東軍は黒水に退て備を立て會桑の兵先に進み、庄内の兵殿となり山に沿ふて村松城に迫る、蓋し會津に至るの道村松地方に由らざれば達すること能はざるが故なり、官軍各所に壘を築き東軍の通過するを窺見するも敢て迫まらず、之れ窮鼠たるを知るが故なり、故に東軍無事に村松城の側より河内谷來光寺諸村に出て熊谷村に至る、是れより先村松に破れたる會兵は高石村に退き、更らに熊谷に出陣し民家に火し、橋を絶て守る、偶々東軍の來るを見て官軍と誤想し互に砲を發するに至て始めて味方なるを知り、共に其顛末を語りて高石村に一軍を陣

津川ハ會津ノ入口

せしめ、全隊は阿賀を渡て津川に退き再て進軍の計を議す、

第十九章　下越地方戰爭記事

中越の東軍七月二十九日の大敗以來前後相退て會領に入りしを以て官軍破竹の勢ひを以て北越の野に彌漫し、東軍の守る所は上は高石五十島赤谷より下は中條黑川等に過ぎずして其兵の如きも亦甚僅少なり、唯峻山嶮嶺に據り大河沿田に臨んで之を支ふるのみなり、爰に八月一日赤坂に迫り其志を得ずして退きたる官軍は保田に壘を築て五十島の敵に當り更らに一軍を分田口より出湯に出して五頭山に一大胸壁を築き以て保田と犄角の勢を張り、方さに東軍を壓せんと欲す、是に於て東軍は立岩に壘を築て之を制し、八月五日五頭山を奪はんがため全軍枚を含んで谿谷を迂回し棒莽を攀ぢて敵壘に近き吶喊擧發以て其膽を奪ひ、之に繼くに刀槍を以てし壘中に突入す、敵兵大に驚き狼狽錯愕其なすところを知らず、新發田の兵先づ敗す、東軍勢に乘じ殆んど壘を奪はんとす、時に薩長の兵疾風の如く來援し兩軍互に一勝一敗日已に暮るゝに至れり、蓋し五頭山の地勢たる赤谷口に關連し地理に於て不可なるところあるを以て退て立岩を守り、赤坂の敵と氣脈を通ず、然るに八月十日敵兵大擧して小松の關門を破らんと欲して襲來し、其勢ひ必死を極はめ、守兵急を赤坂の本營に報じ奮鬪擊射最とも勉む、會將萱野一隊を率ゐて來援し刀を案して衆を勵ましし、叱咤奮戰遂に之を走らす、翌十一日官軍再び來襲し其勢ひ前日に倍し必死之を陷れんと欲するもの〻如し、東軍之を迎戰し彈丸雨注林壑爲めに震動し、敵を退くると殆んど數回なり、然るに日已に暮れ彈丸亦欠乏し全軍の疲勞謂ふべからざるを以て、潛かに軍を纏めて赤坂より石間に退き、以て防戰す、蓋し津川の地形たる前面に大河を控へ左右に山を負ひ會津封境の越后に通ずる一大關門たり、河を隔て〻赤谷口は新發田に通うじ三ヶ月澤谷口は保田赤坂五十島に據り一軍は村上本道なる平林に壘を築き川を隔て〻防禦す、八月十日官軍大擧して花立荒島に襲來す、是に於て山麓樹林に砲臺を搆へ、敵を防ぎ其間に於て米澤境界嶮峠に堅壘を築かんと期せり、然るに此の日の砲戰稍闌なるに當て敵の一軍密かに間道を越ゑ東軍の側面より俄然攻擊を試みたるため、東軍頗ふる苦戰の地に陷り辛うして其村に退き、以て二方の敵を拒守すること數刻なり、折しも大雨車軸を流し、四方晦瞑なるを以て東軍之に乘じ出沒亂發して以て敵を退く、然れども此の時薩長諸藩の兵敵に加はり其勢ひ强大となり衆寡當るべからざるを以て即ち下關より榎峠に退き、嶮に據て確

守す、是に於て官軍は鷹巣峠等に砲臺を構へ本道より襲來すること愈急なり、東軍奮戰激射し其距離益切迫するや、互に銃劍を揮ひ砂石を飛ばして相戰ひ兩軍の死傷甚だ多し、而して東軍は敵のために間道より襲はれしを以て殆んど死地に陷り、苦戰奮拒漸く敵を退くることを得たりと雖とも、漸衰漸惫の勢ひは最早恢復すること能はざるに至れり、さて又村上本道なる平林に陣したる庄内村上の兵は八月十日佐々木村より來るところの官軍を支へ、川を隔てゝ砲戰す、是より先東軍は悉く舟を自岸に奪ひたるを以て、敵兵進むこと能はず、然れども敵衆を恃んで流を亂り砲戰頗ぶる强烈を極はむ、東軍敵を退くること數回なりと雖とも衆寡の勢ひ永く之れを支持すること能はず、而して此の時海岸に沿ふて進みたる官軍は岩船を陷れ、瀬波を奪ひ平斥より村上に迫り來るを見て、東軍は倉皇として村上城に籠り守禦の方を謀ると雖とも、如何せん事不意にいでたるのみならず藩中再び抗降の議を唱ふるものありて早きは已に鋒を逆にするに至りしを以て、益守禦の方略を亂り、遂に城に火して走るに至れり、是より碁石鼠ヶ關等の激戰となる、

岩船ハ村上ノ西瀬波ハ北

第二十章　會津口各所戰爭記事

爰に又た長岡の敗兵は奥州坂下宿に團集せしも五月十日以來今日に至るまで大小幾十回の激戰に於て死傷五百余名に達し、曾て廿三小隊に編成せしもの英式に依り三十六人を以て一小隊となす、今其の十四小隊を失ひしを以て各隊の分合編制に頗ぶる苦心し、遂に八月十九日左の六小隊安田、槇の二隊は津川口に赴援せしも、此時已に赤坂を始め各所の要壘皆敵の爲めに陷られ、北越の東軍奥地に退きしを以て槇隊は赤岩に安田は西村に陣し、越後口の官軍を防げり、而して他の余隊は廿三日若松に出白川口に進むの計畫なりしに何んぞ計らん、此の日猪苗代は會藩の支城にして二本松石莚の兩口を扼する要害の地なり、然るに廿二日兩口の東軍戰ひ不利にして猪苗代に退くや、官軍潮の如く襲來し急を若松に告ぐること櫛齒の如し、是に於て藩主松平容保は其弟松平越中守(桑名藩主)と共に馬を駢べて瀧澤峠に出陣し、以て雌雄を決せんと欲す、然るに二十三日曉天猪苗代遂に破ふれ敗兵瀧澤峠に引き揚け來るに會せしかば、兩藩主奮然として馬に鞭うち峠に進み自から令を下して曰く、會城の勝敗は將さに此の地にありと佐川寛兵衛傍らにあり聲を厲まして亂兵を制し、刀を奮ひて敗兵に加へ以て進む、是に於て兩軍の烈戰益々甚しく、彈丸飛來雨の如く特に東兵は藩主の馬前に於ての決戰故死傷を顧みず勇を奮ひ時を移すと數刻なり、然れ

ども敵衆を頼んで交替互進し東兵は次第に疲勞するのみならず官軍更らに別路より城に迫り來るを以て、遂に兩主命を下して兵を退け城に入る、城門に至つて容保越中を顧みて曰く事是に至る如何すべき、越中聲に應じて答へて曰く、不肖是より米藩に赴き兵粮彈藥を寄送し以て夾擊の計をなさん、牧野駿河等亦城にあり共に米仙に說かしむへし、阿兄幸に籠城の計をなせよと、直に分れて米澤に入る、長岡の兵は急を聞て坂下より小荒井に進み二十五日拂曉七日町口に進擊す、蓋し七日町口は小高き所にありて溟橋を前に控へ田野を隔て、小荒井高久門大の諸村に對し若松城に入るの要處なり長岡の兵皆謂らく若松城の落否は即ち長岡藩の興廢にあり、且つ夫れ會兵の難地に陷るを救はざるは義にあらずと、故に諸隊死を期して進み、由良、小林の二隊は北方より鬼頭、河井の二隊は正面溟橋より進み、別に內藤直記隊は間道より敵の後を襲ふ、敵要地にあつて我兵を迎戰し特に此の要所一旦破ふるゝときは若松城一方の圍み解け其不利謂ふべからざるを以て拒戰最とも勉む、我が兵奮進溟橋を渡ると雖ども敵兵市家に散布して闌席を楯となし、大小砲丸連發し面を向けがたし　即ち川堤若くは稻田に匍匐して激戰す、此の時內藤已に敵の支ふる所となり幕の大鳥隊（評者云ふ此の日幕の古屋の分隊長今井彦三郎現場にあり溟橋邊に法花堂ある

を火し戰勢を助けたり、大鳥隊の來援は急遽の間余之れを知らざりきと記して以て聊參考に供す、）及ひ衝鋒隊急を聞て來援すと雖とも皆敵の爲めに擊却せられ我が兵益々難地に陷り、隊長鬼頭六左衛門、河井平吉、由良安兵衛、小林寬六郎惣隊長萩原要人傳令高野喜傳治、槇三左衛門軍目付二見虎三郎始め續々死傷を來し隊將三間市之進一人傷を負はざるのみなるを以て、傳令指揮の機關を失し徒らに狙擊せらるゝのみ、而して敵溟橋を渡り高久に遷する本道を遮斷せしを以て、我南北の軍其退路を失し辛うじて小荒井高久に退くことを得たり、此の日死するもの鬼頭六左衛門、二見虎三郎、横澤吉四郎、伊東善之進、中島庄九郎、柳町茂左衛門、松村左仲、西鄕鈴次郎、小林吉郎右衛門、清水晴彌、小澤染次郎、平井又藏、平澤時左衛門、竹津久米吉、林喜十郎、の十五名、重輕傷を負ふもの萩原要人、由良安兵衛、小林寬六郎、河井平吉、高野喜傳治、能勢兵右衛門、原田泰次郎、中島鎌次郎、稻垣銀治、新井岩次郎、園村禮之助、堤濤齊、立川駒吉、安田槻助、阿部七郎、右衛門、吉澤惣七、瀧澤留吉、槇三左衛門、村上孫之進、村尾熊太、小澤左五七の廿一名合計三十六名、即ち一小隊を失せり

因に記るす鬼頭六左衛門は初戰以來常に其難處に當り功蹟少からず、衆兵皆之に服す、

二十五日涙橋に進むの前夜特更らに齋戒し、殆んど死を期したるものゝ如し、加藤音彌村上孫之進等之を介錯して走るや、其首級の重きこと前後比なく衆皆驚きしと云ふ、千軍萬馬の間如何なる危急に接するも言辭動作毫も平日と異なるなきものは河井平吉なりとは衆の許す所なり、此の日平吉傷を負ひて歩すること能はず、即はち死を期して川に入り柳に攀ぢて敵情を伺ふ、敵兵東軍を擊破し尚ほ川傍を巡邏し二人河井の傍らに來たる、河井密かに銃丸を込め一人を倒す、而して餘す所三發のみ、然るに一人の敵一旦驚いて走ると雖ども再たび來たるを以て河井亦之を倒す、然れども余勢之れを知らず、遂に再たび來たらず河井空腹に堪へず流れ來る所の南瓜を食ひ漸く饑を凌ぎ夜に至り刀を杖として涙橋の本道より優々二十六日夜荒井に歸れり、衆皆其大膽に驚ろくと云ふ、却て說く之より先大隊長山本帶刀は川島億次郎と共に倉澤彌五兵衛、千本木林吉、雨宮敬一郎の三小隊を督して鞍掛山に陣せしが、坂下表兵隊編成の爲めに川島は之に赴き自から三小隊を率ゐて廿六日高田に進擊せり、蓋し二十三日若松城の圍まるゝや、四面皆敵の扼する所ろとなれり、唯高田村に通するの一方尙東軍之を占領し兵粮彈藥凡べて元より相通せざるはなし、故に官軍力を極めて之を襲ひ來るを以て山本之に赴援す

斯くて我大隊長山本帶刀及千本木林吉、雨宮敬一郎等の諸隊は、八月廿五日會津の諸砦官軍の爲めに陷しゐれられ敵兵若松の城に迫るの急報に接せしを以て直に鞍掛の軍を間道より水沼に出し、會藩木元隊と共に柳津に會し以て敵の後を擊んと欲せり、是に於て石生村の地方に對壘したる官軍は退て檜原川を渡り堤に依て東軍と砲戰せり、九月一日會の相澤隊密かに河を渉て敵を襲ふ、敵兵之を探知し陣を開て相澤隊を重地に引入れ三方より砲擊す、相澤隊必死之に當り格鬪數刻死傷增加し、全軍殆んと死地に陷り蒋りに味方の來援を促す、此日柳津より檜原に進み來りたる長岡の兵は相澤隊の急報に接し山本帶刀一隊を率ゐて赴援し以て敵を驅逐し會兵を無事に退かしめんと欲するも敵衆を賴んで益々急擊し、我兵亦死地に入る、奮戰勇を皷して僅かに圍みを潰し、河岸に退くことを得たりと雖も川流急且大にして渉ること能はず、諸兵天を仰て長歎大息するの外策の出べきなし、檜原にある我兵之を聞て大に驚き千辛万苦漸く船二艘を求め彈丸雨擊の中を漕して以て敗軍を渡し、僅かに宮下村に退くことを得たり、爾來仝月五日に至る迄河を隔てゝ兩軍相對峙し、晝夜砲戰已むときなしと雖も格別進取の勝敗に及ふことなかりし、然るに五日に至り日將さに西山に沒するの頃會津若松城に當り火光焰々として天色暗澹たる有樣に見ゐしを以て

會兵大に之を危み高田村より飯寺の敵を破り、直に若松城に入らんと欲し之を我山本帶刀に計る、山本之に贊同し即ち策を決して飯寺山に進軍す、蓋し高田村は越後及日光街道に通ずる要路に當り會城と氣脈を通ずるに於ては頗ぶる敵を抑制するに便利を得たる地勢なり、故を以て官軍常に此氣脈を横斷せんと欲し、遂に去月廿三日猶城陷りて官軍若松に迫るや先づ飯寺を破り以て其道を横絶せり、依て高田村地方にある東軍は孤立の姿となり、前記の如く各地に轉戰して今日に至れるなり、斯くて高田村に進みたる山本帶刀、會の木元隊は仝月七日夕刻高田を發し間道より一の關に至らんと欲するに急流清澹の大河ありて容易に渉ること能はず、已を得ず諸兵全身を水に投し流を亂して漸く彼岸に達することを得たり、此時水戸の市川三左衛門の率ゐる諸兵一の關より歸るに遭遇し、即ち其事情を告げて進擊を促しければ市川隊も之を諾して後刻を期し來援すべき旨を誓ひ相分れしか之れぞ山本帶刀等の死地に陷る間違ひの原因なりし、斯くて一の關に達したるは將に烏雀曉を報し東山紅を帶ぶるの頃なりしも此日深霧朦々と閉ぢ籠り彼我の面体を辨知すること能はざる程の大霧なりしかば我兵却て進擊に便なりとし、會津の木元隊は平押に正面より飯寺の敵陣を突き長岡の諸隊は山本之を督して大河の長堤より横に飯寺の敵を擊ち、且つ來援

の兵を防禦することに決し、且其退き去らんと欲するときは必す相報せんことを約して奮擊せり、斯く木元隊は深霧に乘じ諸兵枚を含んで飯寺の敵壘に迫し連發連呼りて突進なしければ敵兵大に驚愕狼狽し勝敗の機已に顯れ、壘將さに陷らんとするとき官軍の援兵三方より來集し其勢ひ破竹の如く砲丸篠を乱して雨下し來るを以て、會兵勇なりと雖も面を向くへき樣もなく遂に大敗して一の關に退く、而して其敗するや危急にして之を山本等に報するの暇なく、思ながら前約に背くに至れり、さて又長岡の兵は長堤に沿ふて飯寺に迫り横面より敵を擊ち木元隊の壘を破るを待つ中に敵の援兵荐りに各所より來るを以て兵を二三に分ち三方四方に向て必死防戰し、木元隊の已に大敗したるを知らず、其壘中に砲聲の烈しきを聞き却て木元隊の必勝と誤解し居れり、飯寺の官軍は木元隊を一の關迄驅逐し後ちを顧れは飯寺の右方に尚は砲聲荐りなるを聞き始めて敵の別軍あるを曉り、即ち軍を返して長堤より長岡兵の後に進み來れり、然れども深霧咫尺を辨せざるを以て官軍も敵味方を確知すること能はず、即ち吾に先んじたる味方なりと思惟し、皆相混同するに至れり長岡の兵は木元隊の敗軍を知らざれば後より敵の來るへしとも思はず、今朝約束したる水戸の市川隊が來援したるものと誤信し敢て之を咎むることをなさざりし、而して混同した

る官軍は我兵の眞先に砲戰し居る一族を敵なりと見認め荐りに之に向て砲擊を加へければ眞先なる我兵大に驚き味方擊とは何事ぞと後ろを顧みて親しく歸視すれば、何んぞ計らん我軍中に紅白染分けの軍旗翩翻として深霧に舞ひ、正しく敵と見なければ再び大に驚き、軍中に敵ありと絶呼し銃を打ち振りて陣に馳せ近付き堤に登らんと欲するや混同の官軍銃を揃へて之を砲擊す、傍らにある我長澤金太郎之を見て大に驚き、今堤上に登り來るものは味方なり、何故に砲擊するぞ、官兵之に反問して曰く貴君は何藩なりや、長澤答て曰く長岡藩なりと、官軍之を聞くや否や刀を拔て長澤の右肩を斬切す、長澤刀を拔くの暇なく双手を擧て飛付くや傍の官兵亦左肩を斬り、遂に長澤を倒す、是に於て我兵始めて敵あるを曉り相呼んで之を報じ刀を拔き銃を振ふと雖も　相呼ぶ毎に敵三方より取圍み進退如何ともすること能はず遂に山本帶刀を始め三拾二名は敵の楚囚となり長澤金太郎、鳥井藤太郎、增井彌兵衛、山本敬太、篠田安作、山口辰二郎、雨宮兵吉、長島兵八、大宮兵九郎等は現場に於て戰死せり、其楚囚となりし以后の摸樣は山本帶刀の傳を參觀あるべし、

第廿一章　長岡藩最末記事

却説飯寺に於て敵の重圍に陷り僅かに一死を逃れて一の關に退きたる長岡兵は木元隊に向て大に其不都合を責問し、速かに應援せんことを求むと雖も木元は事機已に失するの故を以て出兵を肯せず、我兵大に怒り杉野某等酷促嚴談腕力に訴んとす、然るに此の時敵已に福永村に火し猛焰天を蔽ひ機全く失し、遂に山本等を重地より援ひ出すこと能はずして已む、抑も山本帶刀の率ゐる所の我兵は長岡再落城以後會津に於て一別隊となり坂下の兵隊組織にも關係せず全く一方に向て戰爭し殆んと他の長岡の兵と消息を通ずることもなかりしに、圖らずも非常の不運に遭遇し柱石と頼む所ろの山本帶刀を始め諸隊長は或は捕れ或は戰死なしければ、其殘兵たるもの實に進退維谷の境遇に陷り只風説に長岡の君臣は仙臺にありと聞くのみ如何ともすること能はず、依て運命を天に任せ假りに能勢三郎右工門を隊長となし會津の木元、水戸の市川朝伊奈等と共に高田村に陣脚を定め官軍と攻戰す然るに永井野近隣にある所の敵兵永井野を奪ふて以て若松城の連絡を絶んと欲する摸樣あるを以て會將佐川寛兵衛は高田村地方の各隊を永井野に召集す長岡の兵之に應じ水戸の兵と、もに相警衛す、九月十六日偵者急報して曰く仁王寺村にある敵兵密かに兩道より永井野に迫らんと欲すと、我兵乃ち水戸兵と計り伏を設けて敵を待ち深く重地に入るを見て、伏兵

一時に起り前後より砲擊し、大に之を破り、敵將を倒し兵氣大に振ふ、然るに十八日に至り赤留に屯集せる官軍高田村の會兵を襲ひ大に之を破りしを以て永井野の地勢甚だ危く只管恢復を計ると雖も良計の出べきなく、已むを得ずして田島村に退去す、是に於て隊長能勢は衆に告て曰く最早今日の勢ひにては如何ともすること能はず、聞く所ろに依れば我藩主及兵士は仙臺にありと、今之に趣かんと欲するも敵塁所にあつて通ずること甚難し、依て各自銘々の見込を以て潛行し仙臺に會見することとなさんと、衆皆之に同意し別れを水戸兵に告ぐ水戸姦黨の巨魁市川、朝伊奈等は永井野の戰ひに圖らずも大勝利を得、多くの敵の死傷中に水戸天狗組の印あるものを發見し、忽ち思らく彼れ天狗組(正義黨と稱し越後口に出兵し居り屢々砲交せしことあり、然るに彼等は尙ほ奥羽にも出陣せりと見ねたり、果して然らば其國に兵少きは必然なり密かに水戸城を奪ひ君公を擁し積年の怨恨を晴すは此機にありと、早くも胸中に策略を廻し居る矢先へ我兵別を告げしかば、市川等は大に喜び諸君若し仙臺に赴かんと欲せば銚子の港に出海を航するに如くはなし、我等も幸ひ國に引上げんと欲するなれば、共に途中の敵を討ち拂ふへしと、甘言以て我を誘ひければ我兵の中能勢三郎右工門外四五名を除くの外は皆之に同意し遂に水戸に向ひしは九月廿一日な

りし、「抑も天保年間水戸の前中納言齊昭卿藩主たりし時家臣藤田東湖、戸田忠敬、今井某等を拔擢し藩制を改革せんと欲せしに、家老結城寅治郎其席にあつて之を沮んと計りし故中納言結城を惡み退けしかば、結城は大に之を愧み幕府に言上して曰く、近頃主君藩内に武器を修め暴臣藤田等と廢佛の說を布き國中の僧尼を俗人となさんとするに僧尼其暴苛を怒り臣に哀訴して已まず云々と、訴へしかば、幕府は中納言を始め藤田等を幽閉せり、依て結城寅治郎再ひ國政を掌握し、是より結城藤田の二黨を生じ、結城を姦黨と呼び、藤田派を正義黨と稱せり、是れ天狗組なり爾來正義黨には藤田小四郎、田丸稻右工門、田中源三其他武田鴻雪齋の如き名士を出し、姦黨には市川三左工門、朝伊奈彌太郎等を出し正義黨は築波山、太平山に據り、姦黨は藩主を擁し屢々戰ふ所ありしも、正義黨は遂に失敗し姦黨の全勝に歸したり、然るに戊辰の亂起り姦黨は從來の行掛上より佐幕說を主張し西軍の爲めに敗北し、市川朝伊奈は兵士數百を率ゐて越後に入り、東軍を助け終に今再び水戸に向はんと欲するものなり、」斯くて長岡の兵は水戸兵と共に下野に出、皿戸に於て太田原の兵と激戰し之を破て馬頭村に進み水戸正義黨を打ち拂ひ夫より轉戰數回遂に水戸城に迫る、水戸の兵は市川等の察せし如く皆各地出陣し居り其城を守るもの甚少し、故を以て各

道の要所に守衛すること能はず、皆城下に圍集して本道間道の二路を嚴守す、是に於て市川等は本道に向ひ、長岡の兵は朝伊奈と共に間道に向ふ、市川等短兵急に火を放て本道より進みしを以て間道の水戸兵一時に本道に集て市川隊を防禦す、是に於て間道の守備解怠し、水戸兵は狹擊の位置に陷り守ること能はずして本丸に籠城す、市川等は家老山之邊の宅に本陣を構へニシ丸に壘を設け有名なる弘道館に火を放て激射す、此役たる、不意の襲擊に出たるを以て藩中の騷擾は勿論衣類什器其他の破壞頗ぶる甚しく、市在恂々たり、斯くて急變の各地に達するや、四方の官軍踵を接して裡門より來援し將さに陷らんと欲した る城も亦生色を帶びたり、而して市川及長岡の兵は外に援くるの兵なくして内に死傷の數を增し如何ともすること能はず、即ち兵を退けて銚子港に走る、此時市川等長岡兵に告て曰く我輩今や身を容るゝの地なく命を天運に任すの外なし、聞く我同志下總流山にあり、と、依て我輩は是より爰に趣かんと欲す、諸君は藩主の仙臺にあるあり、宜しく去て以て後圖を善くすへし、今日迄我輩の爲めに盡力されたる交誼を謹んで謝すと、長岡の兵之を聞て始めて市川等の意中を曉ると雖も今更如何ともすること能はず、相別れて船に乘り銚子に出で將さに仙臺に航せんとする時、高崎其他の兵士に看破せられ今發せんと欲する長岡兵に告て曰く若し降らずんば陸上より之を擊んと、我兵答て曰く主公未だ向背を定めず、我輩豈降るべけんやと、高崎の兵告て曰く長岡は已に仙臺に於て降服せり、必ず疑ふことなかれと、我兵遂に降る、爰に又會津坂下に於て新隊を組織したる長岡の兵は八月廿五日若松城の圍を解んと全力を注て淚橋に進擊し、端なくも大敗して數多の隊長兵士を失ひ、前後の進退爰に谷まりければ、全軍自滅の形勢に陷りしを以て寧ろ米澤に投し、該藩に依て恢復の策を講じ若し已むを得ずんば、仙臺にある所の藩主と共に死生を同ふするに如かずと協議し、各隊前後米澤領に入りしは九月上旬なり、是より先奥羽同盟軍の牛耳を掌握し居たる米澤、仙臺等の諸藩は形勢一變して危機已に迫るや、藩論亦一變し遂に米澤藩主上杉齊憲は九月四日其子茂憲は十一日越後口總督嘉彰親王に謁し賊を討て其罪を償んと請ひ、尋て仙臺藩主伊達慶邦を始め奥羽同盟の各藩皆謝罪降伏し、會津の外に東軍のあるなし、長岡の兵は斯ること丶は露知らず仙米兩藩は定めて軍備に汲々たることならんと思慮し敵の諸砦を潛行し檜原關門に入らんと欲するに、豈圖らんや庄内の兵之を支へて通行せしめず、我兵大に驚き其理由を詰問し、且我衷情を縷述す、番兵答て曰く今や官軍領内に充滿し諸藩謹慎中なり、若し官兵に疑る丶ときは我藩の落度となるの恐あり、諸君姑く兵

器を措て通行すべし、事落着の後は必ず返還せんと我兵大に驚き扨ては米澤藩は降伏せしかと始めて意外の形勢なるに心付しと雖も、斯くの如くなれは仙臺にある所の藩主一行の様子甚苦慮すべき次第なるを以て彼是れ爭ふの暇なく言ふがまゝに兵器を渡し千辛万苦恰も敵中を行くの思して上の山に至れば、豈圖らんや藩主牧野忠訓も仙臺、米澤を始め何れも降伏し到底自立する能はざるを以て、諸藩に從ひ米澤にある所の官軍總督に降伏することに決したるの報に接し、諸兵益其案外なるに驚き悲憤慷慨しつゝ仙臺に至る、抑も長岡城の陷るや河井繼之助は藩主一族を安泰の地に奉じ以て後ち安く快戰せんと欲したり故に前章に掲記せし如く藩主は廿四五名の家臣と共に會津に趣き更らに仙臺に趣きし處俄かに奥州の形勢一變して四面皆敵となり、恰も楚囚の如き地位に陷り加ふるに仙臺藩を始め米澤等荐りに降伏謝罪を勸告して已まざるを以て遂に意を決して九月廿三日米澤表總督府に降伏謝罪に及べり、然るに翌十月廿三日に至り總督府より牧野駿河守上京すべき嚴命あり、尚は親姻笠間藩にも左の命あり、

同姓駿河、大典を侵し王師に抗し剰へ城邑を脱し遂に軍門に降伏す、依之其藩へ御預ケ被成條嚴重に警衛可致旨　御沙汰候事、

但家來の者四人草履取壹人附添不苦候事、

十一月

斯くて又十二月に至り、

會米兩賊に連結し近隣諸藩を煽動し屢王師に抗衡、頗る兇逆を逞ふし後兵敗れ城陷り候得共、猶殘賊を募集頻りに拒戰に及び、更に悔悟無之候處諸賊追々敗衂に付力不能爲を知り終に伏罪候條、於天下之大典其罪難被差置依之城地被召上於東京謹慎被仰付候事、

但叛逆首謀の家來早々取調可申出事

十二月

爰に於て首謀者屆出に二ケの議論を生し甲は戰沒者河井山本を屆出て、可なりと謂ひ、乙は死者を屆出るは卑怯未錬なりと反駁せしが兎に角河井山本の外に今一名を屆出ることに決し、遂に抽籤を以て定ることゝなり三間市之進當籤し獄に降る、然れども幾月ならずして放免せらる、扨て又前記の嚴命に引續き

軍務官

牧野忠訓

行政官

今般城地被召上於東京謹慎被仰付候處出格至仁被思召を以て家名被立下更らに二万四千石下賜り、長岡城御預ヶ可被仰付候間血脈之者相撰早々可願出候事

十二月

以上の恩典に浴し閣藩始めて愁眉を開き、血統鋭牧野橘を以て家名相續の儀歎願に及び、後ち名を新次郎と改め長岡藩知事を命せらる

附章

山本帶刀君之傳

幼名堅三郎と稱し、弘化二乙巳三月七日長岡藩士安田氏の家に生る、父は安田渡と稱し藩祿三百二十石を領し、代々牧野家の臣たり、時に重臣山本勘右工門嗣子なきを以て君命を仰き、堅三郎を養ふて嗣子となし、名を佐傳治と改めしは堅三郎八歳の時なり、妻は山本氏千代と呼び、玉路初路の二女を設け、皆現今壯健なり、(本年明治廿五年妻千代四十三年長女玉路廿八年次女初路廿五年なり、)容貌は中丈中肉にして筋骨太く、眼中尖光を帶び、聲高く言語壯絶なりと雖ども、温厚謹直にして漫りに人と爭はず、頗ぶる莊重の風あり、文學を同藩伊藤翰藏に受け、九歳の時文選賦類を暗記し神童の稱を得たり、長するに及んで武藝を長島佐太郎横田大助に、軍學を佐野與惣左衛門に學ぶ、大に會得する所なり、山本家は牧野家創業以來譜代無二の重臣なるを以て家格に依り、部屋住中は新地五百石を賜はり、側用人となり、次て家老見習ひを命せられしが、慶應三年三月父勘右衛門歿せしを以て家督を相續し、山本帶刀と稱し、先規の通り高千三百石を知行し、家老職となれり、

當時は宙に長岡藩のみならず何れの諸藩も太平の余弊として皆文弱に流れ別て家老格の兒女は深閨の中に育てられ、爲めに世情に通せず、艱難を知らず、愚を以て終るもの比々たる中に、帶刀は毫も是等の臭味を帶びず、常に家從を率ゐて川に遊び山に登り、特に銃を携へて寒山に渉獵するとを好み、風雨寒暑に依て遊思を止むるが如きとなく、馬を數里に馳て扁幅を飾らさる等、皆世襲老職の擧動と異なれり、之れ畢竟家從に福原良右工門と稱する有名の良臣あつて、山本帶刀を保護教育せしに依りしと雖ども、亦其性の凡ならざるを知るべし、故を以て年紀僅かに弱冠を越ゑしに過きずと雖ども、其名聲は己に四方に傳達し、全藩擧て之に屬目するに至れり、雅名を竹塘と號し、書を能くし文を綴り詩を賦するもの皆其心底より迸出せざるはなし、今左に一詩を錄す、

渉獵多聞本無益、　讀書要在素心寅、
顧吾偏恥天資拙、　仰道彌嘆理蒙昧、
歲月恍如橋下水、　人生飄似陌頭塵、
壯懷閑日午時夢、　夢裡廻來一番春、

和赤水先生新年偶作芳醑以述素懷　竹塘義路。

慶應三年二月初旬、牧野忠訓の室江戸邸より長岡に歸城する途中に於て、上州の博徒櫻井常五郎なるもの官軍と僞り近隣諸藩を威迫し、關門を碓氷峠に設け頗ぶる騷擾を極はめしを以て已を得ず分家なる小諸城に入り止まると殆んど十有余日、而して其變の江戸邸に達したるは二月十四日なり、江戸邸にては櫻井常五郎の僞官軍たるとを知らざるを以て頗ふる心痛し、壯士三十名を撰拔し之を督するの人を求む、山本自ら乞ふて此の任に當り、即日出發晝夜兼行碓氷に至り、壯士を集めて、假令關門に於て相格鬪するに至るも互に助勢するとなく、早く小諸城に入るものを第一の功となさん、斯く言ふ吾にして寸斬せらるゝも諸士必す援ふと勿れと、諭解せし傾末は本文に於て詳記したる如くにして、是れ山本の事に當りたる始めなり、河井の家祿大改革の案出るや百石以上は何れも減殺せらるゝのみならず、家老職は非常の減祿なる故多少の不平者ありしと雖ども、山本は首として之を贊し、舊高千三百石を四百石に減せられしも能く家計を縮めて毫も其面目を失はず、又藩中に厚意を盡くし屢々中島練兵場に出でゝ諸士を鼓舞せり、閏四月廿五日大隊長を命せられ超ゑて五月六日河井小千谷に於て官軍に談判破裂するや、南方の將となり、每戰衆を勵まし頗ふる其功あり、五月十九日長岡落城するや、敗兵を集めて殿となり、栃尾に退き加茂

中島練兵場ハ藩ノ兵學校ナリ

上喰違ハ長岡城下南方ノ入口

八十里越ハ越後ヨリ若松ノ道路

に移り、更らに六月一日三條より今町の強敵を擊つに際し總督河井は間道より進み、山本は本道の隊將となり勇奮突擊遂に薩長始め十二藩の強敵を破り、爾來福井、百束地方に轉戰對抗すること五十餘日、艱難を乘と共にし、敢て差別あるとなし、七月廿四日策を決し長岡城を恢復するや、先驅して八町沼を潛行し官軍を驅逐して未曾有の激戰をなし、仝月廿九日再び長岡城の陷るや、必死上喰違ひに防戰し森源三等と共に短兵を以て戰ひ、各處皆破れ敵長岡に入るも上喰違ひの守り獨り破れざりしは、今尙ほ人口に膾炙する所なり、斯くて殘兵を率ひて八十里越に退き、川島億次郎と共に千本木、雨宮 倉澤等の諸隊を督して鞍掛山に陣し、以て北越の西軍を防禦し、會津坂下に圍集せる我兵と會見せず、然るに此の時坂下に集りたる我兵は新に隊を組織する爲め急使を馳せて山本、川島の一人を促徵せり、山本即ち川島に向て曰く、吾年少にして軍隊の組織に熟せず、希くは貴君赴きて万事宜く取計はれたし、然れども戰時の際なれば是れぞ永別となるやも知れず、依て今宵は吾れ自ら主人となつて貴君を饗應すべしとて、雞を割き村醪を啜め快談慷慨して別れしは果して知凶の言なりし、是れより山本は會津の兵と共に各地に轉戰し前記の如き不運に遭遇し、憤然胸を衝くと雖ども如何ともすること能はず、戸田藩の兵に護せられて飯寺の本陣に

送られし人名は左の如し、

山本帶刀　稻垣喜助　千本木林吉　倉澤彌五兵衛　雨宮敬一郎　篠崎繁右衛門　永戸九郎右工門　中島富彌　松井松五郎　內藤佐之助　神戸菊五郎　能勢彦太郎　中川音三郎　寺田善左衛門　高橋辰次郎　岡本甚十郎　安田代太郎　丸山菊五郎　渡邊平吉　渡邊三平　室橋政七、長相龜次郎、八木藤太、佐藤政吉　吉田玄太郎　高橋彦右衛門　佐藤伊之七　阿部彌龍太　長澤龜之丞　久保曾右衛門　田島十次郎　中澤虎一

斯くて官軍は山本帶刀等を糺問する爲めに別に一室を設け、諸將列座の上朝旨に背き官軍に抵抗したる不都合を責め、且つ山本の有爲男子たるを惜み若し降伏せば助命すべしと勸告す、山本自若として之に答て曰く德川氏は累代厚恩の主にして背くと能はず、特に德川氏に於ては謹愼待命の擧動に出で一も朝敵となるべき事實を見ず、然るに强いて德川征討の師に從軍せよとのと故弊藩は義を重じて再三歎願する所ありたるなり、元來我輩は主命を奉じて戰場に臨みしも其降伏の如きは主命にあらざるなり、已に就縛の辱を受く、死は元より期する所なりと、双手を後ろに縛せられ、面首前に俯すと雖とも明々たる兩眼は屹として諸將を睥睨し恨氣面上に溢る、語氣喑に薩長諸藩は暴威を振ふて朝論を亂るもの

なりとの意を含み、之を明言せんと欲して止ると數回、之れ官軍の稱あるが故なり、諸將山本を説破すると能はず、偶々席末にある藤村四郎（曾て山梨縣知事となりし人）山本を叱して曰く、普天の下率土の濱、王土王臣にあらざるはなし、汝が所謂層恩の主たる德川も亦王臣なり、天下豈二君あらんや、汝漫りに迷を執て君臣の義を誤ると勿れと、薩の淵邊高照（有名の驍將にして西鄕と共に城山に死す、）亦懇々降伏を勸む、山本斷乎として飽まで死を乞ふて已まず、千本木林吉雨宮敬一郎等亦降らずと答ふ、是に於て官軍即ち明日を以て刑戮する旨を申告せり、山本帶刀の家來渡邊兵吉（宮城縣書記官渡邊廉吉の兄）溫厚忠直にして平素人の皆感服する所、山本に奉する恰も影の形に沿ふが如し、此の時官に乞ふて曰く下卒敢て死の遲速を謂ふにあらずと雖も主人帶刀の遺骸をして空しく野原に曝露せしむるは、甚だ殘念に付願くは之を埋めて後ち死を賜はんとを、官之を許さず、兵吉又乞ふて曰く然らば主人の最後を見屆て後ち刑に就かん、官亦許さず、兵吉悲泣して曰く前者にして許容なくば最後の願あり、今宵主人帶刀の傍にあつて今生の看護をなさんと欲すと、諸將其忠を憐み之を許す、夜に入り寒風颯々骨に徹すと雖も山本身体疲勞夢を結んで前後を知らず、兵吉は双手を縛せられて身体自由を得すと雖も兩足を以て毛氈類を引寄せ口を以て之を山本の身体に被せ以て寒氣を防く等、其看護至らざるなく障を隔てゝ之を見聞するもの皆慘鼻の情を催さゞるなし、夜明けて山本は從容死に就き、其の余のものは悉く河原に於て何れも試めし切となりしを以て鮮血淋漓河水紅なると變じ、死体の浮沈臟腑の亂抗に付着する等、其慘狀實に見るに忍びざりしと云ふ、牧野家降參の際首謀の臣として河井繼之助、山本帶刀二名を屆出たるを以て其家斷絶せりと雖とも、明治十六年に至り家名再興の恩典に浴し、尙ほ明治二十三年憲法の發布と共に舊罪消滅し青天白日の身となれり」、戰爭中山本の養母及び妻子は所々に潛伏し、明治二年九月三日藩主牧野銚楠より同藩士陶山霜臺の嫡男左右平を百石にて召出し富士葛藤と名乘しめ、山本の遺族四人を扶助せしめたり、同三年の春富士及家族は遙々會津飯寺に趣き遺骸を埋めたる所を百方搜索し遂に其志を得すして歸れり、山本家の菩提所長岡神田町長興寺に空葬せり、戒名は大梁院忠獄義戰居士とす、明治二十一年君の親戚故舊相謀て長岡城跡に建、左に其碑文を掲く、

舊長岡藩山本君碑

遞信大臣海軍中將勳一等子爵　榎本武揚篆額

長岡渡邊廉吉君。持其舊藩山本君行狀。請余撰其碑銘。余因經緯其狀。序之曰。君諱義路。山本氏。其先武田氏。名臣山本晴行兄也。仕德川氏。隸牧野康成。屢有先發之功。康成遂與祿一千三百石。爲藩宰。世襲至勘右衛門。好學嗜武。更張藩政。爲幕老樂翁公所知。屢執謁建策。多所暗輔云。勘右衛門五世孫。即君也。君初稱堅三郎。實同藩安田渡子。渡以勘右衛門孫。出嗣安田氏。妻其家女生君。君甫八歲。會山本氏無嗣。藩主命嗣之。更稱帶刀。襲先職。君天資英敏高邁。音吐如鐘。言論尤明晰。幼好讀書。二行並下。稱神童。長學武術。槍刀弓馬莫不通。平居無事。弄文墨以娛。明治戊辰。官軍之入越後也。君疑其矯勅。勸藩主拒之。以大隊長督戰。百敗不撓。及長岡城再陷。猶赴會津謀恢復。戰至飯寺村。會朝霧晦冥。誤陷官軍重圍中。遂囚陣中。官軍愛其膽略勸降。君慢然厲聲曰。吾聞藩主命戰。未聞命降。抗論不屈。遂與侍臣豹吉同斬。君年二十。豹吉二十七。幼侍君。爲人溫篤忠實。君之學文武於藩校也。未嘗不隨行同演。故其業並進。君敬之不敢臣視。情如兄弟。終同死。亦不偶然。豹吉渡邊氏。實廉吉君兄也。君亡後。藩主出降。朝廷以其罪出君謀。命絕其嗣。終免藩主。其後恩赦。再興家。君妻山本氏。生二女。長曰ナ治。次曰ニ治。親戚相議。以相治承祀。於是。廉吉君故舊。相謀建碑長岡城跡。紀君事。其主之忠烈。並表朝廷之特恩。

銘曰。

名門不虛。　果出名士。　允文允武。　盡忠所仕。
桀狗吠堯。　其心何恥。　天恩寬恕。　父母之比。
順逆不問。　一視如子。　名門奕奕。　永存其祀。

明治廿一年七月

大審院檢事從五位　三島毅撰
內閣書記官正五位勳四等　巖谷修書
井龜泉刻

河井繼之助君之傳

君諱は秋義、蒼龍窟と號す、蓋し其庭園松樹多きを以てなり、文政十年正月元旦越後國長岡の家に生まる、父は代右衛門秋紀といひ、俸祿百二十石を食み勘定頭を勤めけるが、後退隱して小雪と號し閑散自敵餘生を送れり、母は長谷川慧敏にして巧みに家事を理め、最も暗算を善くし、記憶に富み女流には珍らしき人なりけり、偖て和漢の史傳を按するに栫は二葉より馨しなど唱へ、苟くも功を後世に傳へ名を竹帛に垂るゝ英雄豪傑の士は必ら

すや、竹馬に跨りて犬を追ふ總角の頃よりして早く既に衆に秀で、群に超もるの言行ある者の如くに昔なせども、英雄豪傑の士なればとて強ちに然か定まりしものにはあらず、惟ふに浮誇過實の筆癖ある東洋の史傳家が英雄豪傑の事を記すに當り、其の超凡異常なるを彰はさんとて、中には空中に樓閣を築き實なき事を作爲して蛇足を添へしもありぬべき歟左は云へ彼の事實を主とせる西洋史傳の中にも亦間々斯かる記事なきにあらず、例へば彼の歐州を席卷して驚天動地の大業を創めたる佛帝那翁は兵學校の生徒たりし折雪の礫の戯れに非凡の挺動を示し、又た彼の獨立の義戰に將として、空前絶後の偉勳を建てたる米國の大父華盛頓は、故鄉の痒序にありしとき常に練兵科の首將と仰かれ、彼れといひ此れといひ。英雄豪傑の素早く幼時に顯れたりとぞ聞へける、去れば斯かる例しもあるもの也君も亦幼き折より不羈剛放の氣象ありて、群兒と遊び戯るゝに嶄然頭角を顯はし、己れより年上の者を凌ぐことさへ屢々なれば、中には其を怨み憎むも尠なからず、君が九才の頃にやありけん、遊びの友に十四五才の惡童あり、深くも君の振舞を憎み羨み折もあらば痛く苦しめて遺らんものをと待つ程に、咫尺の間も分ちがたき最も暗き夜のありければ、是れぞ屈强の機會なれと直ちに君の家を訪ひ音づれ、頻りに外出を促しけり、母親は君が

出で行かんを危みて夜中の外出よろしからずと切に制し止めしかど、君は中々聞き入れず吾今宵彼れの誘ひに應せずば暗夜に恐れて外出を辞めり日頃の振舞に似もやらぬ臆病者なり卑怯者よと遊びの友に笑はれん、之れ口惜しき事ならずや、彼は年こそ我に勝れ亦た何程の事をかなし得んと母の止るを耳にも入れず、誘はるゝが儘に出で行きしが寐よとの鐘もはやすぎて九時(今ノ十二時)ならんと覺ぼしき頃獨り家に歸り來つ直ちに臥戸に入りければ、誰心附く者のらざりしが夜明て見れば惡童に打擲されしか無殘にも頭顱に數ヶ所の毆疵ありて鮮血淋漓と流れ出で、枕蓐の嫌ひなく血汐に染まりて紅ゐなり、母親は斯くと見て打ち驚き繼之助よ〳〵と呼び覺まし最と不審しき此の毆疵、抑も如何にして出來せしか疼うはなきか如何にぞと、流石は女の懇ろに問ふも此方は平素の顏色、吾れ幼けれども男なり、箇計りの疵疼うて如何にせん昨夜少々毆れしかど我も毆ちて返へしたれば意に介かることはなし、母上左な心配し玉ひそと、應答宛ながら成人の如く、勇膽剛氣面に顯はれ越路の麒麟兒此れならんと末頼母敷不見ぬたりける、

君は前にも記す如く幼き時よりして兎角に荒々しき遊を好み、勇々しき振舞多かりければ、自づと身体健かに殊に脚力人に勝れ健歩疾走誰れ及ぶものなく、また足の爪先を内の方

へ酬へし指の背にて敷石の上十五六間の處を往き來するなど、奇しき戯れに妙を得たりしが、嚴父は君の追々長ずるに從がひ遊戯三昧に可惜光陰を費やしては、後々の爲め惡しかりなんと思ひ、一日君を膝下に招き懇ごろに訓す樣、偖て繼之助よ、卿も存じ居るならん青春再び來らず白日空しく過すなかれといふことあり、人は青年の折に學ぶべきことを學はずば遂に終身の悔いあるものなり、今倩々卿の振舞を見るに、兎角荒々しき遊びを好み常に近隣の童兒を集めて腕の力を競ひ、脚の強さを爭ふて更に餘念なきもの丶如し、是れ不心得の至りと申すべし、凡そ士と生まれては身は文武の道を辨へすんば叶はぬものなり假令半日に百里を走る太保の壯脚あるにせよ、將た一拳に猛虎を斃す武松の健腕あるにせよ、文武の兩道を辨へすば爭でか眞の士と申さるべきや、去ば吾早く卿に文武の兩道を學ばせばやと、夫れ〳〵良師を撰みて深く賴み置きたれは、卿も今日よりは心を改め鋭意專心文を修め、武を講じ、治に居らば主君の御政道を翼賛せんと心掛け、亂に臨みては主君の御馬前に討死せんと覺悟し、亂となく治となく天晴忠勤を抽んで揚名立身の程を圖かられよかしと、有けるに、君も嚴父の敎訓實に理りなりと思へば、敢て一議に及はす、その指圖に從ひて、夫れ〳〵と入門し、只管諸般の修業に從ひて心を傾けり、去りながら不羈剛

放の性質とて書は姓名を記すに足るのみ、劍は一人の敵學ぶに足らすと、楚の項羽がいひたりけんうの語を一とたび耳にしてより、深くも之を喜び、常に之を口にして習學を厭ひまた劍技を修めず、唯だ砲術のみは痛く好みて學びけるが、好きこそ物の上手なれ、後には百發百中の妙を得て師範の人々にさへおさ〳〵劣らぬ腕前とはなりぬ、去れど君は射擊の術たる的中が肝要なり、如何に姿勢などの方式に精しければとて的中せざれば何の役には立たざるべしとの意見にて、只管的中のみを心掛け、姿勢などの事には少しも頓着なく、百事師家の方式を踐まざるより師家の擯斥を受けたり、幼時馬術を稽古する所にも同樣に毫も方式を守らす、馬背跨ると見れば早く既に鞭を擧げて疾驅奔馳を事とするより、師家は屢々「おりさつしやい〳〵」との号令を下したれとも、君は乘馬の術たる馬を走らすと馬を止むるとを辨へ居れば、夫にて充分なり、區々たる方式何の實用をか爲さんと、更に師命に從はざりしと、また常に人に語りて曰く古より武士の家を指して弓馬の家といへど予は寧ろ之を砲艦の家といはんと、何となれば方今の時勢既に弓馬の如きはその用をなさす、實際戰陣とならば攻守の要具砲と艦とに若くものあらざる可ければなりと、又その頃の習はしとて學生等は博覽多讀を鼻にかけ、吾れは一日に幾十卷の書を讀み了れり、吾は一夜に

幾百枚の書を閲し盡ぬなど、誇り顔に語り合ひ徒らに齒齋に兀座して宇何の穿鑿に汲々とし、更に一點の實行なく腐儒迂學の多かりけるが、君は全く此れと意見を異にし、蠹魚となり活書となりて、一世を書冊の裡に空過せんと思ふ人々は斯る學問の仕方にても間に合ふべけれども、余の學問をなすは其主意實行の資料を養はんとするにあれば、決して博覽多識を貪るに及はす、唯た己れの實行せんと思ふ事柄の資料となるべきものを撰び、其を能く肺肝に銘刻し、事に臨み、機に應じてこれを活用するを得ば夫れにて事足れりと、專ら眼を主要の點に注ぎ、字音句讀の如きは捨てゝ顧みす、卓然時流の上に立ちて一己の見識を立てたるこそ殊勝なれ、されば後ちに至りて藩學の教師に擧げられたること、前後二回に及びたれども、教鞭を執りて子弟に教授するは、他に自らその人あり、我等如きの能く任ずべき所にあらすと、二回とも半歳ならずしてその任を辞したりけり、既にして君大に思ふ所あり、斷然父母の膝下を辞し笈を百里に負ふて江戸に出で、當時都下に帷を下して子弟を薫陶する中に、最も鴻儒の譽れ高かりける幕府の儒官古賀茶溪、藤堂侯の儒臣齊藤拙堂、眞田侯の儒臣佐久間象山等諸先生の門に歴遊して得る所あり、一旦歸國せしは、是れ實に嘉永五年の事にして君が二十五歳の時なりけり、

天に一片の雲なくして大陽光り明らかに、地に一陣の風なくして四海波靜かなりければ、万民漸く太平に狃れて只管逸樂に耽り居たる折柄、或る日の事とて一朶の黒雲天の一方に騰るよと見ねしが、忽ち激浪迎卷來りて相洲浦賀の沖に四ッの小島浮き出で不思議の事もあるものよとて近寄り見れは、是れなん浮島にはあらで、其頃人々の恐れたる黒船四艘の來りて錨を投せしなり、偖ても此の黒船は何用ありて來りしやと繹ぬるに、北米合衆國か西隣の或邦と修交貿易の條約を締結せんと水師提監ペルリを使節に立て其を警固のために斯く軍艦四艘を送りしとなり、抑も廣き世界の其の中には修交貿易に名を藉りて、機を窺ひ隙を狙ひ他國の領地を攻め取らんとの野心を懷ける國々もあらんかなれど、今使節を送り越せし北米合衆國に限りては、然る企て絶へてなく其の北海の北、南山の南、車通し人跡到る土地ならんには如何なる國にても、條約を取締はんと勸ひるは、皆之れ有無相通じ長短相補ひ、人類相愛の誠を盡くし、四海兄弟の實を擧げんと、殊勝の心に出づるものなれば、斯かる國より使節を送り條約を要め來りしとて、敢て立ち騒ぐには及ばぬことながら、宇内の形勢に暗き悲さには無識の人はいふも更らなり、堂々たる天下の要路に當れる諸有司まて使節の眞意を酌み兼ねて、果ては疑心に暗鬼を生じ弓よ太刀よと騒めきければ

國中自ら物騒しく忠奸邪正打ち交り彼方に鎖港攘夷を唱ふれば、此方に開港互市を說き、横議百出人心恟々譁へん方もなかりけり、此の時君は江戸の藩邸にありしが、此の騷擾に接して大に打驚きスワ國家の御大事こそ起りたれ、豫ねて斯くと知りたらんには、君侯にも御諫め申し今少しは江戸御屋敷の兵備をも整置すべかりしに、打ち續く太平の世なればとて、馬は華山の陽に遷し、牛は桃林の野に放ち然るべき備へも致し置かざりしは臣たるものゝ不注意とかし、必定君侯にも警固手薄の段御心元なく思召すならん、臣たる者か犬馬の勞を致して數代の御恩に報すべきは寔に此の秋なりと、直ちに故郷に立歸りて所有の田圃を賣り代なし、數百金を得たれば心知の壯士廿四名を語らひ、共に故郷を出發し晝行き夜走りて、江戸邸に抵り斯くと言上致しければ、君侯も其の心掛の殊勝なるを嘉せられ部屋住ゐながらも抜擢して評定方隨役を仰付られ且つ新地三十石を賜はる旨の恩命あるしが、是れ君が二十六才の時なりき、然るに君は聊か思ふ旨ありければ、翌日即ち安政元年の正月に其職を辞し、一先づ長岡へ歸りぬ、

安政三年父代右衛門氏仕を致して隱居の身となられしかば、君家督を相續せられぬ、大概の人物ならんには、已れ一たび家督を相續して一家を主宰するに至れば、早や老成人を以て自ら居り、壯志鴻圖何時しか消へ去りて妻子團欒の小康に汲々たるものなるに、君は然らず、一家の俗事身邊に蝟集するも更に宿志を渝へず、益心を金鉄に堅め、いよ〳〵望みを高遠に馳せて、日夜怠たる所なく、評定方隨役辞職の後は蘭學を始め研修其だ勉めたれども、藩廳より蘭學禁示の令出でたるに付き、止むを得ずこれを廢したり、尤も再び江戸に遊學せんとの望みありければ、屢々其旨を藩廳へ申出で只管許可を乞ひたれども、君の氣象如何なることを仕出さんも計り難しとて、兎角に許可なかりしが、强ての請願默止がたくやありけん、安政五年の臘月御用仕舞の當日、即ち二十八日に至りて漸く許可の沙汰ありければ、君は痛く打ち喜び、家事は家人の手に任かせ已れは即日笈を負ひ江戸を指して出て行きぬ、越路は雪の名所とて早や皚々たる銀世界、朔風凜々膚を刺し、飛雪紛々面を撲つ寒風頗る劇しかりければ、或人君を留め今しも三冬沍寒の候、孰れも業を廢し勸めを休み炬燵に暖を貪りて寒さを忘れんとこそするなるに、强いて寒氣に冒されなば、身に障ることもあらん、一陽來復の時節を待ちて起行せらるゝとも敢て遲くはあるまじと、いひけるに、君は之に答ふる樣、御注意誠に辱けなくは候得共、雪中の旅行も亦た隨分興味あるものなり、試みに思はれよ旅店の宿泊、立場の休息雜沓せさる一事のみにて、慥かに千

金の價はあるべし、など打ち戯れ袖振り拂ひ颯々然と出で行きしには、人々舌を卷きしとなん、勇める心に疲れなし斯る寒氣の折柄にも内に勇める心あり、外に勞れを感ずるなく七寸の草鞋能く六尺の積雪を踏み破りて、思ひしよりも速かに江戸表へは到着しつ、再び古賀先生の門に入りぬ、暫くありて君倩々考ふるに凡そ經國濟世の大業を起さんには、廣く海内を周遊して普く天下の豪傑と交り、傍ら風俗を察し人情を觀ること肝要ならんと、四方の志し勃として起りければ、まづ其趣を藩主に聞え上げ、道を東海道に取りて西遊の程に上りしは翌年六月中の事なりけり、今でこそ海には汽船、陸には汽車、百里一飛の便あれどもその頃には道路險惡にして兇賊白昼に横行し、行旅の困難いふべからす、江戸に居て長崎と聞けば、異國も同樣の思ひを做す、その一事にても旅の不便は推されど、前途に大志を懷ける人は、亦格別の者にして、君は千辛万苦も敢て辭せず曉鶏に立ちて晩鴉に宿り、日數程經て備中國松山に着きければ、まづ藩の儒臣山田方谷先生を訪音れけり、抑も此の方谷先生といへるはその頃治國の學に長すとて、名聲四方に喧傳せる人にして、君一たび先生に接するや、意氣相投じ論する所識する所、着々心に適ひければ、思はずも茲に駐まること數日の久しきに彌り、夫れより中國九洲の各藩を歴遊して到る處細かにその政務を察し、且つ豪傑名士を訪ふて國事を談論し、大に發明する所ありしが、元來君は佐久間象山先生の門にありし頃よりして、早くも開港止み難きを悟りければ、今度は幸ひの序で長崎に抵り親しく洋人に接して宇内の形勢を質し、他日の資料に共せんと、遂に同地に趣きけり、

君長崎に駐ること數月、一日洋人某の門を叩きけるに、主人出で、君を客室に延き、四方八表餘話中君は宇内の形勢に就きて種々の問を發したるに、主人は懇ろに應答し、且つやがて地球儀を取出し、碁の如くに布き、星の如くに羅れる國々の位置を一々指點し、其版圖の廣狹人口の多寡、物産豊缺風俗の醇理より、政躰の良悪兵備の整否に至るまで、何にくれとなく最と詳らかに物語りければ、君大に感悟する所あり、深く其の厚意を謝し辭し歸り、獨り窮窓の下に兀座して、蹟々思ふ樣、吾れ先きに佐久間象山先生の門に在りし頃世間の廣き邦國の多きは先生に聽きて略々其端を窺ひたれども、精微なる地球の儀に就きて一々指數を受けしは今日か始めてなり、我が瑞穂國は日出ぢて世界第一の國柄なり、彼れ亞米利加何者ぞ、歐羅巴何者ぞ皆是れ腥臭を帶ぶる所の蠻夷なり、交はる勿れ、近づくべからすといふもの滔々たる天下比々是れなりと雖とも、是れ畢竟井蛙の管見のみ、今夫

れ我國に以て世界の全躰に比すれば、其小なること實に渺々たる滄海の一粟ともいふべき程なり、然るを知らずして濫りに、鎖國を唱へ攘夷を論ず、所謂螳螂の斧を振ふて龍車に向ふ者、實に無謀の極にして沙汰の限りといふべきなり、去ながら國小なればとて、宇内に雄視すること叶はずとはいふべからす、彼の英國とやらは其の本國をいへば二三の島嶼にして、地勢酷だ我に似ると雖ども今や國光四海に輝き、世界到る所領地あらざるはなく其の一顰一笑は直ちに萬國の治亂に關するといへり、去は我か國小なりと雖も今より彼れの文化を輸入し弊政を矯め、良法を布き、國實を裕かにし、兵馬を練らば、萬國對峙の間に立ちて、國に宵だに國躰を維持することを得るのみならず、世界萬國の上に傑出すること亦難きにあらざるべし、去れど、我が國を此の美域に躋らしめんとならば、官職を世襲にするの陋風を廢し、廣く人才を登用するの途を開くこと肝要なり、我れは門閥なり、我れは名族なりとて一卷の系圖を萬里の長城に擬し、己れ德なく才なきに父祖の遺跡を繼ぎて、濫に顯要の官職に進み、身には錦繡を纏ひ、口には珍羞に飽き、日夜に酒宴し、朝暮に酣歌する如き人物は、其の數假令ひ千を以て數ふるも將た何の用をかなさん、否な此等は人才の發達を妨げ、元氣の阻喪を釀すの媒となり、國家を荼毒するもの敢て鮮少ならす、若し夫れ富國を望まんか、錦嚢の妙訣人才を登用するにあり、若し夫れ强兵を望まんか、千金の秘法人才を登用するにあり、實に門閥を排け、人才を擧ぐるは今日の急務ゲかしと、屹度思案を定めたり、君が後々に至りて、政務に兵事に、改良を加へ、大ひに齋習を洗濯したるの素因は此の窮窓兀座の間に孕み出せる者、蓋し其の半に居るといふべき乎

君既にして長崎を出立し歸途再び備中に過ぎり、方谷先生に面して分袂以來見聞の間に感ずる所を述べ、尙ほ其の意見をも叩き年を跨へて、万延元年に江戸に歸り、また〳〵古賀氏の塾に入り、文久元年に至りて、始めて長岡に歸りぬ、聞く君備中松山に在りし折、同藩士と交り方谷先生が藩治の上に行ふたる改革及び、理財の道等を探問したる由にて、其の後方谷先生江戸に來り君に面會して、其の談話を聞き探問の詳密なるに一驚を喫したる事ありしといふ、

君各儒家の門に在るや、放恣磊落誦莚に侍せず、詩文を作らず、唯だ偶ま己れの欲する書籍を繙くあるのみ、而して君が遊學中、最も愛讀せしは王陽明の著書、李忠定の文集、古今の奏議にして、中にも李忠定の文集に至りては一たび之を繙くときは、寢食をも忘るゝ計りなりき、尤も文集は當時就きて購ふべき書肆あらざりしかば、古賀氏の藏書を借り、